

多(°)(°)「ファツ！！
ワイがスタンド使い
に！？」

奈落への流星群

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

やきう民がひよんなことからスタンドを身に着けてしまう。

だがスタンド使いはやきう民だけではなかった。

スタンド使いはひかれ合い、なんでも実況jを巻き込み死闘を繰り広げることになる…。

目次

覚醒の j	1
左右対称の j	22
命令に背く者	J 39
J, 爆走せよ	前半 59
J, 爆走せよ	後半 78
j の追手	96
生まれ、j 民	119
動け、j 民	140
鏡の世界 v s 時の止まった世界	167
電撃の j	181
炎の j	前半 202
炎の j	後半 220

元凶の j	235
運命の J	1 249
意外！それは新春のご挨拶ッ！	266
運命の J	2 277

覚醒のj

シ(。(。(。「ハア…。今日もコンビニ店員の仕事疲れたメンスなあ…。」

シ(。(。(。「クソしようもないクレーム聞いたり、陰キヤの声はぼそぼそで聞こえへんし…。」

シ(●(●(。「ほーんま嫌になるで…。」

シ(―(―(。「…。」

シ(。(。(。「今までロクに勉強もせずに遊んでたワイが悪いんや。この人生を受け止めるしかないんやろなあ…。」

シ(。(。(。「さっさと帰ってなんjして寝よ!!」

~~~~~

ドアガチャリ

ジ(。(。(。「ただいまやで。っていつても誰もおらんけどな。」  
ジ(。(。(。「さて、なんjなんj…つと。」ポトポチポチ

ジ(。(。(。「やっぱなんjは最高やね!!」

ジ(。(。(。「やっぱレスバのコツは冷静さを保つことやな!!」

ジ(。(。(。「さーてと、レスバもワイが勝利したし次は何見ような?」

お前らが一番欲しいスタンドなに?

ジ(。(。(。「何番煎じのスレやねんこれ。いつつも見かけるわ。」

ジ(。(。(。「どうせみんなヘブンズドアかスタープラチナやろ。」

ジ(。(。(。「ワイは単純脳みそ共とは違うねん。なんか少し捻ってマイナーなスタンドでも書くかあ。」

ジ(。(。(。「ハーミットパープルなんて良さげやないか? 念写もできるし、アイドルの風呂シーンなんか見えるんちゃうか!」

シ(。(。(。「えーと、ハーミットパープルつと…。」ポチポチ

10 風吹けば名無し

ハーミットパープルとか欲しいわな。念写で美女をのぞき見るんや。

11 風吹けば名無し

>>10 きつしよ スタープラチナ一択やろ

シ(●)(●)「なんやねんお前!!ザ・ワールドで時止めて犯罪とかいうしようもない  
レスよりかはマシやろ!!」バアーン

シ(●)(●)「こーなったらレスバや!レスバ!!」

数十分後

シ(。(;(。「ボロボロに負かされたわ。もうええ。寝るわ…。」

シ(—)(—)「おやすみやでー。」

~~~~~

シ(^(^(。「ふあゝよう寝たわ!!」

シ(^(^(。「今日はバイトも休みやし、ずっとゲームするで!!!」

シ。(。)(。)?」

シ。(。)(。)[「なんかワイの体に違和感があるで…。」

シ(●)(●)[「ああああああああああ!!!かゆい!!!」カキカキ

シ(●)(●)[「ほげええええええええええ!!!」グサツ

シ。(。)(。)[「え?今グサツて…。」

シ。(。)(。)[「ファツ!!なんやこれ手を何か鋭い物で切っている。そしてなんやこの

背中にある謎の感触は…。」

シ。(。)(。)[「トゲトゲしていて、そして植物の根のような感触…。」

そうしてワイは背中をゆっくりと見る…。

ワイは戦慄した。

後ろには、漫画で何回も見たあのハーミットパールが背中に張り巡らされていたん

や!!

シ(●)(●)[「ハーミットパールやああああ!!!」

シ。(。)(。)[「なんでハーミットパールが背中に…。」

シ。(。)(。)[「もしかして昨日のスレに書き込んだからか!?だとしたらこれは…。」

シ。(。)(。)[「戻れ!!ハーミットパール!!!」

ハーミットパール「…。」ヒュン!!

◇(。(。(。「ホントに戻ったやで…。」

◇(。(。(。「まさか…。ホントにワイが…。」

◇(。(。(。「ファツ!!ワイがスタンド使いに!?!」

~~~~~

ワイはバイトの休日を生かして、ハーミットパープルを使いこなすため練習に時間を費やした。

そこで分かったことはやっぱりこれはジョセフが使っていたジョジョ三部に出てくるハーミットパープルであり、ホリイのように暴走の危険性はないということとだけやった。

そしてハーミットパープルで遊んでたらいつの間にか午後11時になってたわ…。  
まあ起きたのが午前12時なのが悪いんやけどな。

◇(。(。(。「本当にスタンドが貰えるんやったら、ヘブンズドアーにしとけばよかつたわ…。」

◇(。(。(。「発現したのはあくまでハーミットパープルのみで波紋は一切使えんし…、

クソみたいなスタンドを貰ってしもうた…。」

ジ  
シ(。(。(。「しゃあない、ワイのバイト先のjkでも念写するかあ…。」ハナホジホ

シ(。(。(。「つってポラロイドカメラないやんけ!!!」ガーン

シ(。(。(。「しゃあないAmazonで買うかあ…。」

シ(。(。(。「つってポラロイドカメラ2万円近くするやんけ!!!もういらんわこんなスタンド!!!」

シ(。(。(。「はあ…。見え張って変なスタンド貰わなければよかつたわ…。」

シ(。(。(。「お、でもテレビでも確か念写できたはずよな。テレビで念写するかあ。」

シ(。(。(。「頼むからDIO様がJKのところにいるいでくれよ…。」

シ(。(。(。「ハーミットパープル!! JKを念写しろおおおお!!!」グワツ!!

ハーミットパープル「…。」グワワアアアンンン!!!

TV「JK「ポイントカードはお持ちですか?」客「いえ。」」

シ(。(。(。「お!コンビニ内の映像が流れとるで!!」

シ(。(。(。「そーいやJKちゃんは今日勤務やったな…。暇やし寝るまで見させてもらうで!!」

多(。(。(。「いやあJKちゃんはいつもサバサバギャルしててかわええな!!」  
多(。(。(。「てかローアングルにできないんか? パンツ見たいやで!!」

多(。(。(。「ハーミットパープル!! ローアングルにしてくれえっええ!!!」  
ハーミットパープル「:。」グオオン

多#(。(。(。「つていやなんで頭頂部映すねん!! 下やいうとるやろがい!!」  
「おい下やって!!」 「もうちよい右!!」 「いやなんでまた頭頂部写すねん!」

「お前感情あんのか!」 「いやだからエロ本写すなー!!」 「新作ポテチの情報はいらん!!」

多(。(。(。「なんやこのスタンド:。」

多(。(。(。「つて今度はなんや。急に商品棚を映しやがって。」

多(。(。(。「ん? なんか店の商品棚の奥でコソコソしてるやついるなあ。」 ジー

多(。(。(。「もしかして万引きとちゃうんかなあ?」

多(。(。(。「お? 商品棚からなにか盗んだやで!!」

シ（へ）（へ）「まさかの犯行の瞬間を捉えるとはなあ!!」ウキウキ  
シ（へ）（へ）「コンビニは家から徒歩10分くらいやし、ダツシユで行けばすぐ捕ま  
えられるやで!」

ほな! いくか!!!」ドアガチャガチャ タツタツタツ

TV「JK「あのーばつちり万引きしてるの見えてますけど。」男「え? ナンデスカ…。」  
JK「惚けないでもらえますか? とりま商品さえ返してくればそれでいいんで早く  
返してください。」

男「イヤ、シテナイツス…。」JK「ブツブツ言つてないで早く…。」男「うるせええ  
!!!」

JK「ちよつ警察呼びますよ?」男「うるせえつつて言つてんだろ!!!」

男「どいつもこいつも俺をさんざん馬鹿にしやがって…。」JK「は? 急になに!? 近づ  
かないでください!」男「スタープラチナツ!!!」ザアアアアア

~~~~~

多()()「いやあ万引き犯なんか捕まえたらワイの評価うなぎのぼりやろなあ…。」
 ドキドキ

多()()「かつこいい決め台詞でも用意しとこうかね。」タツタツタツ

多()()「おじゃましますやでー」ドアガラガラ

多()()「ん？」

店に到着したものの、人の気配はない。

店内は静まりかえっている。

そしてワイは大量の血痕を見つけた。

多()()「なんやこれ…。なんで店内が血で染まってんねん。」

多()()「JKちゃんは？あと客はどうしたんや!？」

男「ハハツ…アハハ…。」

多()()「なあそのホームレスみたいな身なりしてるその万引き犯。」

多()()「店の人や、客はどうしたんや？」

男「ハハツ…アハハ…。」

多()()「なあ聞こえてないんか？てかなんやコイツ顔キモいし、年齢は38つ

てところか？」

多() () 「社会人の風格は一切感じられへん。もしかして糖質かいな。」

多() () 「にしてもこの生臭い血はなんや？レジ後ろから匂うなあ。」クンクン

多() () 「おいおいおいおいおいおい。まさかこれ…。」

レジ後ろで無残な姿の死体が6つ転がっている。

なかには女のような姿も見える。だが顔はぐちゃぐちゃで判別できそうにない。

だがワイは直感的に察していた。

この死体の女の人はJKちゃん、残りは男性客と控えの店員だということ。

多(●)(●) 「おいその万引き犯。」

多(●)(●) 「お前がやったんか？」

男「ハハッ…アハハ…。」

多(●)(●) 「質問に答えろや。」

男「そうだよ。」アハハ

男「みいーんな。俺が殺した。」アハハ

男「ハハツ…アハハ…。」

シ(●)(●)「悪いな。少し縛らせてもらうで。」

シ(●)(●)「ハーミットパープル。」

男「スタープラチナ。」

シ(○)(○)「な!？」

シ(。)(。)「体に茨を巻き付けて…。」

スタープラチナ「オラオラオラオラオラア！」

シ(○)(○)「うぎやあああああああああああああ!!!」

バキゴキバキゴギヤアツ!!!

男「拳に茨の傷…。」

男「そしてハーミットパープル？そうか、つまりあのスレに書き込みお前も、スタン
ド使い、になったってわけだ。」

男「だったらなおさら殺さなきゃなあ…。」

男「この世でスタンド使いは一人で十分だ…。」

多(。)(;) (ア、アカン。完全に調子に乗っていた。俺だけが特別な存在だと思いついていた!!)

スタンド使いはワイだけじゃないんや。きつとあのスレに書き込んだなんJ民全員がスタンド使いなんや!)

男「おいおいおい。さっきの威勢はどうしたあ…?」

男「もちろん勝つつもりなんだよな? ハーミットパールでスタープラチナに!!」

多(。)(;) (さっきのスタープラチナのラッシュ。ギリギリのところまでハーミットパールを体に巻き防いだ。だが防いだとしてもこの威力!! 勝てへん…。ワイのスタンドじゃあこいつには勝てへん!! 逃げるんや、こいつから逃げるんや!!)

多(。)(;) 「ハーミットパール! ワイを店の外へ引つ張れエツツ!!」

ハーミットパール「…。」グワワアアアン!!!

ドサツ

◇(○)「いつもこうや。自分自身を過信して、酷い目に合う…。いつも同じことを繰り返したはずなのにまた過信してしまったんや!!」

◇(○)「あいつはまだ店の中にいるがワイはもうすでに店から10M以上離れた。逃げ切つて見せるで…。」

タツタツタ

ヒュンツ。グサツ。

◇(○)「(;)」うぎやあああああああ!!!!!!」

◇(○)「(;)」5、500円玉がワイの左のふくらはぎにめり込んだ!!」

◇(○)「足が、足が動かへん…。」

◇(○)「(なんとというスタープラチナの投擲技術!!)」

男「ふふ、最初から万引きなんて甘っちょろいことをせずに、殺して奪えばよかったんだ!!」

いい気分だ。圧倒的な力の前に人があつけなく血を流し倒れこむさまは…。」

男「防犯カメラは万引き前にあらかじめ壊していた。あとはお前を殴り殺して証拠は

消え失せる。

ジョジョ作中でも言ってたなあ。スタンドは法で裁けないってな。」

男「サア。次は右足だあ。」

シ(。)(;)「くつ。ハーミットパープル!!」ブウワワアアン!!

シ(。)(;) (電柱から電柱をハーミットパープルでターザンのように移動する!! さすがに空中を舞うワイに的確な投擲はできないはずや!!)

男「くそつ、距離を離される。今ここでの殺害は無理そうだな。」

ウーウーウー。ウーウーウー。ウーウーウー。

シ(。)(;)「この音はパトカーや!! JKちゃんはスタープラチナで殺されそうになりながらも通報装置を作動させていたんや!!」

警官A 「ここか、通報をしたコンビニは。」

警官B 「ええ、そのようです。」

シ（—）（—）（まずい。パトカーから降りて、男のいるコンビニに向かっている…。）

シ（—）（—）（あのコンビニの血痕を見たら確実に警官たちは殺される。）

シ（—）（—）（だが、あの警官たちに男が手間取っている間にワイは逃げる事ができる!!）

シ（—）（—）（悪いがワイは聖人やあない。そのまま逃げさしてもらおうで。）

ワイは電柱をターザンのように移動する。

あの男がいない方へと。

せつかく命からがら逃げてきたのにバカみたいなことを考える。

あの警官たちを助けたいと。

助けられるわけもないし、そもそもあの男ともう一回対峙してまた逃げれるかも分からないのだ。

シ（—）（—）「ワイは今までの人生で逃げ続けてきた。」

シ（—）（—）「勉強も受験も恋愛も人間関係も就職も全部全部逃げてきた。」

シ。(。(。) 「あの男のもとへと向かっている警官も、殺されたJKちゃんもきつと人生に立ち向かってきたはずなんや。」

シ。(。(。) 「ワイには困難に立ち向かえる力と力を持った責任がある。」

シ。(。(。) 「だからそつぽ向いて逃げるなんてかつこ悪い真似。もうしたくないんや!!」 バアアアアン!!!

ハーミットパープル「:!!」 ドワアアアン

シ。(。(。) 「もう死んでもええ。ただ力なき一般人を殺したアイツを一泡吹かせてから死んでやるんや!!」

ハーミットパープルはワイの気持ちに応えるように、コンビニの方の電柱へと茨を絡ませた。

~~~~~

警官A(こいつの異様な雰囲気。そして大量の血痕!!無人のコンビニ!!きつとこいつは店内の人間を殺したんだ!!!)

警官A 「…おいそこの君。この血痕、君が殺ったのか？」

男 「…。」

警官B 「答えろ!!」

男 「拳銃…持ってますか？」

警官A 「は？」

男 「あいつを殺すために必要なんで。奪わせてもらいますね。」

男 「スタープラチナ!!!」

スタープラチナ 「オラオラオラオラオラ  
!!!!!!」

警官A、警官B 「うああああ!!!空中に体が浮かんでいる!!」

男 「ハーミットパールが警官たちを掴み、店外へ放り投げた!!!」

多(。(。(。「警官たちには少しの間眠ってもらおうで。」

男「ほう、わざわざ死にに来たのか。」

シ（。）（。）「そうかもな。」

男「まあいい。いけスタープラチナっ!!殺せ!!」

シ（。）（。）「ハーミットパール!!」

スタープラチナ「オラオラっ!!」スカッ

男「また自分の体を運ばせラツシユから逃げただけ…。ガツカリだよ。」ハア

シ（。）（。）「よく足元見ろや。下や下。」

男「は?」

ガシャーン!!!

男「ぐはっ!!」

シ（。）（。）「ごんねーん。実はハーミットパールが商品棚からこっそり取った5



が変わったりする。

つまり忘れるんや。すべてのことを、そして一つのことには集中できなくなる。」

多(●)(●)「お前は2つ見逃していることがある。」

度数の高い酒が大量に全身や床にもかかっていることと。」

多(●)(●)「ワイが警官を放り投げたときに銃を奪ったことや。」カチャツ

パアアツツ!!

男「ぐわあつ!!! 熱い!!!」ブオオオオオオオ

多(●)(●)「床を撃つたときの摩擦熱でちゃんど引火したな。燃えてもらうで。」

多(●)(●)「うーむ。さすがにこれだと大やけど程度にしかならなあ。」

多(●)(●)「きちつと殺さなきやなあ…。」

男「た、助けてくれええええええ!!!」

多(●)(●)「所詮メンタルや思考力はなんじ民か。承太郎みたいに頭がキレル奴じゃ

なくて助かったやで。」

男「許してくれよおおおお!!! スタンドに目覚めて調子に乗ってただけなんだよおお

おお!!!」



ミ。(。(。「あの世でjkちゃんたちに詫びるんやで。」

パアアアンンツ  
!!!!

ミ。(。(。「グッバイフォーエバー。」

^  
 / \  
 ————  
 T O  
 ???? ????  
 \  
 \  
 ?  
 B E  
 C O N T I N U E D : :  
 / / / /  
 —

## 左右対称の j

反吐が出るような奴との戦いも終わり、ようやく一日が終わった…。

警察はこのコンビニ内での6人の欠損死体と1人の銃弾が撃ち込まれている焼身死体を

あの男による大量殺人の後に、拳銃を奪い焼身自殺と拳銃自殺を試みたと解釈したんや。

だがネット上では「不審死すぎる」「凶器もないのに6人も殺せるわけがない」「自殺に使われた拳銃はどこにいった？」などと疑問を呟く声が多く見られた。

そしてついには陰謀論なども唱えられたんや。

実際の事件の真相はワイだけが知っている。

幸い深夜で目撃はおらず、防犯カメラは壊されており、警官に姿を見られる前に気絶させたため疑いを掛けられることはなかったんや。

シ。(。(。「あの事件から三日も経った。何事もなく時が過ぎたように思えるけど、力を持たないJKちゃんたちは殺され、ワイは一人の人間を殺めたんや。」



シ(ハ)(ハ)「そしてワイにはとっておきの作戦があるんや!!!」

シ(〇)(ハ)「そのためには警官から奪ったこの拳銃、もう少し借りさせてもらおうやで。」テヘツ

~~~~~

シ(〇)(〇)「作戦は単純や。」

シ(ハ)(ハ)「ハーミットパープル!!!」グワツ!!

ハーミットパープル「∴。」ドヒヤアアアアアアン!!!!

シ(〇)(〇)「そしてテレビで念写する!!念写対象はこれや!!!」

「まだ犯罪をしていないスタンド使い!!!」

シ(〇)(〇)「正直ワイのスタンドじゃあ他の強スタンドに勝てる気はせん。もしあのスレに書き込んだ奴ら全員がスタンドを手に行っているのならばザ・ワールドやキラー

多(●)(●)「つてそういえばテレビ壊れたから念写できないやんけ!!!!!!」

多(。(。(。「そういやスマホでも念写できんのかね?」

多(。(。(。「壊れる危険性はあるがやってみる価値はある。」

多(。(。(。「ハーミットパープル!!!!!!」近くのスタンド使いの場所を探れえ!!」グワツ

!!

スマホ「右。」ザアアアア

多(。(。(。「え?右?」

スマホ「右にいる住人。」ザアアアアア

多(。(。(。「このアパートの右にいる奴がスタンド使いのなんじ民つてことか!?!」

多(。(。(。「スタンド使いはひかれ合うつていうがひかれすぎやろ…。」

多(。(。(。「じゃあ早速拳銃持つて突つ込むやで!!」ドアガチャ タツタツタツ

~~~~~

シ(。(。(。(人の家のインターホン鳴らすときって緊張するなあ…。」

シ(。(。(。「…。」ピンポーン

シ(。(。(。「…。」ピンポーン

シ(。(。(。(出えへんみたいやな。)

シ(。(。(。(だがハーミットパープルはスタンド使いの家ではなく、本人を念写した。だから絶対にいるはずや。)

シ(。(。(。(なにか出たくなるような言葉を言わないと…)

シ(。(。(。(「NHKの集金です。」

シ(。(。(。「つつてちやうちやう。」

シ(。(。(。「今、幸せですか？」キリストキョウ

シ(。(。(。「ううーん。」アセアセ

シ(。(。(。「もうええ!! 覗き穴を覗き、隙を見てハーミットパープルを覗き穴から

侵入させて鍵を開けさせてもらおうで!!」









（・ω・）「この原住民はしっかりと見ていたぞ。お前が小走りでコンビニに向かい、その後にコンビニの人達が不審死したことを!!」

シ（。）（。）（しつかりと見てないやんけ!!!ワイは基地外しか殺してないんやが。）

シ（。）（。）「ちよまてや!!ワイは確かに人を殺したが、あれは正当防衛や!!!あそこには狂ったスタープラチナ使いがいて、そいつを懲らしめただけやで!!!」  
 （・ω・）「嘘をつくなア!!!お前が罪のない人たちを殺したんだろ!!!」

シ（。）（。）（なんjにもいるよなあ。こういう自分の主張だけが正しいと思っていて、実際のことなんかなーんも知らん奴。そしてそういう奴に限って傲慢でプライドが高く、攻撃性が高い。）

シ（●）（●）（こういう奴の対処法は相手の鼻を折る。それに限るで。）

（、・ω・）「この原住民が犯罪者であるお前を罰する!!!」

多（―）（―）「莫大な力を手にした瞬間、急に正義のヒーローきどりか？原住民!!!」

（、・ω・・）「なんだと…?」

多（●）（●）「お前の発言は何もかも間違ってるって言ってるんや。」

（、・ω・・）「フツ、犯罪者めが。何を言おうと無駄だ。」

多（●）（●）「お前もやろ。」

（、○ω○、）「うぐっ!!!」

多（●）（●）「お前散々罰するとか罪のない人々がどうだとか言うとするけど、そういうお前はどなんや?」

（、・ω・・）「し、してるわけないだろ!!犯罪なんか!!!」

多（。）（。）（やはりそうだ。コイツは自分の言論と行動のズレで狼狽えている。）





シ(^(^(^(「ああもちろんやで!!そのために来たんやしな!!!」  
シ(^(^(^(「うまい具合に相手の鼻を折り、相手の本心に近づく。できそうでき  
ないもんやが、拳銃にビビてくれたおかげですんなりいけたやで。)

(・ω・)(「それじゃあ元の世界に戻すよ…。」

マン・イン・ザ・ミラー「…。」グオオオオオオオオオオオ  
!!!!!!

~~~~~

シ(^(^(「はあ。やっと戻ってこれたやで。」

(・ω・)(「すまなかつた。」ペコー

シ(^(^(「ええんやで!!!」ニコッ

(・ω・)(「そういえば名前はなんだい?」

ミ()()「野球民や!!やきう民でもええで!!!」

()・ω・()「うむ、じゃあ、やきう、って呼ばせてもらうね。」

ミ()()「ええで!!!」

ミ()()「そういや、原住民はなんの犯罪をやったんか?」

()・ω・()「うぐっ!!!痛いところを突くね…。」アセアセ

ミ()()「あー。言いたくないんやったらそれでええんやけどさあ。」

()・ω・()「食い逃げ。」

ミ(●)(●)「は?」

命令に背く者 — J —

(・・ω・・)(やきうと仲間になつてから1日経つた。彼曰く俺が改心しなければ拳銃で撃ち殺すつもりだったらしい。怖いわ。)

(・・ω・・)(「やきうにはいつも通り会社に行つてくれと言われてるけど面倒くさいなあ。特にこのアパートから会社までの通勤時間が長くてだるいんだよなあ。」)

(・・ω・・)(「あと、やきうがスタンド使い同士はひかれあうから気を付けておくと…。まあそんなすぐに戦闘にはならないだろう。」)

(・・ω・・)(「あ、そうだ!!通勤の電車でマン・イン・ザ・ミラー使えば人間はいなくなつて、電車だけはちゃんと動くから座席に座れるじゃん!!」)

(・・ω・・)(「我ながら天才だわ…。」)

~~~~~

(・・ω・・)(「最悪だ…。」ガタンゴトンガタンゴトン

(・・ω・・)(「マン・イン・ザ・ミラーの持続力はDだから駅から駅までのちよつとした時間さえも持ちこたえるのに精神力を使う…。」ガタンゴトンガタンゴトン



（シ・ω・、）「俺なんかこの会社の嫌なところしか目に入らないよ。」

同僚「例えば？」

（シ・ω・、）「ほら、もう嫌なところが来るぞ。」

同僚「なるほどね。」

部長「ええー。これから朝礼を始める!!」

（シ・ω・、）（朝礼なんて今どき時代錯誤過ぎるよ。）

部長「社長はお休みなので、私が朝礼をする!!」

部長「ええーまずこの会社に社訓としては……」

（シ・ω・、）「長えよボケ」

同僚「あのセクハラ部長め。」

（シ・ω・、）「あいつセクハラとパワハラが基本ステータスだからもうどうとも思わん。」

（シ・ω・、）「あ、またセクハラしてる。」

部長「いやあ。今日もいいスタイルだねえ。触りたくなっちゃうよ。」サワサワ

女性社員「え〜。やめてくださいよ〜。」ニコニコ

（・・ω・・）「あれ？いつもならもつと嫌そうな顔で笑ってごまかすのに、なんかデレてる!？」

同僚「おかしいな。あいつは結構女性社員の中でも部長を嫌っていたはずなんだから。」

（・・ω・・）「不思議なこともあるもんだなあ〜。」

〜数十分後〜

同僚「部長、今日やけにセクハラしてるな。」

（・・ω・・）「ああ、そうだな。でもそんなこと気にしてないで早くこの案件進めよう。」

同僚「だがそれよりも気になることがあるんだ。」

（・・ω・・）「それはなんだい？」

同僚「今日いつさい部長の愚痴話を聞いていないんだ。普段、女性社員たちの方からいつも愚痴が聞こえてくるだろう？だが今日はその話が一切聞こえてこない。」

（・・ω・・）「なあちよつと気にしすぎじゃないのか？確かに部長は目に見えてキモいが、四六時中その話をするわけがないだろう？」

同僚「なら、いいんだが。」

~~~~~

（　　）ω・ω・ω（　　）「ふんふんふーん。休憩はやっぱ必要さ。」

（　　）ω・ω・ω（　　）「お？女性社員がなんか話している。」

（　　）ω・ω・ω（　　）「ちよつと聞き耳を立てさせてもらうか。」

「最近さあ部長がかっこよく見えるんだよねー。」「私もなのよー。」「なんか不思議だね。」

「セクハラされるのも悪い気分じゃないなあつて。」「えー一緒じゃーん。」

（　　）ω・ω・ω（　　）「え？いやさすがにそれはないだろう。」

（　　）ω・ω・ω（　　）「同僚が言っていた違和感。もしかしたら本当かもしれない。」

（　　）ω・ω・ω（　　）「この会社でなにかが起きているのか？」

（　　）ω・ω・ω（　　）「ん？お、社長室で同僚と部長が話している。」

（　　）ω・ω・ω（　　）「少しこの小窓から覗かせてもらおうかね。」

部長「……。」シャーッ

(・ω・) 「くそっカーテンを閉められた。」

(・ω・) 「ちつ。何話すか気になってたんだけどなあ。」

(・ω・) 「しょうがないか。」

~~~~~

同僚「…。」

(・ω・) 「同僚!!お前の言ってたこと、本当かもな!!あの女子たちあのクソキモ部長をかつこいいとか言ってるよ。」

同僚「おい、部長をあんまり悪く言うなよ。」

(・ω・) 「…え?」

同僚「俺あんまそういう話好きじゃないんだから、気をつかってくれよ。」

(・ω・) 「す、すまん。でもさっきまではあんなに話していたじゃないか。」

同僚「しつこいぞっ!!!」

(○3○)「?!」

ザワザワ、ガヤガヤ







部長「そして最後にお前にこの命令をすれば、全ての社員が私の言うことを聞くようになるのさ!!!」

（。ω。、）「ぐっこいつ..。」

部長「社員を本に変え、この命令をさせた。」

部長「楽しかったよ、若い女性社員の体をむしやぶりつくすのはな。」

（。・ω・、）（同僚や女性社員の違和感はコイツのせいだったのか!!!）

（。・ω・、）「なんで俺が一番最後なんだ...!」

部長「君は優柔不断でなにズバツと決めることもできない根性なしだからさ!!!」

（。●●ω、）「昨日だ。たった昨日。そんな自分と決別したのさ。やきうのおかげでなツア!!!!」

（。・ω・、）「マン・イン・ザ・ミラー!!!!」

部長「なにつ!!だがこの部屋には鏡はない!!!」「スタンドが使えなくなる」と書き込んでやる!!!!」

(・ω・) 「そう、この部屋には鏡はない。だったら俺が作る!!!」

(・ω・) 「スーツの胸ポケットにあるボールペンで俺の腕を思い切り引っ掻く!!!」

ビチャツ!!!

(・ω・) 「水鏡ならぬ、血鏡さ。」

マン・イン・ザ・ミラー「:!!!」ドドドドドドドド

(・ω・) 「一旦だ。一旦ここから離れさせてもらおう!!!!!!」だがなあ、絶対にお前を始末するぜ!!!!」バアアアアアン!!!!

部長「くそう。間に合わん!!逃げられる!!!」

シーンッ

部長「だがこちらにも、策つてのはあるんだぜ。」

~~~~~鏡の世界~~~~~

(・ω・) 「ハアツ、どうにか鏡の世界に逃げ込むことに成功した。体の本化も治まっ

た。だがアイツをどうやって殺す!？」

「ω・ω・ω」 「ヘブンズドアは部長が書いたあの絵を見たら体中に力が入らなくなり、命令を書き込まれる。命令を書き込まれた時点でもうゲームオーバーだ。」

「ω・ω・ω」 「なんとか策を講じなければ!!!」

「ω・ω・ω」 「とりあえずこの鏡の世界の維持は体力を大きく消耗する。とりあえずひとけのいなさそうなところに一度出るか。」

~~~~~男子トイレ~~~~~

「ω・ω・ω」 「よし、ここの鏡を割る!!!」

マン・イン・ザ・ミラー「グラーアア!!!」 パリインツ!!

「ω・ω・ω」 「よし、この割れた鏡を使ってアイツを引きずり込んでやる!!!」

同僚「お、いたいた〜。」

「ω・ω・ω」 「同僚じゃないか。すまない、そこをどいてくれ…。」  
同僚「それはできない。」 ブンツ!!

「ω・ω・ω」 「いてえつ!!!なんだ急に殴りやがって!!!そして後ろの社員はもしかして…。」

「ω・ω・ω」 「グハツア!!!」

屈強な男性社員たちが俺を羽交い絞めにしたり、足を押さえたりしている。

(。ω。、)「もし…や…部長に…命令されて…いるのか…？」ググ…

社員たち「…。」

(。ω。、)「う、動けねえ!!!そして俺の前に突き出されるその指!?!ま、まさか、目を潰す気か?!?!」

社員たち「…。」

(。ω。、)「やめろ…。」

社員たち「…。」

(。ω。、)「や、やめてくれええつええええええええええ!!!」

(。;ω!!!)「お前らを殴りたくねえんだよおおおおおおおおおおおおおおお

おおお

!!!!!!!」

（；ω；）「だから嫌なんだよ中小企業は…。」

（；ω；）「自分のことより相手を意識しちゃまう…。すまねえみんな。」

（；ω；）「マン・イン・ザ・ミラー!!! あいつらを殴って気絶させる!!!」

マン・イン・ザ・ミラー「オリヤオリヤオリヤオリヤオリヤアツ!!!」バチコーン

社員たち「グワツ!!!」バターン

（；ω；）「少し眠っててくれ。」

（；ω；）「確かに俺のスタンドの威力は低いけど、スタンドが見えていない相手に急所を狙い気絶させるなど容易い。」

（；ω；）「さて、トイレから出てあの部長のもとへ向かうぜ!!!」タツタツタツ

~~~~~廊下~~~~~

部長「お、いたいたいた。まさかちようど廊下で会うとはなあ。」

(、・ω・、)「てめえ……。覚悟しやがれ!!!」

部長「この人数差でも同じことが言えるかな？」

社員達「……。ズラー—————!!!」

(、・ω・、)「この人数、まさか社員全員を!？」

部長「マン・イン・ザ・ミラーがなにかものを鏡の世界に入れるためには許可が必要だったよなあ？」

部長「だったらさ……。60対1でもよーお!!!目を潰される前に全員を許可できんのかね!？」

部長「目さえ潰せば、許可もなにもできなくなるよなあ……」

部長「お前を殺すつもりで闘うからな……。ここを私の楽園にするためにいいいいいいいい」

部長「ゆけっ!!!お前ら!!!あいつの目をくり抜き、なぶり殺してやれ!!!」
社員達「……。ドタドタドタドタドタッ!!!」

（…ω…）（確かにマン・イン・ザ・ミラーではこの数を相手にはできない。そして向かってくる60人の社員達!!まともな方法では勝てない!!）

（…ω…）「だったら死ねえい!!!」鏡ブンツ!!!

部長「はは、まさかそんな遠くから私に鏡の破片を投げて殺そうと思ったのか？」

部長「馬鹿だねえ実に馬鹿だねえ…。」

部長「社員!!身代わりになれつ!!!」

社員「…。」ザツ!!

マン・イン・ザ・ミラー「オリヤオリヤオリヤー!!!」

バキゴキツ!!

社員「ガハ!!」

部長「な、なに!?!」

部長「なぜ60人もこの社員達をすり抜けて一瞬で私の目の前に現れたのだ!?!」

（。ω。）「マン・イン・ザ・ミラー…。」

部長「持続力Dだからなあ。この鏡の世界ももう終わりか。」

部長「元の世界に戻っても待つのは暴徒と化した社員達だがなあ
!!!!」

ブオオオオオオオン!!!!

~~~~~現実世界~~~~~

部長「そのまま息を止めて死ねええええええ  
!!!!」

グサアツ!!!

部長「な、なに？攻撃できないはずだぞお前は…。」

攻撃できないと思われる俺は部長の心臓にガラス片を思い切り突き刺した。

（・・ω・・）「馬鹿はお前だったようだなあ。」ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
 （・・ω・・）「鏡の世界ではヘブンスドアなんて無謀だったんだぜ？」

部長「確かに、私は書き込んだはず…。」

（・・ω・・）「確かにお前は俺に文字で命令したさ。」

（・・ω・・）「でもなお前は全てが左右逆になっている鏡の世界で俺に『正常な文字』  
 を書いたんだ!!!」ドバァァァァァァァァァァ!!!

（・・ω・・）「鏡の世界での正常な文字が左右の正しい現実世界に戻ったら、そりゃあ  
 鏡文字になるよなあ!!!」

（・・ω・・）「鏡文字での命令はさすがにこの現実世界では通用しなかったようだな。」  
 （・・ω・・）「本になった俺を死ぬまで痛めつければよかったのになあ。能力を過信し  
 すぎて目の前のことが見えてないぜ部長。」

部長「グ、グフツ!!!」

∖    ^    /  
——— T O  
?????????  
∖    )  
∖    )  
?    )  
B E C O N T I N U E D : : / / / /  
—

(・ω・) 「言ってみたかったんだよなこのセリフ。」  
(・ω・) 「アリーヴェデルチ!!!」

## J, 爆走せよ 前半

シ(。(。(。「へえ…。そんな死闘が…。」

(。(。(。「そうなんだよ。いやあ本当に他のスタンド使いと出くわすなんて思いもしなかったよ。」

シ(。(。(。「部長の死体とか、警察はどうしたんや?」

(。(。(。「部長の死体はマン・イン・ザ・ミラーで運んで海に沈めた。幸いヘブンズドアの命令が消されたショックで社員の記憶は曖昧で一連の流れを覚えている人は誰一人としていないよ。」

シ(。(。(。「それはよかったやで。」

シ(。(。(。「これで晴れて二人とも殺人者か!!」

(。(。(。「ちよつと!!!」

シ(。(。(。「すまんやで。」

(。(。(。「まあでもこの調子でスタンドバトルは増えそうだね。」

「あそうや。今日はこの件で来てもらったんやで!!」

「ω・ω・ω」?

「ワイは定期的にスタンド使いの動向をハーミットパールで探ってるんやけど。おかしな動きをしているスタンド使いが3人おるんや。」

「ω・ω・ω」 「具体的に教えてくれない?」

「スタンド使いはひかれ合い、ワイと原住民のペアができた。だが頭のおかしい殺人者も同様に運命に導かれるようにグループを組みだしたんや。」

「それがあの3人。そしてあの3人は最近よく日銀本店の周辺をうろついている。」

「ω・ω・ω」 「つてことは銀行強盗しようとしていること!? 日銀本店に!」

「な訳あるかい。いくらスタンド使いといえど日銀本店にカチコムのはさすがに無理があるで。」

「現金輸送車や。」

「ω・ω・ω」 「現金輸送車? つてあの三億事件とかのあれ!」

「そうや。きつとあいつらはあれを襲うつもりや。」



「…ω・、」 「確証はあるの？」

「…(。(。(。(。」「ないで。」

「…ω。、」 「ええ…(困惑)」

「…(。(。(。(。」「まあ安心せえ!!ハーミットパールが明日あいつ等が日銀で何かすると言ったんや!!だとしたら多分明日や!!」

「…ω。、」 「もう滅茶苦茶だあ…。」

「…(。(。(。(。」「そして折り入ってお願いがある。」

「…ω・、」 「なに？」

「…(。(。(。(。」「ワイと一緒に戦ってくれんか?ハーミットパールは念写や場所、敵の行動を予想するのには向いているがはつきりいつて戦闘力は皆無や。ワイ一人じゃあつげなく殺されるのがオチやで。」

「…(。(。(。(。」「頼む!!命を落とすかもしれない!!!もう一生立てない体にもなるかもしれん!!!」

「…(。(。(。(。」「それでもワイは、邪悪なスタンド使いからこの日本を守りたいんや!!」

（・・ω・・）「なに当たり前なこと聞いてんだよ。やきうに人生変えようと言われたあの時から、俺の腹の内は決まっている。」

（・・ω・・）「地獄の果てまで着いてくぜ、やきう!!!」

多（；）（；）「原住民…。」

多（。）（。）「よし!!! さっそく車の準備や!!! 原住民!! 運転できるか!?!」

（・・ω・・）「え? できないけど?」

多（）（）「24にもなつて?」

（・・ω・・）「やきうも同じ24だろ!!」

（・・ω・・）「あ! ハーミットパープルで運転すればいいじゃん!!!」

多（。）（。）「おお確かに!!! で車は!?!」

（・・ω・・）「え?」

多（）（）「終わったやで…。」

（・・ω・・）「そうだ!! 死んだ部長のマイカーがあつたはず!!! 悪いが死人に口なしとい

うことで奪わせてもらおう!!!」

シ。(。(。「よし!!そうと決まれば部長のマイカーを強奪し、色々戦の準備をする  
で!!!」

~~~~~翌日の日銀本店~~~~~

。(。(。「うーん。近くのセブンで車内から現金輸送車が出るのを待つのはいいけど…、いつになったら現金輸送車は出発するの?」

シ。(。(。「知らん。待つだけや。」

。(。(。「今、日曜の7時だよ?もう眠くて仕方がないよ…。」

シ。(。(。「つてかなんで助手席にいるんや?ミスタみたいに後部座席にいた方が戦いやすくないか?」

。(。(。「いいんだよこれで。」

シ。(。(。「あっ!!あれ見ろ!!」

。(。(。「現金輸送車と護衛のパトカーだ!!!」

シ。(。(。「追うで!!原住民!!!」

シ(ゝ)(ゝ)「ハーミットパール!!!」グワアアアアッアーン!!!

ブルンブルンブルウウツウウウン
!!!!!!

シ(。(。(。「つてかこの部長の車はトヨタの自動車なんか。ちよつとくらい乱暴に扱つても大丈夫そうやな。」

(。(。(。「運転免許ないんでしょ?いくらハーミットパールで操つてるからつて事故死だけ勘弁だよ。」

シ(。(。(。「任しといてや。」

(。(。(。(「大丈夫かなあ…」

シ(。(。(。「おつ。首都高速道路に乗つたで。今んとこ怪しい車はなにもないな。つていうか早朝の休日のせいか車自体あまり走つておらんな。」

(。(。(。「お!?あれ見てよ!!!ナンバープレートのない黒い自動車が思い切り爆走している!!!」

シ(。(。(。「間違いない!!スタンド使いはあの車に乗っている!!!あつ、あまりの速

さに後ろから抜かされてしまった!!!」

シ（、）（、）「速度上げるで!!!」グワアアツアアアン
!!!!!!

シ（、）（、）「あの車。現金輸送車を護衛しているパトカーの横に近づきよった。何する気や?」

（、・ω・、）「スタンドを車外に出現させた!!そしてあのスタンドはキラークイーン!!!」

シ（、）（、）「そして躊躇いもなくパトカーの車体にそつと触れた…。」

シ（〇）（〇）「こりやまずいで。アイツらどんな犠牲も厭わないつもりや…。」

シ（、）（、）（、）（、）（、）（、）「爆発する!!!」

ドカカカアアツアアツアアアン
!!!!!!!!!!!!

パトカーはワイらの目の前で爆発し、車体は大きく宙へと浮かび上がった。

（・・ω・・）「ぶ、ぶつかる!!! やきう!!! ハンドルを切って!!!」

（●●）（●●）「くそおおおおお!!!」キイイイツ!!!

ドカツ!!ドカツアン!!!

燃え上がるパトカーはワイらの車の横に落ち、そしてもう一度爆発した。

だがなんとかワイらは回避することができたものの、後続車両はパトカーに巻き込まれ、激突した。

後ろの道は燃え上がる車体で完全に封鎖された。

（・・ω・・）（・・ω・・）「あいつらなんてことを…。」

（・・ω・・）「あつ今度は現金輸送車に近づいてく、だが現金輸送車もこの重大さに気づいて思い切り速度を上げ始めた!!!」

（・・ω・・）（・・ω・・）「よし、運転代われ原住民!!! 持ってきた拳銃で黒い車の後ろのタイヤを撃ち抜くで!!!」

◇(。(。(。「まさかこのスタンドは!？」

◇(。(。「ホイール・オブ・フォーチュン!!!」バアアアン!!!

◇(。(。(。「第三部で現れた車と一体化し車を変幻自在に操る能力!!!この高速道路においては絶対的な強者!!!」

◇(。(。(。「まずいで…。今の攻撃で敵意があのだスタンド使いたちにバレた…。」

仮面を被った男「てめえ!!!今!!!俺らに攻撃したよなあ!!!」

◇(。(。(。(スピーカーか?)

仮面を被った男「真偽はともかくこの現金輸送車を奪ったら、爆死させてやるから覚悟しておけ…。」

◇(。(。(。「前方で煽り運転をしてきよった…。」

◇(。(。(。「現金輸送車の中にある金を奪うという表現ではなく、まるで現金輸送車ごと奪うというような言い回し…。」

「……」「そんな芸当ができるスタンドなんて存在しないはず……。」

「……ω……」「いや!! 一つあるぞ!! その名はエニグマ!! どんな物だろうが残らず紙に収納してしまうスタンド!!!」

「……ω……」「やきう、あいつらのスタンドはきつとキラークイーン、ホウイール・オブ・フォーチュン、エニグマだ!!!」

「……」() () 「なるほど、確かにそうかもしれん!!!」

「……ω……」「あつ黒い車が現金輸送車の真後ろに!!!」

「……」() () 「やばいで……。」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

ワイらの前にあつた現金輸送車が一瞬にして消えてしもうた!!

「……ω……」「やっぱりあともう一人のスタンド使いはエニグマだ!!!」

「……」() () 「一般人を犠牲にしておいて、大金持ってズラかるなんてさせん!!!」

バアアアアーン!!!!

シ(。(。(。(。「速度上げるで原住民!!しっかり捕まってるんやで!!!」

(。(。(。(。「みるみるあの車に近づいていく、いいぞ!!!」

キラークイーン「:。」ゴゴゴゴゴゴゴゴ

(。(。(。(。「やきう!!黒い車のトランクの上にキラークイーンが!!触れられたら一発アウトだ!!!スピードを落とせ!!」

シ(。(。(。「くそお!!!」キイイイイイ!!!

キラークイーン「:。」スカツ!!

シ(。(。(。「ギリギリ避けれたが、それよりもっとやばい問題があるで:。」

仮面男「てめえらスタンドが見えてるな!!スタンド使いだろ!!」

シ(。(。(。(。「やっぱりや。」

仮面男「てめえら同じスタンド使いなのになぜ俺らを狙う?スタンド使いは法にさえ

縛られない自由な存在なんだぜ？」

仮面男「俺らは人生を謳歌するためにどんな犠牲も厭わないつもりだ。だが俺らの敵となりうるスタンド使いなら優先的に殺す!!!」

キラークイーン「∴。ペタツツ

シ（。）（。）「黒い車が追い越した自動車にキラークイーンが触れた∴、つてことは!?」

（∴・ω・∴）「ヤバい!!俺らがあの自動車に近づいたら爆発させる気だ!!!」

シ（。）（。）「あいつら一般人の車を爆弾に変えやがって∴。」

（∴・ω・∴）「どうするやきょう。あの前の自動車に近づいたら爆死だぞ。」

シ（。）（。）「こういうのはなあ、爆破するタイミングが分からないから困るんや。」

シ（。）（。）「レスバも同じや。相手の怒りのタイミングさえつかめれば自分の思い通りにできる!!」

シ（●）（●）「先にあえて爆発させ、空中に浮かんだ一般人をハーミットパープルでキャッチするで!!」

(ゝ・ω・ゝ)「まさに迷案だな。だが乗るぜやきう!!!運転は任せろ!!!」

ン!!!
シ(ゝ)(ゝ)「ハーミットパープル!!!エンジンを操作させてもらおう!!!」ピキヤアアア

ハーミットパープル「:。」グワツン!!

シ(●)(●)「爆破しろ!」

ドカアアアアンツ
!!!!

一般人「うあああああああ!!!」

(ゝ・ω・ゝ)「車体が大きく宙へ浮かんだ!!!」

ハーミットパープル「:。」ガシツ!!

ガシヤドツカンボン!!!

シ(。(。(。「運転手は1人だけや。だったらキャッチも容易い!!!」

ボカアアアツァン
!!!!

（。ω。、）「避けた先の壁が爆発しやがった!!!」

シ（。）（。）「いてて…。とつさに気づいたおかげで助かったけどもう少し遅れていれば二人もろとも爆死やったで。」

（。ω。、）「だけど車体、俺たちともに大分ダメージを食らってしまった。次爆破攻撃を受けたらエンジンにでも引火して今度こそお陀仏だ!!!」

（。ω。、）「おい、見ろ…。またカラーコーンがある!!!」

シ（。）（。）「まさかのここで心理戦か…。」

（。ω。、）「どうするやきう!! カラーコーンが爆弾ではないことに賭けてそのままカラーコーンを通り抜けるか、それともカラーコーンが爆弾ということに賭けてカラーコーンを通らないか!?!」

（。ω。、）「あ、ハーミットパープルで退かせばいいんじゃないか?」

シ（。）（。）「いやハーミットパープルのスピードはC!! 空中を舞う一般人ならまだしも、爆発を避けるほどスピードはない!!」

（ゝ・ω・ゝ）「ならどうすれば…。」

（ゝ・ω・ゝ）「一か八かや!!! カラーコーンを突っ切るで!!!」

（ゝ・ω・ゝ）「うおおおおおおおおお!!!」 アクセルフミー
!!!!!!!

仮面男「フフ…。正解はエニグマが紙に変えた車がカラーコーンの下にある…だ。どっちみちどの選択肢を選んでも車に衝突するだけだったのさ。」

（ゝ・ω・ゝ）「うあ!!!いきなりカラーコーンから車が現れた!!!」

（ゝ・ω・ゝ）「ぶつかろううううううううううう!!!」

ドシャガシャアアアーン
!!!!

^
/ | \
- - -
??????T
O
S
S B E
? C O N T I N U E D : :
/
/
/
/
-

（…ω…）「だが鏡の世界でも物質は止まらない。だからサイドミラーから車外へ!!!」

ドシャガシャアアアーン!!!

ミ（）（）「ふう…。助かったで。サンキュー原住民。」

（…ω…）「おい、やきう。血が出てるぞ。大丈夫か？」

ミ（）（）「ああ、車体の破片がちよつと刺さっただけや。命の危機というわけではあらへん。」

（…ω…）「ならいいんだがな。」

（…ω…）「でもあいつらを追う手段がなくなっちゃった…。」

ミ（）（）「いやどうやら立場は逆になったようやで。」

（…ω…）「え？それはどういうこと？」

（…ω…）「あ!?あの黒い車。俺たちの方へと逆走してきてる。」

（…ω…）「まずい！車もないしこのままだと轢き殺される!!!もう一回鏡の世界へ逃

げよう!!」

ミ。(。(。「いや、その必要はないで。」

ミ。(。(。「あいつらはもうワイらが死んでいたかもしれないんかったのに、わざわざこつちにとどめさしに来たんや。やからこつちもケリをつけにいくで。」

(。(。(。「んな無茶な!!あいつらの車は車体、タイヤともにホイール・オブ・フォーチュンにより強化されてるんだぞ!!もう勝てるわけがない!!」

ミ。(。(。「覚悟決めろ原住民。」

(。(。(。「:知ってたさ。お前が一般人を殺した相手に背を背けないことなんて。」

(。(。(。「だがどうする?策はあるのか?」

ミ。(。(。「ああ、あるさ。」

ミ。(。(。「とっておきのがな。」

~~~~~

仮面男「あいつら、まだ生きてたのか。」

運転手「けつ。あそこでくたばっておけば俺のホイール・オブ・フォーチュンにミンチにされることなんてなかったのによおー。」

長身「キラークイーンで爆死させたかったなあ。」

運転手「まっ俺のおかげということだ。」

仮面男「にしてもーよー。あの運転手の男がハーミットパール使いつてことは確認できたが、車に乗っていたもう一人の方のスタンドはなんだ？」

運転手「気にすることじゃあねえ。どっちみちスタープラチナだろうがなんだろうが120 km/hで突っ込む車を止めるスタンドはなにもないぜ。」

運転手「それより後のことを考えようぜ!!!この大量の札束でなにをするかをよおー!!!」

長身「もはや金の問題じゃない。俺たちはなんでもできる。社会の枠組みから外れた存在へと進化したんだ。だからそんな金の使い道なんてことなんて考える必要ははない。」

長身「好きな時に好きなことができる。シンプルなことだ。だがそれを叶えられるものはこの世に誰一人としていない。」

長身「俺たちは本当の幸せを手に入れたのさ!!!」ズギヤアアアン!!!

長身「だからもう自分の未来とか誰かの顔色を伺う生活は終わったのさ。」

運転手「さすが元社畜!!そして社員全員を爆死させた殺人鬼!!言うことがやつぱちがうね。」

仮面男「これもあのスレのおかげだな。」

長身「あいつには感謝している。」

仮面男「あいつ…って誰だ？」

長身「スレを立てた1のことだ。」

運転手「出会ったのか？」

長身「ああ。霧のように掴みどころのない男で、まるでいつも目の端の方にいる一般人って感じだったな。」

仮面男「にしてもなぜ会えたんだ？」

長身「俺も会おうとしてはいなかった。ただ会社を爆破させたときに俺の後ろに不審な人物がいたんだ。」

仮面男「それが1ってことか？」

長身「定かではないが、「さすが君はやる事が違うね、2。」って言われたんだ。」

運転手「2ってなんだ？」

長身「俺のレスの番号だ。」

運転手「不思議な話だな。まるでスレに書き込んだ奴らの素性や人格を予め知っていたかのような口ぶり。」

仮面男「まあ1がどういう存在であれ、俺たちが無敵のスタンド使いってことには変わりはない。」

仮面男「さっさと二人組のスタンド使いを轢き殺しちまおう。」

運転手「そーいやお前ちゃんと紙持つてるか？」

仮面男「ああ。エニグマが紙にした現金輸送車は片手にしつかりと持つてあるぞ。」

運転手「うっかり開いちまって、全員死ぬのだけは避けてえからよろ。」

仮面男「そんなミスは起こりえない。」

長身「おい、そろそろあいつらのもとに近づいてきたぞ。」

運転手「!?おい1人しかいねえぞ!!!」

長身「なに!？」

仮面男「まあ慌てるようなことじゃあない。まずはあいつの死を確実にものにするぞ!!!」

運転手「分かったぜ!!!」ドギヤアアアアン!!

ブルウンブルウンブルウンウン  
!!!!!!

シ。(。(。(。「来たな。距離300m。目視可能。」

シ。(。(。「拳銃の弾は残り一発。」

シ。(。(。「これをミスったらワイに残されているのは死だけや。」

シ。(。(。「仗助も言っていたが、人は死が目の前に近づいてくると急に闘志がわいて来るもんやな。」

シ。(。(。「…。」

シ。(。(。「距離200m。やはりどんどん速度を上げてきている。」

シ。(。(。「ワイを本当にミンチにする気やな。」

シ。(。(。「距離100m…。まだや。まだ早い。」

シ。(。(。「もしブレたりしたらアカン。確実に絶対的な一撃、それを放つ!!!」

シ。(。(。「距離50m!!!一度深呼吸させてもらおうで。」





長身「いやよく見ろ!!! あいつスタンド名を叫んだが、肝心のそのスタンドは出現してねえ!! 間抜けだけゼアイツ!!!」

運転手「なにはともあれこのスピードを止められる奴は誰一人としていねえ!!! 突っ込むぜ!!!」

ブウウウンツ!!!

~~~~~鏡の世界~~~~~

(・ω・)「やきう!!! まさか、俺に拳銃を預けるとはね。」カチャツ!!!

(・ω・)「君が鏡の世界でハーミットパープルを予め出現させ、ナイスタイミングで念写した。」ゴゴゴゴゴ

(・ω・)「この鏡の世界!! 俺の許可していない生物は一切存在しない物質の世界!! 俺の射撃を妨害するスタンドも人間もいねえ!!! だが、紙になった現金輸送車は車内にある!!!」ゴゴゴゴ

(・ω・)「そしてこの世界での発砲はアイツらには見えないし、防げもしない!!!」ゴゴゴゴゴ

（、・ω・）「例えマン・イン・ザ・ミラーの精密性がCであってもこんな近距離、好条件で外すなんて、起こりえないぜ!!」ゴゴゴゴゴ

（、・ω・）「マン・イン・ザ・ミラー!!血痕に浮かび上がるその位置を正確に射撃しろおおおおお!!!」

マン・イン・ザ・ミラー「!!!」ドバアアアアツアン!!!

パアツンツ!!!

~~~~~現実世界~~~~~

長身（なにかおかしい!!人間が死の直前でただ棒立ちになつてなにもしないなんて不自然だ!ましてやスタンド使いだったら!!）

長身（そういえばあいつらは拳銃を持っていたな…。このホイール・オブ・フォーチュンの車体、タイヤは強化されているが、窓ガラスはそのまんまだ。）

長身（ま、まさかあれを狙ったのか?）

長身（いや、だが待て。あの棒立ちの男は発砲すらしてないんだ。そんなことは起こりえない!!!）

仮面男「なあ……。俺確かに紙を持っていたんだが、なにか感触が変なんだよ。紙が衝撃で吹っ飛ばされてどっかに飛んでいつちまったような感触があよー。」

仮面男「ハッ!!!」

仮面男「持っていた紙がいつのまにか無くなっていて、床に紙が開いた状態で落ちて  
いる!!!」

仮面男「つてことはよお……。」

長身「!? 運転手!!! 今すぐ俺たちを車外へ放り出せつ!!!!」

運転手「どういうことだ!？」

ドシャアアアアン!!!!

多（。（。（。「ワイから5 m手前で黒い車の内側から現金輸送車が飛び出した。」

「ちゃんどワイの念写通り、原住民は正確に紙の端つこだけ撃ち、開かせたんやな。」

「にしても圧巻の光景やな。」

「そしてなんとかワイに衝突する前に現金輸送車の出現の衝突でワイのギリギリ横に逸れたな。」

「なんとか助かったやで。」

ズギヤアン!!

「やきう!!無事かい!？」

「おっ。鏡の世界から戻ってきたんか。」

「原住民のおかげでなんとか助かったやで。サンキュー!!」

「にしてもすごい光景だったな。」

「現金輸送車は並みの攻撃では壊れないほどのとんでもない頑丈さや。」

「そんなものが一瞬で現れたんや。たとえどんなものでも突き破る。」

「さすがのハウイル・オブ・フォーチュンでもあれには敵わなかった

な。」

シ。(。(。(。「あいつらの方こそミンチになったんやないか？」

「。ω。ω。ω。」「そうだね。にしてもこれで一件落着だね。いやあ今7時14分ぐらいか。短いけど長い闘いだっただね。」

シ。(。(。(。「そうやな!!現金輸送車の内部の人は今は気絶してるけど無事やろうし、警察がこないうちに帰ろうやで!!」

長身「こ、ころす…。」フラフラ

長身「ぶっ殺してやるう!!!」フラフラ…

燃え上がる黒い車の中からただ一人、ふらふらとワイらの元へと近づいてきた。

シ。(。(。(。「まだ生きてたんかしぶといな。だが今すぐにでも死ぬってレベルの瀬死やな。」

シ。(。(。(。「おい!そのスタンド使い!!ワイらも鬼やない!!黙って安静にしておけば楽には死ねるで!!!」

◇( ) ( ) 「でももしワイらを本気で殺そうというのならば…。」

◇(●) (●) 「あの時死んでおけばよかったと後悔することになるで。」

長身「舐めるんじゃあねえ!!!キラークイーン!!!」バアアアン

キラークイーン「…。」ババババババババ!!!

◇( ) ( ) 「ワイはキラークイーンよりも遥かに強く、素早いスタープラチナを相手したんや。」

◇( ) ( ) 「だからそんななまっちよろいスピードじゃあワイには勝てんで。」

◇( ) ( ) 「ハーミットパープル!!!」バアアアアン!!!!

ハーミットパープル「!!!」

長身「ぐっ!!紐状で攻撃が一切当たらない!!!」

長身「そして俺の腕をグルグルと回りやがって!!!このっ!!!」

◇( ) ( ) 「実戦慣れしてないなコイツ。」

シ(●)(●)「まあええ。こんな結び方知ってるか？バケツトヒッチってのをよー!!!」  
ゴゴゴゴゴゴゴ

長身「キラークイーンのを腕を結ばれた!!!」  
シ(。(。(。「そしてこのまま道路に頭を思い切りぶつけさせてもらおうで!!!」

グシヤアアン!!!

長身「ブフオツ!!!」ボタバタ…

シ(。(。(。「勝負あったな…。」

長身「ハア…。ハア…。」

長身「…よくも…、よくも俺の幸せを破壊してくれたな…。」

シ(。(。(。「もう喋るな。決着はついたで。無駄に苦しむだけや。」

長身「受験も就職も仕事も全部誰かを蹴落として成り立っている。だったらよお…、



俺が誰かを殺してのし上がろうが問題ねえよな？」

長身「しかも俺らはスタンド使い…。特別な存在だぞ…。」

長身「なぜいまだこの社会のルールに囚われている？」

シ（。）（。）「はあ…。」

シ（。）（。）「ルールってのは悪が己のためだけに弱者を痛めつけないようにと願いを込められてきている。」

シ（。）（。）「お前のその幸せのために何人の死体が積み重なっている？」

シ（。）（。）「お前は我を貫きすぎた…。いくら超常の力を手にしても人として変わってはいけないものがあるんやで。」

シ（。）（。）「法では裁けないお前はワイが肅清させてもらった。」ピキーンツ!!

長身「我…ね…。」ハア…ハア…

長身「俺の方こそ真の弱者だったかもな…。」ハアハア

シ（。）（。）「…。」



シ。(。)(。)!?”

(。・ω・)(。「なにつ!!そんな馬鹿な!?”

シ。(。)(。)(。「おい!!返事をしろっ!!」ユサユサ

(。・ω・)(。「いや、だめだ……。彼はもう死んでいる。」

キラークイーン「……。」

シ。(。)(。)(。「なにもんやお前?なぜ宿主であるコイツを殺した?」

キラークイーン「フツ……。」ヒュツン……

(。・ω・)(。「彼が死んだことでキラークイーンも消滅した……。だがあの不敵な笑み……。」  
 シ。(。)(。)(。「1についてなにか調べなきやアカンかもな……。」

TO BE CONTINUED……  
 ??????????  
 ?

## jの追手

多(●)(●)「クソっ！ーの居場所をハーミットパープルで念写できん!!!」

多(○)(○)「さすがのハーミットパープルでも5chの匿名で一個人を念写するのは無理があるんか…。」

(・・ω・・)「まあそうカツカするなやきう。」

(・・ω・・)「手がかりもないんじやーを特定できない。それだったらキツパリ諦めるつてのも精神においては必要なことだと思うよ。」

(・・ω・・)「死んだ彼の願いである通り、引き続き暴れているスタンド使いを懲らしめるだけさ。」

(・・ω・・)「もしかしたら彼のように1の手がかりを持つてるやつもいるかもしれないからな!!」

多(○)(○)「確かに原住民の言う通りや…。すまん、取り乱したやで、」

「よし!!じゃあ先帰るね!」

「おう!!またな!!」

原住民とワイは部屋が隣同士なこともあって、よくワイの自室で今後のことやスタン  
ド使いらしき仕業の事件の調査をしている。

「あのスレの1。本当になにもなんや…?」

「でも原住民の言う通り今はなにもできない。」

「このままスタンドバトルを繰り返していくしか平和への道はないんか  
ね。」

「ザ・ワールドやキングダムもいるし、いつかは死んでしまいそ  
うやな。」

「あ、そうや!!!」

「スレ立てして、犯罪をしないように促せばいいんや!!!」

「いいアイデアやで!!!」

「そしたら早速書き込みと…。」カチャカチャ

お前からスタンドで暴れるなぶっ〇すぞ

1 名前：風吹けば名無し

やっぱ犯罪はよくないやで

2 名前：風吹けば名無し

は？スタンドなんているわけないだろガイジか？

多( )( )「そりやそうや。スタンド使いじゃないj民からしたらただの頭のおかしいやつやで。」

多( )( )( )「つてか。こんなスレであいつらが犯罪をやめるとは思えないわ。」

多( )( )( )「こりや失敗やな。」

多( )( )( )「ん？こいつ…。」

7 名前：風吹けば名無し

なぜ犯罪をしてはいけないんだ？

俺らはもう既に人智を超えた神のような存在

スタンドで何しようが勝手だろ

多(。(。(。「こいつ発言からしてスタンド使いぽいな。」

多(。(。(。「なんかムカつくし反論するで。」

9 名前：風吹けば名無し

>>7 人智を超えたら犯罪も殺人もなにもかもしてもいいんか？  
なわけないやろ自惚れすぎや

10 名前：風吹けば名無し

>>9

お前噂に聞くスタンド殺しだな？

現金輸送車のキラークイーン使いとは顔見知りだなあ  
仇をとってやる首を洗って待ってろ

多(。(。(。「なんやと…。」

11 名前：風吹けば名無し

>>10 だつたらなんや

お前ごとき犯罪者が勝てるわけないやろ

12 名前：風吹けば名無し

>>11 そうかもな

でもお前対俺ら犯罪者全員だつたら？

眠れない日々を過ごすことになるだろうなあ

シ(●)(●)「こいつほんま調子に乗りやがって…。」

シ(○)(○)「またあいつ書き込みやがった…。」

シ(○)(○)「な、なんやと!？」

13 名前：風吹けば名無し

名前：野球民



スタンド：ハーミットパープル

住所：東京都 ○○○市 ○○○市 ○○○市

経歴：○○幼稚園卒↓○○市○○小学校卒↓○○市○○中学校卒↓○○学園○○高校  
卒↓○○大学

どうだ野球民

シ(●)(●)「全てあっている…。どこで情報を手に入れやがった!!!」

シ(○)(○)「それにしてもまずいで…。」

14 名前：風吹けば名無し

>>13 なんやなんや急にでたらめ言いよって

15 名前：風吹けば名無し

>>13 ざっこwww

ハーミットパープルってww

俺のスタンドだったら一秒で殺せるわ

16 名前：風吹けば名無し

>>13 え？こいつこんなスタンドで犯罪がどうか言ってたのか？

いくらなんでも惨めだな

いいスタンド貰えなかった僻みか？

17 名前：風吹けば名無し

>>13 明日行くから待って

多(。(。(「やばいやばいやばいやばい!!!!」

多(。(。(「スタンド使いに住所バレなんて一番にあつてはならないことや!!!」

21 名前：風吹けば名無し

青ざめたな野球民

確かに俺の友を殺されたのはムカつくが直接手を下すまでもない

まるでお前は猛獣の檻に閉じ込められた哀れな兎!!!!

明日楽しみにしておけ

22 名前：風吹けば名無し

>>21 お前どうやってこの情報手に入れたんや!!

23 名前：風吹けば名無し

>>22 冥途の土産とかなんとかいうが俺は一切言うつもりもない

今このスレは全国のスタンド使いがきつと閲覧している

野球民の住所が開示されたのにもかかわらず

自分は関係ないと思って調子乗って書き込んだ15、16、17もいずれ殺すからな  
頭の弱いやつにこの力は相応しくない

多(。(。(。)[「:.。」]

多(。(。(。「これからスタンドバトルが増えそうやな。」

ピンポーン

多(。(。(。「!?もう来たんか!？」

多(。(。(。「ハーミットパープル!!!」ズギヤアアアアン  
ハーミットパープル「:.。」

(。(。(。(。「おい、俺だよ俺。」

(。(。(。(。「あのスレ見たぞ。お前やばいことになってるな。」

「あとドア越しでハーミットパープルって叫んだの聞いてるからな。」

ガチャ

「すまん原住民。なにせ住所がバレたもんでな。」

「警戒心を怠ったら死んでまうがな。」

「そうだね。」

「やきう。もう君はこのアパートを離れた方がいい。」

「どこか遠くの場合に今すぐ逃げるんだ。」

「ああ。言われなくてもそうするつもりやで。」

「原住民は来てくれないか？もし来てくれたらすごく頼もしんやがな。」

「いや、俺はここに残る。」

「スタンド使い殺しなんて異名を付けられて、住所公開されたらやきうを殺しにくるスタンド使いもいるはずだ。」

「スタンド使いのj民はなにより自分の妨害、邪魔を嫌うからな。」

「俺はここに残って、ノコノコやきうを殺しに来たスタンド使いを俺がメ

る!!」

（・・ω・・）「幸いやきうの隣の部屋の住人がスタンド使いつてことはバレてないみたいだからな。」

ミ（。）（。）「原住民……。相手はザ・ワールドだっている。もし戦うとしても死ぬかもしれないぞ。」

（・・ω・・）「そんなの、どの戦いでも同じだったろ？だから今まで何も変わらん。ただ倒すだけさ。」

（・・ω・・）「あともしやきうと同じ正義の心を持ったスタンド使いが現れたときに、行く場所がないと困るだろ？」

（・・ω・・）「俺がお前を全力でサポートする。だから死ぬなやきう。」

ミ（；）（；）「原住民!!!お前つてやつは……」

（・・ω・・）「そういや行く場所はあるのか？」

ミ（。）（。）「5chのサーバーに行く。」

（・・ω・・）「え？それは何故だい？」

ミ（。）（。）「1の居場所とワイの居場所を突き止めた奴の名前とスタンドをサーバーから念写する。」

「．．ω．．」 「つてから5chのサーバーってどこなの？」

「．．ω．．」 「米国カリフォルニア州サンフランシスコや。」

「．．ω．．」 「とんでもない長旅になりそうだね。」

「．．ω．．」 「ああ。」

「．．ω．．」 「がんばれよやきう。」

「．．ω．．」 「原住民もな。」

「．．ω．．」 ホテル「．．ω．．」

「．．ω．．」 「住所がバレたからホテルで過ごすことになったやで。」

「．．ω．．」 「あのボロッちいアパートも今とはなってはいい思い出や。」

「．．ω．．」 「すぐ近くに丸ポストや消火栓もあって、令和の時代とは思えないやで。」

「．．ω．．」 「あのアパートのある通りの丸ポストもしばらく見ることはなさそうやな。」

多(。(。(。「は。まさかアメリカに行くことになるとは思わなかったで。」  
多(。(。(。「まあ住所も名前もスタンドもバレたんや、しかたがないか。」  
多(。(。(。「ジョジョ3部みたいに追手はこないし、平和やな。」  
多(。(。(。「早速明日ぐらいには電車に乗って空港に向かうで。」  
多(。(。(。「にしてもワイの部屋にダイナーが運ばれてくるはずなんやけど、ちよつと遅いな。」

トントント

ホテルマン「ダイナーをお持ちいたしました。」

多(。(。(。「おっ。来た来た!!!」

多(。(。(。「一応念のためや。ハーミットパール!!!」ズギヤアアン  
ハーミットパール「.:。」

多(。(。(。「スタンドは出したままにしておくで。」

ガチャ

シ(。(。(。「ハイ。」

ホテルマン「ではお食事をお楽しみください。」

シ(。(。(。「サンキューやで。」

バタツ

シ(。(。(。「ワゴンで食事運ばれてくるなんて映画でしか見たことないわ。」

シ(。(。(。「早速食べるやで!!!」

シ(。(。(。「ん?ワゴンが揺れてる?」

??「イエローテンパラス!!!」

シ(。(。「なにつ!!!」

ドバアアアン!!!



チンピラ「おお……。運よく躲したみたいだなあ。」

多(。(。(。「コイツワゴンの下に隠れていやがった!!!」

チンピラ「お前が野球民、だな!!!」

多(。(。(。「なんでここがバレたんや!!!」

チンピラ「俺に非通知の電話が来たんだよ。〇〇ホテル32号室にいる野球民を殺したら3億円だつてよおー!!」

チンピラ「こんな手っ取り早い稼ぎ聞いたことがねえぜ!!ハーミットパープル如きイエローテンパラスで瞬殺よお!!!」

多(。(。(。(あいつの言う通りこんな密室でイエローテンパラスと闘ったら十中八九ワイが死ぬ!!ここは一旦逃げさしてもらおうで!!)

ダッダッダッダッ!!!

チンピラ「そりゃあ逃げるよなあ…。」

チンピラ「だがこっちだって逃がすわけにはいかねえんだぜ。」

シ(。(。(。(よし!!もう少しで窓や!!)

グサツア!!!

シ(。(。(。(いでえ!!!背中にフォークが刺さりやがった!!!)

シ(。(。(。(うぐっ!!だがまあええ!!とりあえず6階から飛び降りるで!!!)

シ(。(。(。(「ハーミットパープル!!とりあえずどつかに捕まれえ!!!そしてターザンの要領で飛ぶ!!」

ガシツイ!!

ダツダツダツ!!

シ。(。(。(。「ふう…。なんとかホテルから逃げれたで…。」  
シ。(。(。(。「なんやと!?!」

チンピラはホテルの壁をイエローテンパランスで滑りながら地面に着地した。

チンピラ「戦慄したか…野球民?」

チンピラ「だがこれから起こることにお前は更に恐怖する!!」

チンピラ「背中見てみろよ野球民。」ゴゴゴゴゴゴゴゴ

シ。(。(。(。「ハッ!?背中にびっしりとイエローテンパランスの一部が付いておる!!」

チンピラ「フオークだ。さっきのフオークにはイエローテンパランスが大量に付着していたのさ!!」

チンピラ「知っての通り、イエローテンパランスが付着したものはじわじわと侵食して取り込む!!」

チンピラ「イエローテンパランスが付着したお前はいくら逃げようとももう死ぬだけだ!!」

シ(。(。(。(クソっどうする!?ハーミットパープルで本体を攻撃しようにも威力が弱すぎてイエローテンパランスに攻撃を吸収される。)

シ(。(。(。(かといってどこかに逃げてもじきに背中を食い破られて死ぬから本体を倒さなくてはならない!!)

シ(。(。(。(いや待てよ。もしこれがスタンド能力ではなくイエローテンパランス自身だったら離れば離れるほど効果は弱くなる!!)

シ(。(。(。(「だったらやるべきことは一つ!!!逃げる!!」

シ(。(。(。(「それだけやあああ!!!」

ハーミットパープル「:~:」グワアアン!!

チンピラ「どこに逃げようが。スタンドがくつついてるから場所は分かるぜ。」

チンピラ「じっくり追い込んで殺してやる。」

~~~~~

チンピラ「おいおい待てやあ野球民!!」

シ(。(。(。(「待てと言われて待つ馬鹿がどこにおるねん!!」

多(。(。(。「いくらでも逃げてやるで!!!」

ダツダツダツ

チンピラ「あいつ遠回りしたりしてグネグネ回りやがって…。」

チンピラ「そういえばあいつ…。なぜ逃げる方角が常に一緒なんだ?」

チンピラ「分かれ道を通ったとしても方角が常に一定…。」

チンピラ「はっ!!この住所!!アイツの家の近くだ!!」

チンピラ「まさか家にあるのか?俺のスタンドを倒すための鍵がよおー!!」

チンピラ「コイツは逃げていたんじやあねえ。俺を倒すため誘導していたのか!!」

チンピラ「だったら俺が行くべきところはただ一つ…。タツタツタツ」

多(。(。(。「?急にワイを追いかけなくなつたな。」

多(。(。(。「てかなくなってるわ。」

多(。(。(。「まあええ。あいつはワイのアパートにいる原住民の存在をきつと知ら

ん。」

シ(。(。(。「原住民のマン・イン・ザ・ミラーならワイにくつついたイエローテン
パラスを鏡の世界に連れ込んで引っぺがすことができる!!」

シ(。(。(。「そうすれば二対一でボコボコにできるで!!」

シ(。(。(。「ワイのアパートからせつかく逃げてきたのに、今度はワイのアパート
に逃げ込むことなんて皮肉やな…。」

シ(。(。(。「よし!!あともうちょっとでワイのアパートや!!!」

シ(。(。(。「このままこの四角いポストがある道を曲がれば!!」

シ(。(。(。「…?四角いポスト…?」

シ(。(。(。「ワイの住んでるアパートの通りのは丸ポストなはず…。」

シ(。(。(。「まさか!!!」

チンピラ「そう!!!俺様だあああああ!!!」

チンピラ「イエローテンパランスの能力でポストに化けさせてもらった!!!」
 チンピラ「だがちよいと気づくのが遅かったんじやあないのか? まぬけ
 めええええつえつええ!!!」

多()()「うぎやあああああああ!!!」

チンピラ「どうやら今ので体の8割もイエローテンパランスに呑み込まれた!!」

チンピラ「そして俺とのこの距離!!!」

チンピラ「ものの一分でお前をドロドロに溶かす!!」

多()()「あかん…。し、しぬう…。」

多()()「ハーミットパープル!!! 奴を攻撃しろお!!!」ビヤアアアアン

ハーミットパープル「:!!」グワアアアアン

チンピラ「効かねえよ馬鹿め!! スタープラチナのラッシュでも無効化するこの吸収力
 !!!」

チンピラ「打撃無効化はイエローテンパランスの特権だ!!!」

チンピラ「アパートに何かあるのか知らんが、このまま近づいてとどめを刺させてもらうぜ!!!」

ミ○○○「や、やめろお!!!」

チンピラ「ハハハハ!!!消火栓にまでしがみついて命乞いかあ!!!哀れだな野球民!!!」
 ミ○○○「ヒイヒイヒイ!!!」ズリ：ズリ：
 チンピラ「ほら地面を這いつくばって逃げる逃げるお!!!」

ミ○○○「く、来るなああああああ!!!!」
 チンピラ「だが来るなど言われて行かないやつがどこにいるんだこのマヌケめえ!!!!」
 ツカツカツカ

ミ○○○「だから来るなど言ってたのになあ…」
 チンピラ「なに？」

ミ。(。(。(。「いくらイエローテンパランスと言えども水流の勢いで壁に叩きつけられたようやな。」

ミ。(。(。(。「ワイの…、勝ちやで。」ドオオン!!

∧
∕ — T O — ∕
∕ — B E — ∕
∕ — C O N T I N U E D … ∕ ∕ ∕ ∕ —
∖ — — — — — ∖
?????????
∖
∖
?

止まれ、j民

野球民のスレ立ての翌日。

やきうがホテルでまだのんびりしていた時に

神奈川というこの土地で数奇な運命を辿る一人の男がいた!!!

(・、ω・) 「確かに俺はあのスタンドをスレで願ったさ…。」

(・、ω・) 「でも本当に欲しかったわけではない!!!」

(・、ω・) 「こんなクソスタンド」

(・、ω・) 「ちくしよおおおおおー」

~~~~~数日前~~~~~  
!!!!!!!~~~~~

( ・、ω・ ) 「…。」ツカツカツカ

店員「おつ真弓じゃねえか!!ほらこの果物とか買ってくれよ!!!八百屋の果物つてのは旨いんだぞお!!」

( ・、ω・ ) 「すまない。今ちよつと金銭が危ういのでね…。」

店員「おいおい。まーたパチンコで負けたんじやなかるうな？」

(・・ω・・)「よく知ってるな。盗撮でもしたか？」

店員「けつ。お前は常連客でよく立ち話すんだからそんなことすぐに分かるさ。」

(・・ω・・)「そりやどうも。」

店員「あ、そういえば最近流行ってるあの噂知ってるか？」

(・・ω・・)「ある噂？」

店員「たった一日の間に謎の不審死が全国で起こったって話。噂じゃ謎の組織や陰謀だとか言われてる。」

(・・ω・・)「ふうくん。」

店員「なんだよ。お前あんま興味持っていないな？」

(・・ω・・)「俺はそういう噂話は信じないたちなんだよ。どうせ偶然か積み重なっただけだろ。」

店員「じゃあこの事件はどうだ。東京のコンビニ大量不審死事件!!」

(・・ω・・)「なんだいそれは。」

店員「たった5分間に全ての防犯カメラが故障し、その後に店内に映っていた客、店員は体がボロボロ欠損死体に。」

そして犯人と思われる客は謎の拳銃自殺!!だが自殺に使われた拳銃は行方不明!!警

察はこの事件をただの猟奇的殺人事件としたが、明らかに不自然だろう？」

( . . . ω . . . ) 「へー。」

店員「しかもしかもだよ。最近この首都高速道路で現金輸送車が襲われたらしいんだよ。そこで発砲音を聞いた奴は何人もいるんだ。」

店員「だからネット上では拳銃を持った同一人物の仕業だと考えられている!!」

( . . . ω . . . ) 「お前のその熱すぎいな。俺はそういう噂にはからつきしなんだ。」

店員「まつそういうことで果物買え!!!」

( . . . ω . . . ) 「いや買わないよ。」

店員「ちえ。話に流されて買うと思ったのにな。」

( . . . ω . . . ) 「あ、そう。」

キャーッ引ったくり!!!

店員「なんだなんだ!!!」

( . . . ω . . . ) 「...!」

( . . . ω . . . ) 「じゃあちよつと捕まえてくる。」ダダダダダダ

店員「おお。そういう足早かったなお前。がんばれよ。」

~~~~~

(・・・ω・・)(ちよつとした善意から引つたくりを追いかけているが、後ろ姿はまるで女。)

(・・・ω・・)(だったら必要以上に暴行はしたくない。)

(・・・ω・・)(だがこのまま逃がすつてもよくねえしな。)

?? 「ちっ!!」

(・・・ω・・)(自分が追われることに気づいたようだな。)ダツダツダツ

(・・・ω・・)「おいその女止まれ!!!」

?? 「:。」ダダダダダダ

(・・・ω・・)(路地裏に逃げようが無駄だ!!!)

(・・・ω・・)「距離4m。もう手に届きそうだけ!!!」ダツダツダツ!!!

?? 「しょうがないなあ。」スタツ

(・ ・ ・ ω ・ ・ ・) (なんだこいつ。急に足を止めやがって。)

(・ ・ ・ ω ・ ・ ・) 「!?」

(・ ・ ・ ω ・ ・ ・) 「なんだあの影は!?まさか…あれは…。」

／ — i、 。 ワ。 ハレ (・ ・ ・ ω ・ ・ ・) 「ザ・ワールド!!!」

／ — i、 。 ワ。 ハレ (こいつ私のザ・ワールドが見えるってことは…。)

／ — i、 。 ワ。 ハレ 「おっさん!!あんたもスタンド使いなんだな!!」

／ — i、 。 ワ。 ハレ 「だったら殺す!!!」

(・ ・ ・ ω ・ ・ ・) 「ええ!?スタンド使いが現実にいるわけないし!!ってかなんでザ・ワールドが現実にいるんだよ!!!」

／ — i、 。 ワ。 ハレ (どういうこと?あの人もスレに書き込んでスタンド使いになっ
たんじやないの?)

(○、ω○、) 「すげえ。本物のザ・ワールドだ…。」

／—i、。ワ。ハレ (あの人敵意はなさそうだな…。私が見たあのスタンド使いの男とは別人なのか?)

(・、ω・) 「うーん。なんでスタンド使いがあたかもこの日本に大勢いるような口ぶりなのかは知らないが、泥棒はよくないぜ嬢ちゃん。」

(・、ω・) 「俺も昔はワルだった。だけど今は普通に生活してる。」

(・、ω・) 「見た感じ嬢ちゃんはまだ未成年だろう?しかもまだ若い。」

(・、ω・) 「だったらさ。そのおつかないスタンド引つ込めて盗んだもの俺に渡してくれよ。」

(・、ω・) 「被害者にはバックだけうまく取り返せたって言うからさ。」

レハ; |。ノ「黙れ!!」

(・、ω・) 「…。」

レハ； |。ノ「見ず知らずのお前に何が分かる。」

レハ； |。ノ「ようやく私はこの力で普通を取り戻せるんだ。」

レハ； |。ノ「あの憎い学校、憎い同級生、憎い社会から!!!」

レハ； |。ノ「家に引きこもった数年間。失われてた幸せをこの力で掴み取って
見せる…。」ゴゴゴゴゴゴゴゴ

(。、ω。ニ)「弱者から力で幸せを奪い取ったとしても、嬢ちゃんはそれで本当に幸せなのかい?」

レハ； |。ノ！、 「ウツ!!」

(。、ω。ニ)「嬢ちゃん。多分だが、虚しさしか残らないと思うぜ…。」

／—i、。ワ。ハレ「う、うるせええええええええええええええええええええええ!!!!!!」

ザ・ワールドが振りかざした拳を止める術を俺は持っていない。

俺はこのまま殴り殺されると思っていた。

だが現実はちよつぱり違った。

Gだなんてとんだ笑い話だな!!!」

(・・・ω・・)「クソツツ:。」

／— i、。ワ。ハレ「本当にスタンド使いだったら、大人しく死ねえ!!!!」

(・・・ω・・)「ちよつと待ったあ!!!!」

／— i、。ワ。ハレ「なんだよ。」

(・・・ω・・)「嬢ちゃんはあほの子か?」

／— i、。ワ。ハレ「は?」

(・・・ω・・)「俺を殺したらノトーリアス・B・I・Gの真の能力で、暴走するノトーリアス・B・I・Gが嬢ちゃんを八つ裂きにして殺してしまう。」

(・・・ω・・)「俺だってあの世で美人な嬢ちゃんのそんな姿を見たくはないぜ。」

(・・・ω・・)「だからさ、和解しないか?」

／— i、。ワ。ハレ「和解イ?違うだろ!?!お前は私に命乞いしてるだけだ。そんなのを和解とは言わない!!!」

／—i、。ワ。ハレ「お前の足を切断させてもらう。」

(○、ω○)「!?」

(・・、ω・・)(うまい具合に戦闘を避けられるかと思つたが、どうやらそう簡単には
いかないらしい。)

／—i、。ワ。ハレ「ぶった切れる!!!」

フード男「待ちなよ、フェリス。」

フード男「あんな奴と遊ぶより、俺と遊ぶほうぜ？」ニタア

(・・、ω・・)(なんだあいつは。フェリス?あの嬢ちゃんの名前か?)

／—i、。ワ。ハレ「その服とフード。お前、私の家を荒らしたスタンド使いだな!」

／—i、。ワ。ハレ「防犯カメラにしっかり写つてたからな!!!」

(・・、ω・・)(なんだって!?)

フード男「ボスがお前のザ・ワールドに目を付けている。」

フード男「どうだ？仲間にならないか？」

／—i、。ワ。ハレ「べっ!!何を今更。私とその勧誘を断ったら、翌日私の家をぐちゃぐちゃに荒らしやがって。」

／—i、。ワ。ハレ「どうせ私を殺しに来たんだろ!!!」

フード男「ご名答。」

フード男「お前はちよつといい子ちゃんすぎるんだよなあ。」

フード男「ザ・ワールドを所有していながら、万引きと泥棒を繰り返すだけ。目立つた犯罪もしていない。」

(．．ω．．) (思いつきり俺殺されかけたけどな。)

フード男「お前のその能力はボスの今後の動きに影響が出るかもしれないからなあ。」
フード男「スタンド使い殺しの一件もある。余計なスタンド使いは殺しておかないと

なあ!!!」

／—i、。ワ。ハレ「ふんっ!!お前のスタンドは知らないが、ザ・ワールドだったら余裕でぶっ殺せる!!」

フード男「∴。」ニヤリ

(∴ ∴ ∴) (フェリスの住所も今日ここで戦闘していることも能力もバレているのに、あの男の余裕はなんだ?)

(∴ ∴ ∴) (不意打ちならともかく、ザ・ワールドに正面切って戦えるスタンドなんて存在しないはずだが∴。)

(∴ ∴ ∴) 「ま、まさか∴。あいつの能力は!?!」

(∴ ∴ ∴) 「フェリス!!!あいつから離れる!!!近づくなあ!!!」

／—i、。ワ。ハレ「お前は黙ってる!!!」ダダダダダダ

／—i、。ワ。ハレ「ザ・ワールド!!!時よ止まれえ!!!」ドウウン!!!

~~~~~ 静止した時間の中~~~~~

／—i、。ワ。ハレ「たとえどんなスタンドであってもこの静止した時間の中を動き回れるスタンドは存在しない。」

／—i、。ワ。ハレ「この5秒の間に片を付ける!!!」

／—i、。ワ。ハレ「ザ・ワールド! アイツの心臓を貫けえ!!!」

ザ・ワールド「!!!」 ヒュウウン!!!

／—i、。ワ。ハレ「勝った!!!」

フード男「甘いねえ。実に甘い。」

レハ;。—。ノ「!?!」

フード男「紹介するぜ。俺のスタンドはザ・ワールド!!!」

フード男「お前と同じスタンドだあつあああああ  
!!!!!!」

レハ;。—。ノ「なにい!!!」

フード男「わざわざ近づいてくれて手間が省けたぜ。」

レハ;。—。ノ（まずい!! 隙を突かれた!!! だが体制を整える暇はない!! このまま殴る





ドグワアアン  
!!!!

レハ；。ノ「うおあああああああ  
!!!!!!」ドシユンツ

フード男「そして時は動き出す。」

~~~~~動き出す時間の中~~~~~

(・、ω・)「ハツ!!!フェリスが路地裏の壁に叩きつけられた!!!」

(・、ω・)「やはりコイツのスタンドはザ・ワールド!!!」

(・、ω・)「ザ・ワールド同士の戦いなんだこれは!!!」

レハ；。ノ「うう……」

(・、ω・)「フェリスは大分傷を負っている。奴はフェリスにとどめを刺すつもりだ!!!」

(・、ω・)「だったらやることは一つ!!!」

(・ ・ ・) 「フェリスを抱えて逃げる!!!」 ダダダダダダダ!!!

フード男 「なんだあいつは、フェリスの仲間か？」

フード男 「ボスからの情報にはあんな男いなかったな…。」

フード男 「だがまあいい。」

フード男 「大分足が速く、離されてしまったが一人の人間を抱えてどこまで離れられるかな？」

~~~~~

レハ； |。ノ「いたたた…。」

( ・ ・ ・ ) 「お、起きたか!!!悪いがここからは自分で走ってくれ!!!」

／ | i、。ワ。ハレ「!?なんでお前が私を連れて逃げてんだよ!!!」

( ・ ・ ・ ) 「危うく止めを刺されるところだったんだ。感謝してくれよ…。」

／ | i、。ワ。ハレ「誰がお前なんかに!!!」

( ・ ・ ・ ) 「まあまあ今はあいつから逃げるのが優先だろう？」

／ | i、。ワ。ハレ「確かに…。私が死にそうだったらお前を囚にするからな。」

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ) 「ひでえな…。」

／— i、。ワ。ハレ「にしてもなんで私を助けた？私はお前を殺そうとしたんだぞ？」  
 ( ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ) 「そりゃあ子供が見知らぬ男性に不当な理由で殺されかけてんだ。助けるに決まってるんだろ。」

／— i、。ワ。ハレ「いやそうじゃなくて!!!お前は私を憎くないのかよ!!!」

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ) 「いや全然。俺は子供を殴り殺そうとしているアイツの方が憎いね。」

レハ；。|。ノ「…。」

レハ；。|。ノ「お前の名前は？」

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ) 「真弓だ。」

レハ；。|。ノ「私はフェリス。17歳だ。」

レハ；。|。ノ「今までのことを謝る。…だから力を貸してくれないか。」

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ) 「当然だ。」バアアアアン!!!!

／— i、。ワ。ハレ「あのフード男。もっかい私が時止めしてぶん殴る。」

／—i、。ワ。ハレ「だからまともに戦えない真弓はここで待っててくれ。」

(・、ω・)「いや、こちらから仕掛けない方がいい。」

／—i、。ワ。ハレ「なぜ？」

(・、ω・)「時止め同士の戦いはまさに後出し可能なじゃんけんだ。」

(・、ω・)「先に時間を止めた方が、後から時間を止められて負ける。」

(・、ω・)「D I O は先に時間を止めて動けなくなったから負けたんだ。」

／—i、。ワ。ハレ「なるほど。」

(・、ω・)「だが相手もそれを分かっているはず……。」

フード男「そう!!!その通り!!!」

(・、ω・)「こいつ……目の前に……。」

／—i、。ワ。ハレ「いつの間にか路地裏を先回りされてたのか。」

フード男「今お前らとの距離は15m程度。」

フード男「先に時間を止めた方が負けだ。」

／—i、。ワ。ハレ「そんなの知ってる!!!」

(・、ω・)「気づいてなかった癖に……。」

／＼i、。ワ。ハレ「やーいやーい。こっちに時止めて来いよマヌケツ!!!」  
 ／＼i、。ワ。ハレ「ばーかばーか!!!!来やがれド畜生が!!!!」

シーンッ

(・・ω・・)「さすがに来るわけもないか。」

フード男「ふふ……。お前は全てが哀れだな。」

レハ；。―。ノ「なんだって……?」

フード男「お前の生い立ちや経歴は調べ上げられているんだぜ、フェリスちゃんよー。」  
 レハ；。―。ノ「……」

フード男「お前が15の時。父親が自動車事故で人を殺してしまい重い判決を下された。」



^  
/ | \  
- - -  
??????T  
O  
S  
S B  
? E  
C  
O  
N  
T  
I  
N  
U  
E  
D  
:  
/  
/  
/  
/  
-





フード男「食らえっ!!!」ブンッ!!

／—i、。ワ。ハレ「何かを投げてきやがった!!とりあえずぶつ壊せ、ザ・ワールド  
!!!」

ザ・ワールド「無駄無駄無駄無駄!!!」

パンツ!!!

／—i、。ワ。ハレ「容器が破裂して中身が飛び出してきた!!」  
レハ;。|。ノ「なんだこれは…。液体か!？」

／—i、。ワ。ハレ「こ、このにおい!!!まさか!!!」

フード男「そう!!!灯油だあっ!!!!」

フード男「止まった時間の中でも温度は健在!!!」

フード男「燃え盛る炎の中から俺を殺せるかな?」

フード男「ザ・ワールド!!! 殴った拳の摩擦で発火させる!!!」

ザ・ワールド「!!!」シュツ!!

ブオオオオオオオオ  
!!!!!!

レハ; |。ノ「うあああ!!! 熱い!!!」

フード男「炎に囲まれちゃったようだなフェリス…。」

レハ; |。ノ（このまま時が動き出せば私は間違いなく焼死する!! かといって残り3秒でこの炎をラツシュでかき消すのは無理だ!!）

レハ; |。ノ（一回ザ・ワールドに私を投げさせて逃げるのが最善!!）

レハ; |。ノ「今は逃げるが、覚悟しておけよてめえ!!」

フード男「いいや、お前は逃げない。」

フード男「なぜならお前は母親思いだからなあ!!!。」





くく動き出した時の世界くくくく

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ) 「うお!!!急に目の前が燃えやがった!!!」

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ) 「そういえばフェリスはどこだ!!」

フード男「そこだぜ。」

そうやって指さした先には俺の横でぐったりとしているフェリスがいた。

レハ; |。ノ「う…、母さん…。」

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ) 「てめえよくも!!!!」

フード男「親を人質にされたらなりふり構わず突っ込むとは、馬鹿だな。」

レハ; |。ノ「…私の体を起こしてくれ真弓。」

レハ; |。ノ「まだ戦える。そしてアイツをぶっ飛ばす…。」

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ) 「無茶だフェリス。君はもう戦えるような状態じゃない!!」

レハ; |。ノ「それでも!!!戦わなきゃいけないんだよ…。」

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ) 「フェリス…。」

フードの男 「ハハハハ!! 来いよフェリス…。ぶっ殺してやる。」

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ) 「…。」 ツカツカ

フード男 「お？ 今度はお前が戦う番か？」

レハ； |。 ノ 「真弓。お前のノトリーアス・B・I・Gじゃあどうやっても勝てない!!!」

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ) 「勝てる勝てないじゃない…勝つんだよ。」

レハ； |。 ノ 「…。」

フード男 「お前本物の馬鹿だなあ!!! ノトリーアス・B・I・Gでどう戦うんだ？ 自殺でもすんのか？」

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ) 「ああ、そうかもな。」

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ) 「フェリス。俺の生き様、背中を通して見ておけ。」 ゴゴゴゴゴゴゴゴ

レハ； |。 ノ 「!？」

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ) 「俺は今どす黒い悪と対峙してる。」

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ) 「…まだ17歳の親を人質に取り、まるで自分たちが神にでもなったかのように人一人を平然と殺そうとする。」ハア

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ) 「てめえみてえな…、奴を…俺は許してはおけねえ…。」ハアハア

フード男「許せないからなんなんだよ。別にお前のような弱者が俺を許せなくてもそんなの関係ねえんだよおおお!!!」

フード男「ザ・ワールド!!」

フード男「時を止める必要もねえ!!! 奴の腹を突き刺せ!!!」

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ) 「…食ら…え…。」ポイツ

フード男「なんだあその弱つちいバッグの投擲は!？」

レハ； |。ノ「私がひったくったバッグを投げたっ!!!」

フード男「こんなの食らっても痛くも痒くもないが、せつかくだ。ザ・ワールドのパワーでバッグを貫いてやる!!!」

ブチイッ!!!

レハ；。ー。ノ「なんとというスピードで…。」

レハ；。ー。ノ「バッグの中にいたノトーリアス・B・I・Gがあいつの両腕を取り込んだ!!!」

／ーi、。ワ。ハレ「ラッシュのスピードでノトーリアス・B・I・Gはあいつを目標にしたんだ!!!」

フード男「なんだあこいつは!!!なぜノトーリアス・B・I・Gがバッグの中にいるん





くくくくく 静止した時間の中くくくくく

フード男 「奴の異様な呼吸は死にかけていたからなのか…。」ハアハア

フード男 「でも一体なぜ死んだんだア…。死ぬそぶりは一切見せなかつたはず…。」

フード男 「今はそれよりもだ…。」

フード男 「両腕を犠牲にしたくはない!!」

フード男 「だがしょうがねえ!!!俺の両腕をザ・ワールドの足で切断するう!!!」

バゴツォ!!!

フード男 「俺の後ろのマンホールから…、ザ・ワールドが出てきやがった…。」

／—i、。ワ。ハレ「お前がくつちやべっている間にマンホールに回らせてもらつた。」

レハ；。|。ノ「真弓の犠牲によって得たチャンス!!逃がしはしない!!!」

レハ；。|。ノ「このまま殴らせてもらう!!!」ダツダツダツ





な。」

／＼ i、。ワ。ハレ「真弓は生き様を背中を通して見ろと言った。」

／＼ i、。ワ。ハレ「彼の背中には私への命令が書かれてあったのだ。」

／＼ i、。ワ。ハレ「心臓を止めろと。」

／＼ i、。ワ。ハレ「そして彼が話している間に、D I O 戦の承太郎のように心臓を止めた。」

ノトーリアス・B・I・G「!!!」

／＼ i、。ワ。ハレ「今度はこっちを向きやがった。」

／＼ i、。ワ。ハレ「こっちに向かってくる!!!」

／＼ i、。ワ。ハレ「だがお前もじきに消える。」

／—i、。ワ。ハレ「ザ・ワールド!!! 真弓の心臓を全力で動かせエツ!!!」  
ザ・ワールド「:!!」ガシィツ!!

ドクドクドクドクドクドク  
!!!!

／—i、。ワ。ハレ「い、生き返らない!!!!」  
／—i、。ワ。ハレ「そ、そんなっ!!!!」

ドクドクドクドクドク  
!!!!

ノトーリアス・B・I・G「:!!!」ザツザツザツ!!!

／—i、。ワ。ハレ「ようやく信頼できる人ができたと思っただのに:。」  
／—i、;ワ;ハレ「私は彼を失いたくはない!!!!」ブワツ!!!

ドクドクドクドクドク  
!!!!



(・・ω・) 「死ぬことがトリガーのノトーリアス・B・I・G。もし本体が生き返ったらまた制御可能になるんじゃないかと考えたんだが、ちゃんと上手くいったみたいだな。」

／—i、。ワ。ハレ「ま、真弓いいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!!」ギユウウウウウウウウウウ!!!  
ウ!!!

(・・ω・) 「おいおい抱き着くなよフェリス。オイル臭いぞお前。」  
／—i、。ワ。ハレ「めっちゃつ失礼だわこいつ!!!」

(・・ω・) 「ありがとうフェリス。君のおかげだ。」  
／—i、。ワ。ハレ「真弓!!!」

(・・ω・) 「だがまだ戦いが終わったわけじゃあない。君の母親の所に行かないと。」  
／—i、。ワ。ハレ「そうね!」

~~~~~精神病院~~~~~


?? 「ボス、あのザ・ワールド使いは作戦を成功させましたか？」

?? 「!? 失敗に終わっただつて!？」

?? 「しかもあいつがいる!？」

?? 「…分かりましたボス。ここにやってくるであろう奴を必ず始末し、作戦を成功させます。」 ガチャッ

~~~~~

／—i、。ワ。ハレ 「母さん!!!」

母 「あらフェリス。久しぶりね。」

／—i、。ワ。ハレ 「なにか痛いことされてない!？」

母 「いや、そんなことないけど。」

／—i、。ワ。ハレ 「頭のバンダナとその毛布はどうしたの?」

母 「ちよつとぶつけちゃってね。あと最近寒いし、毛布で包まってるの。でも大丈夫だから。」

／「i、。ワ。ハレ「あ。そう。気を付けてね。」  
母「はいはい。」

母「そういえばあの人は誰？」

／「i、。ワ。ハレ「真弓さんって言うの。」

母「へえ…。真弓さんね…。」

トントン

医者「入りますね。」

( ．．ω．． ) 「おお。入れ。」

母1「…。」ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

ドアから入ってきたその人は意外!!  
フェリスの母親だった。

( ・、ω・ ) 「!?なぜ母親が二人いる!?

／— i、。ワ。ハレ「!?

／— i、。ワ。ハレ「どうなってるの!?

母1 「…。」ダツダツダツ!!!

母2 「危ないわフェリス!!!」

( ・、ω・ ) 「ドアから来た母親が右手で包丁を持ってフェリスのもとへ向かってい  
る!!!」

( ・、ω・ ) 「きつとドア付近の奴が偽物だ!!!」

／— i、。ワ。ハレ「分かった!!!」

( ・、ω・ ) 「なーんてな。」

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ) 「さつきから毛布の下で、なに手を動かしてやがる!!!」

母2 「ん!？」

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ) 「オラッア!!!」 ブンッ!!

ドゴオッ!!

母2 「うぎやああああ!!!」

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ) 「どうやらベツトにいた母親が偽物だったみたいだな。」

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ) 「毛布の下で手を動かし、本物の母を操っていたみたいだな。」

／ — i、 。 ワ。 ハレ 「え、そうなの!？」

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ) 「まあフェリスは気をそらす係だ。助かった。」

／ — i、 。 ワ。 ハレ 「なんか複雑な気分…。」

医者 「クソがつ!!!」

／ — i、 。 ワ。 ハレ 「よくも私の母を利用してくれたな…。」 ヨヨヨヨヨヨヨヨヨ

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ) 「フツ飛ばした人形がもう木製人形に戻っている。」

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ) 「サーフィスか。こいつのスタンドは。」

／— i、。ワ。ハレ「だったらもう万策尽きたな。あとはザ・ワールドで殴らせてもらう!!!」

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ) 「∴。木製人形の片腕がない。いや、元からなかったのか!!」

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ) 「だから包丁を右手のみ握らせたのか。」

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ) 「いやだったらなぜ片腕がないんだ∴?」

医者「気づくのが遅いぜ馬鹿ども!!!」

医者「オラツ!!!」

／— i、。ワ。ハレ「ぐへえ!!!」

( ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ) 「木製人形の片腕でフェリスを殴った!!」

医者「サーフェイスが触れた人間はなんだろうとコピーする!!それはこの片手も同じだ!!」

医者「そして本物はコピーの操り人形になるのさ!!」  
医者「だからこの片手を投げさせてもらおう。」

( ・ ・ ω ・ ・ ) 「!?」

医者「ぶっ飛べ!!!」

パリン!!!

投げた片腕は窓を突き破った。

そしてそれに応えるようにフェリスの腕も窓引っ張られた。

／—i、。ワ。ハレ「うああああ片腕の制御がきかないいいいい!!!」

パリンツ!!!

( ・ ・ ω ・ ・ ) 「フェリスうううううううううう!!!」

フェリスは片腕とともに窓を突き破った。

医者「これで邪魔者はいなくなつた。」

( ．．ω．． ) 「そうか？ 例えここが4階だとしてもフェリスのザ・ワールドならきつと無事だぜ。」

医者「俺はフェリスを殺すつもりで片腕を投げたわけじゃあない。」

医者「お前を気絶させるための時間を稼ぐためさ!!!」

( ．．ω．． ) 「こいつ!! 懐からスタンガンを!!!」

( ．．ω．． ) 「でもお前らの標的はフェリスだろう？ なぜわざわざ俺を狙う？」

医者「なにか勘違いしているようだな。」

医者「フェリスの殺害命令も出ていたさ。だが俺の真の狙いはお前だぜ真弓!!!」

( ．．ω．． ) 「俺だと!？」

医者「ボスのスタンドでもお前の詳しい住所までは特定できなかつたようだなあ…。お前をずっとボスは探し回っていたのさ。」

医者「確かにあのフード野郎はあくまでフェリスを殺害しようとした。でもビビったよ。まさか組織での最優先目標であるお前が現れた情報が入ったと聞いたときはななな!!!」

医者「スタンガンで気絶させたら、病院内で待機している俺の仲間たちに身柄を受け渡す。」

医者「つてことでよお、黙って気絶しろっ!!!」バチバチ!!

( . . . ω . . . ) 「だったらよおー!!!フェリスの家族やフェリスのことよりもよお!!!」

( . . . ω . . . ) 「俺をもつと重点的に調べるべきだったなあ!!!医者あ!!!!!!」

医者「なにつ!?!」

( . . . ω . . . ) 「俺は最近まで暴行罪でムシヨに捕まってたんだぜ。4人のチンピラを半殺しにした罪でよおっ!!!」ゴゴゴゴゴゴゴゴ

( . . . ω . . . ) 「オラツツ!!!」



医者「グワツ!!!」

( ．．ω．． ) 「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ  
!!!!!!!」

ドキヤバキドゴオ!!!

医者「ぐっはあっ!!!」

医者「スタンドなしでも十分強いなんて聞いていない…。」

医者「う…。うう…。」バタン

( ．．ω．． ) 「どうやら俺は早急に逃げ出さないとイケないらしい。」

ジリジリ…ジリ…

( ．．ω．． ) 「なんだこの音は…?」

( ．．ω．． ) 「はっ!? このスタンドは!?!」

( ○、ω○ ) 「うあああああああああああああああああああああああああああああ

∖ ^ あ  
— T / /!!!!!!  
????????? 〇  
∖  
∖ B  
? E  
C  
O  
N  
T  
I  
N  
U  
E  
D  
:  
/  
/  
/  
—

## 鏡の世界 v s 時の止まった世界

レハ；。―。ノ「いたた…。」

レハ；。―。ノ「四階から落とされてもなんとかザ・ワールドで落下の衝撃を防げた。」

レハ；。―。ノ「はやく真弓のところに向かわないと!!」

フェリスはザ・ワールドで時を止めながら驚くべきスピードで病院内を駆け回った。フェリスの願いはただ一つ。真弓が無事でいてほしい、ただそれだけだった。

だがフェリスが真弓のいる病室に辿り着いたとき、その願いは儚く散ってしまった。

病室には彼の右腕と夥しい血痕が残されていた!!

その光景をみたフェリスは真弓に起きた最悪の事態を想像し、一人、泣いた。

~~~~~フェリスと真弓の戦いから1日後~~~~

（・・・・・）「やきうがいなくなると寂しくなるもんだなあ。」

（・・・・・）「あいつ今頃ホテル生活か。明日には飛行機に乗るとか言ってたなあ。」

「……ω……」朝の日課でなんじ見ようと思っただけど、やきうの謎の住所バレの件もあるから怖いよ。」

「……ω……」「まあそれでもなんじやめられないんだけどね!!」

「……ω……」「おつ、すっかり全国各地で起きた謎の不審死事件もなんじでオカルト化してる。」

「……ω……」「幽霊や新興宗教のしわざだとかも書かれてるし、もうめちやくちやだ。」

「……ω……」「俺たちスタンド使いが死闘を繰り広げてるなんて誰が想像できるんだろう。」

「……ω……」「最近関東周辺で起きてる停電とも結びつけている人がいる。馬鹿だなあ。」

ピンポーン、ピンポーン

「……ω……」「!?俺の隣のやきうの部屋のチャイムが鳴っている!!」

「……ω……」「まさか、新手のスタンド使いか!?!」

ピンポーン、ピンポーン

（・・ω・・）「やけにしつこい。やはりやきうの存在を知るスタンド使いらしいな。」

バキッドゴオンツ!!!

（・・ω・・）「コイツ扉を破壊しやがった!!!」

（・・ω・・）「やはりやきう殺しのスタンド使い!!!」

（・・ω・・）「ならば容赦はしない!!」

（・・ω・・）「こんなこともあろうかとやきうの部屋をくり抜き、鏡をはめ込ませてもらった。」

（・・ω・・）「やきうの部屋に侵入したが最後!!鏡の世界に招待してやる!!!」

（・・ω・・）「マン・イン・ザ・ミラー!!!奴を招待しろ!!!」

マン・イン・ザ・ミラー「…グワアアアオ!!!」 ブウツンツ!!

?? 「なんだこれ!! うおおおおお!!!」 グワツンッ!!

くく鏡の世界くく

(・・ω・・) 「ようこそ鏡の世界へ。今から行われるのは俺による俺のための一方的な惨殺だぜ!!!」

／—i、。—、。ハレ「お前もスタンド使いか。」

レハ；—。ノ「私はてめえらスタンド使いを許しはしないッ!!!」

(・・ω・・) (なんだこいつ殺気は…。今までの奴らとは違った、まるで復讐心に燃えるかのような禍々しい殺気は…)。

(・・ω・・) (どうやらこちらも「覚悟」しないとイケないようだ。)

(・・ω・・) 「君みたいなお子ちゃまを殺すのはいささか心が痛むが、お前も「覚悟」をしてここに来たのならば、死の運命を迎え入れろ!!!」

レハ；—。ノ「お子ちゃまだとお…?」

レハ；—。ノ「なにか勘違いしているようだが死ぬのはお前の方だぜ。」

レハ；ー。ノ（やはりあのスレは他のスタンド使いを殺すための罠。正義のスタンド使いなんて存在しなかったんだ。）

（、・ω・、）「イキがつているようだがマン・イン・ザ・ミラーの鏡の世界ではスタン
ドは出せないぜ？」

レハ；ー。ノ「それがどうした？ なにも問題はない。」

（、・ω・、）「そうかい…。」

原住民は懐からナイフを取り出すとフェリスに向かって走り出した。

（、・ω・、）「できるだけ苦しめないように心臓を一突き、それで終わらせるツ!!」

（、・ω・、）「食らえっ!!」

／—i、。ワ。ハレ「ザ・ワールド!!!」バツ!!

（、・ω・、）「なっ、ザ・ワールド使いか!!」

／— i、。ワ。ハレ「止まった世界で動けるのは私とザ・ワールドだけ。」

／— i、。ワ。ハレ「所詮鏡の世界!! 本体の世界が止まれば、それを写すだけの鏡の世界も止まる!!!」

(。・ω・、)(やばいつ!! ナイフを取り出したのは間違いだった!!!)

レハ; |。ノ「お前のそのナイフを使って処刑させてもらう:。」

／— i、。ワ。ハレ「ザ・ワールド!!! 時よ止まれい!!!」

ドウウン!!!

くく鏡の世界が止まった世界くく

レハ; |。ノ「あのスレで晒されていたハーミットパープル使いのスタンド使い殺し、野球民という奴のところに行けば憎きスタンド使い共と組織と呼んでいる奴らをぶつ殺せるかと思った。」

／— i、。ワ。ハレ「:が、ただの罠だった。仲間を作るといふ希望は絶えたが、私単身だけでも殲滅して見せる!!」

レハ; |。ノ「そのためにもさっさとこいつを殺そう。」

そういうとフェリスはナイフを原住民の右手から奪い取り、急所である原住民の左胸にナイフを立て、ぐつと力を込め刺した。

フェリスは自分でも驚くほどに、人を直接殺したのが初めてだったとは思えない冷静さを保っていると感じた。

／—i、。ワ。ハレ「時は動き出す。」

グサツ!!!

くくく動き出した鏡の世界くくく

(。ω。、)「ぐおおおおおおお!!!」

(。ω。、)「胸にナイフがああ!!!」オシヤアア!!

バタツ!!

(。ω。、)「……。」

レハ;。|。ノ「死んだか……。」

しーん

レハ； |。ノ「これで戦いも終わりだ。」

レハ； |。ノ「いや、待てよ。なぜ私は元の世界に戻らないんだ？」
レハ； |。ノ「しっかりとあのスタンド使いの殺人鬼を殺したはずだ!!!」

(ゝ・ω・ゝ) 「フツ……。そういうところがお子ちやまなんだよ。」

(ゝ・ω・ゝ) 「お前俺の左胸を刺したなあ？」

レハ； |。ノ「ああ!!! 確かに急所を狙ったはずだ!!!」

(ゝ・ω・ゝ) 「クク。ここが鏡の世界だつてこと忘れてんじやあねえか!? お子ちやまよ
???」

レハ；。―。ノ「!?」

（ゝ・ω・ゝ）「俺の心臓は左じゃなくて右に移動してるんだよお——!!!」

／―i、。ワ。ハレ「そ、そうか!!」

（ゝ・ω・ゝ）「いかにも冷静さを装っているようだが、全然冷静じゃあねえなあ？」

（ゝ・ω・ゝ）（まあもつと強く押されてたら普通にやばかったし、首筋を狙っていたら終わりだったんだがな。）

レハ；。―。ノ「く、くそっお!!!」

レハ；。―。ノ「うおおおおお!!!」

（ゝ・ω・ゝ）「ナイフ持って突っ込んだところでスタンドがないんじやあ無理だぜ？」

マン・イン・ザ・ミラー「……」。ババババババババババ!!!

レハ；。―。ノ「うぐうう!!」ドギヤアンツ!!!

レハ；。―。ノ「……まさか負けるとはな。」

レハ；。―。ノ（みぞおちをやられ、呼吸が苦しい。）

（ミ・ω・シ）「一つ質問をさせろ。」

レハ；。―。ノ「…？」

（ミ・ω・シ）「お前さんのためにやきうの部屋に来た？」

レハ；。―。ノ「…正義のスタンド使いに協力してもらうためだ。」

レハ；。―。ノ「そういうお前は、ここにノコノコやって来たスタンド使いを殺すための始末係か？」

（ミ・ω・シ）「…、なんていえばいいのかねえ…。」

（ミ・ω・シ）「ごめん」

!!!!!!!

（ミ・ω・シ）「俺てつきりやきうを殺すための刺客だと思ってたわ。」

レハ；。―。ノ「？」

(・ω・) 「マン・イン・ザ・ミラー!!!」

マン・イン・ザ・ミラー「:。」ドウウン!!

~~~~~平常世界~~~~~

レハ; |。ノ「なにしてんの?」

レハ; |。ノ「今ならお前をすぐにでも殺せるけど?」

(・ω・) 「なんていうかその俺も正義のスタンド使いの仲間っていうか、やきうがない間ちよつと張り切りすぎたというか:。」

／—i、。ワ。ハレ「ふん:。そういう馬鹿がスタンド使い殺しなんだあ。」

(○○○○) 「うつ:。」

／—i、。ワ。ハレ「よくもまあ生き残れたね。」

(・ω・) 「ちよいちよいちよい!!お前だつて完全に俺のことを殺人鬼呼ばわりしてたじゃないか!」

／—i、。ワ。ハレ「お前、私が殺人鬼呼ばわりしたところで気づいたんだろ?なにイキがつてんだよ。」

(○ω○)「うっ…。おっしやる通りです。」

／i、。ワ。ハレ「まあお前の胸の傷は放っておいて、とりあえずやきうが帰ってくるまでここに待機しとけばいいんだろ？」

(・ω・)「ずいぶん呑み込みが早いね。」

／i、。ワ。ハレ「まあスタンド使いが現実になつてからどんなどんでもないことも信じるようになったな。」

(・ω・)「あつそう。」

(・ω・)「つてかこの傷めつちや痛いんだけど。」

／i、。ワ。ハレ「知らん。自分で治せ。」

(・ω・)「ピチピチの少女が包帯巻いてくれるとうれしいんだけどなー。」

／i、。ワ。ハレ「ザ・ワールド。」

(○ω○)「うあああああああ!!!分かった俺が悪かつたつて!!!」

(・ω・)「まあ一回殺し合った仲だけど、これからよろしく。」

／i、。ワ。ハレ「ああ。」

(・ω・)「(そーいややきうと出会った時も俺の勘違いで殺し合いになつた気が…)」

／—i、。ワ。ハレ「でもやきうが帰ってくるまで暇なんだろう？私は今すぐにも出  
発したいんだが。」

（・ω・、）「そう言われてもなあ。」

ピンポーン、ピンポーン

（・ω・、）「今度は俺の家のチャイムか？」

（・ω・、）「刺客じゃないといいけど…。」

／—i、。ワ。ハレ「私が出ようか？」

（・ω・、）「いや、とりあえず一回鏡の世界へ許可しよう。」

多（、）（、）「おい、なんでワイの部屋の扉壊れてんねん!!!」  
多（、）（、）「原住民入れてくれや!!!」

∧  
/  
—  
?????????T  
          ó  
  )  
  )  
  ?  
  C  
  O  
  N  
  T  
  I  
  N  
  U  
  E  
  D  
  :  
  :  
  /  
  /  
  /  
  /  
  —



## 電撃のj

シ(。(。(。「はえ、フエリスが仲間になったんやな。」

／「i、。ワ。ハレ」ああ。よろしく。」

(。(。(。(シ(。(。「よろしくやで!!」

(。(。(。(。「挨拶が終わったところでなんだけど、その人だれ?」

原住民はハーミットパープルで拘束されているボロボロの男を指さした。

シ(。(。(。「どうやらコイツ、ワイがホテルにすることを知られてて送り込まれた刺客らしいねん。」

(。(。(。(。「へえ。大変だったな。」

シ(。(。(。「わざわざアメリカまで行かなくても、コイツから情報吐かせれば楽にワイの住所晒し野郎を殺しに行けるで。」

(。(。(。(。「おお!!それはいいな!!」

／「i、。ワ。ハレ」どうやら活路が見つかったらしいね。」

シ(。(。(。「つてことで起きろチンピラッ!!!」ボコー

チンピラ「う、うう…。」

シ(。(。(。「お前、誰の命令でワイのいるホテルまでやってきたんや?」

チンピラ「し、知らねえ!!!名前聞いてねえし、第一俺はお前を殺したら金をやると言われただけだ!!」

シ(。(。(。「じゃあその命令内容を事細かに話せ。」

チンピラ「…。。○○ホテル32号室にいるハーミットパープル使いの野球民を殺せ。

もし仲間がいたらそいつも殺せ。」

チンピラ「殺したかどうかは俺が把握するから大丈夫だ。もしちゃんと殺したら家に現金3億円を置いておく。」

チンピラ「つて言われただけだ…。」

シ(。(。(。「なんか他には言ってなかったんか?」

チンピラ「で、電話の途中にあっちから電気をバチバチ鳴らした音を聞いたぐらいだ。」

(。(。(。(。「しよばいなあ…。」

／＼i。ワ。ハレ「他には？ないの？」

チンピラ「もうねえ……。だから開放してくれよお……」

多(。(。(。「コイツなんも情報持つてないんか……」

多(。(。(。「なんでワイを殺しに来た奴を開放しなきゃいかんねん。どうせお前、俺以外でも殺人を働いてきたやろ？」

多(。(。(。「明らかに手馴れだったもんなあ？」

チンピラ「……、だったら俺のイエローテンパランスで皆殺しだア!!!」グワアンツ!!

そう言い放った途端ハーミットパールが鳴をめるように喉を締め付けた。

チンピラ「うぐ!!!」

多(。(。(。「ワイがお前にスタンドを出現させる時間なんて与えると思っただんか？」

チンピラ「くそ……」

多(。(。(。「じゃあ、あばよ。」

チンピラ「ひ、一つ言い忘れていたことがある!!!」

多(。(。(。「？」

チンピラ「ノトーリアス・B・I・G使用の真弓とかいう奴にもし出会ったら、殺さ

ずに生け捕りにしろと言われた!!!」

（…ω…）「真弓？ いったい誰のことだ？」

チンピラ「し、知らねえよお…。」

レハ；。―。ノ「おい!! 真弓、今真弓って言ったよな!!!」

チンピラ「そうだが…。」

多（…）（…）「なにか知ってるんかフェリス？」

レハ；。―。ノ「ちよつとだけの間、一緒に共闘してなにかの組織のメンバーのスタ

ンド使いを倒したんだよ。」

レハ；。―。ノ「でもちよつと目を離れた先に、真弓は大量の血痕と片腕を残して消

えてしまった…。」

レハ；。―。ノ「私は死んだ真弓の復讐のためわざわざここを訪れたんだよ!」

（…ω…）「つてことはチンピラにやきうを殺すよう命じたのも謎の組織で、真弓とフェリスを襲ったのも組織ってことか。」

レハ；。―。ノ「もしあるとき真弓を生け捕りにしたのならば…、野球民!!!」

多（…）（…）「ああ、分かっとなる。」

「真弓の場所をハーミットパールで探れば謎の組織の居場所が分かる、やろ?」

「そ、そうか!!! 生け捕りなはずだからもう真弓は組織に捕まっている可能性が高い!!!」

「もしかしてあの住所晒しのスタンド使いも組織の一員かも…。」  
「i、w。ハレ」組織のもとに行けば敵を一網打尽にできるって訳ね。」

「よし!!! そうと決まればこのチンピラを殺してさっそく組織のもとへ出発だ!!!」

チンピラ「おいおいおい!!! 見た感じとんでもなくいい情報が手に入ったんだろ? だったら俺を開放してくれよ!!!」

「w。w。w。どうするやきう?」

「開放するのはできない相談や、チンピラ。」

「だけどさすがにしゃあない。三か月くらい立てなくなるまでボコボコに殴って反省してもらうやで。」

「まあせっかく情報吐いてくれたし、殺しはしないが今後スタンドで犯

罪を犯したらワイらがぶっ殺すやで。」

チンピラ「ひいいい…。」

バチチ…。ジリリ…。

（、・ω・、）「なんだこの音。まるで静電気のような音は…。」

チンピラ「この音、俺に命令した奴から聞こえてきた音だ…。」

ミ（。、）（。、）「なんやと!? ってことはもしかや!?!」

コンセントから眩く光が溢れだしたと思うと、宙にスタンドが浮かび上がった。

レッド・ホット・チリ・ペッパー「俺の登場だ…。」バーン!!!

／—i、。ワ。ハレ「れ、レッド・ホット・チリ・ペッパー!!!」

（、・ω・、）「電気の性質を持ち、電線や電気の中に潜り込めたり、電気を吸収し強くなるスタンド!!!」

ミ(。(。(。「まさかこのスタンドがチンピラに命令したとはな…。」

チンピラ「もしかして、俺を助けに来てくれたのかー!!!」

チンピラ「助けてくれレッド・ホット・チリ・ペッパー!!!俺こいつらに捕まってんだよ!!!」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「そうかそうか。よし、ならば…。」

チンピラ「へへ、助かったぜ!!!」

チンピラがそう言った途端、レッド・ホット・チリ・ペッパーの拳がチンピラの腹を貫いた。

ミ(。(。(。「!?!」

(。O。O。(。「な、なにーーーーー!!!」

／—i、。ワ。ハレ「…。」

チンピラ「ど、どうして…。」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「わざわざ組織の人間が出向かなくてもいいようにてめえを雇ったのによお。負けた拳句にべちやくちや喋りやがって。」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「てめえみてえな能無しは、俺自身がぶつ殺さねえと気が済まねえんだよなあ!!!」

そういつてレッド・ホット・チリ・ペッパーは輝きを増したかと思うと、目にも見えるほどの電気がチンピラの体に流れ込んでいった。

チンピラは少しの間もがいていたが、すぐにこと切れた。

ミ(。(。(。「ワイ自身もアイツを殺そうとしたが、お前にむかつ腹が立ってきたわ。」

ミ(。(。(。「わざわざムカついたからって殺しに来やがって…。」

ミ(。(。(。「ハーミットパープル!!!」グワアン

ハーミットパープル「…!!!」

ミ(。(。(。「アイツを捕縛しろ!!!」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「のろいのろいのろいのろい!!!」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「ふんっ!!!」



バキッ!!

◇○○○「うっ…。」

（　・　ω　・　・　）「や、やきう!!!」

／—i、°。ワ。ハレ「ザ・ワールド!!!時よ止まれ!!!」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「おっと、やばいやばい。」

バチチイ!!!

（　・　ω　・　・　）「コンセントの中に逃げ込みやがった…。」

／—i、°。ワ。ハレ「これじゃあ時を止めても無意味。」

（　・　ω　・　・　）「やきう!!大丈夫かい!?!」

◇○○○（　・　ω　・　・　）「ああ、なんとか。」

（い・ω・い）「まさかアイツから仕掛けてくるとはなあ。」

／—i、。ワ。ハレ「でもどうやら逃げたみたいだし、なんとかなつたみたいね。」

（い・ω・い）「こうもスタンド使いと戦うと疲れるなあ。」

ふと原住民がテレビの横を通り過ぎる。その時だった。

バチチ。ジリリ。

（い・ω・い）「まただ!!どこからだ!?!」

多（い・ω・い）「原住民!!! テレビから離れる!!!」

（い・ω・い）「え!?!」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「テレビの中だよバアアアアカ!!!」

（い・ω・い）「うあああああああ!!!」ガシイッ!!

／—i、。ワ。ハレ「原住民がテレビの中に引きずり込まれた!?!」

多（い・ω・い）「フェリス!!! 時止め頼む!!!」



レハ；。|。ノ「まさか電気をプロテクトのように纏うとは…。」  
レハ；。|。ノ「時は動き出す…。」

~~~~~

レッド・ホット・チリ・ペッパー「どうした？時を止めたのに豆鉄砲食らった鳩みたいにビビつちまつて俺を殴れないのか？」

レハ；。|。ノ「こ、こいつ…。」

多（。）（。）「どうしたフェリス!?はっ!?こいつ電気を纏つていやがる。」

多（。）（。）（そりゃあ時を止めても「無駄」つて訳やな…。）

レッド・ホット・チリ・ペッパー「つてことでこのまま原住民は感電死してもらおう!!」

バチチ!!!

（。ω。、）「うぎゃあああああああああああああ
レハ；。|。ノ「か、完全に引きずり込まれた。」
!!!!!!

レハ；。|。ノ「ど、どうしよう。」

レハ；。|。ノ「な、なにか方法は…。」

レハ；。|。ノ「なにうつ向いてんだよ野球民!!!早く原住民を助けないと!!!」

多〇〇〇「…。」

レハ；。|。ノ「おい、どうしたんだよ野球民!!!」

レハ；。|。ノ「まさか、もう原住民を助ける方法は無いっていうのか?」

多〇〇〇「…。」

レハ；。|。ノ「そ、そんな…。」

多(、)(、)「今や!!あそこの電線をこの包丁を投げて切断するんや!!!」

レハ；。|。ノ「!?!」

野球民はアパートの窓から見える電線を指さした。

／—i、。ワ。ハレ「よ、よく分からないが野球民のことを信じるぞ!!!」

ブンツ!!!

ザクツ!!!

レッド・ホット・チリ・ペッパー「なにいいいい!!!」
（、・ω・、）「うお!!!急に電線から飛び出た!?!」

／—i、。ワ。ハレ「ま、まさか野球民。レッド・ホット・チリ・ペッパーの場所を
ハーミットパープルで念写し、ちよūdōタイミングで電線を切断し外に引つ張り出した
のか!?!」

ミ（。）（。）「ワイは仲間が死にそうだっていうのに何も行動しない男やない。」
ミ（。）（。）「なにがなんでも助ける。それがこの野球民様や!!!」バアアアアン!!!

／—i、。（。）「急いで原住民のもとへ向かうで!!!」
／—i、。ワ。ハレ「おう!!!」

~~~~~

レッド・ホット・チリ・ペッパー「くそ!!!俺としたことが…。」

(、・ω・、)「どうやら助かったみたいだな。」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「ちくしよお。てめえだけでも葬つてから逃げてる!!!」

(、・ω・、)「マン・イン・ザ・ミラー!!!」

グワアンツ!!!

レッド・ホット・チリ・ペッパー「そんなスタンドじゃあ俺の相手にならねえぜ!!!!」

(、・ω・、)「食らえ!!!」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「のろいんだよ!!!!てめえのスタンドはよお!!!」

バキゴキツ!!!

(、・ω・、)「うぐっ!!!」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「ハハハハハハ!!!野球民と言いお前と言い、戦闘向きじゃねえスタンドが俺に勝てるか!!!」

(、・ω・、)「コイツ、結構もう電気を蓄えていやがる。」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「最近の停電の原因知ってるか？俺だよ俺!!!」  
レッド・ホット・チリ・ペッパー「音石明のように油断はしないっ!!!最高最善の状態  
でスタンド使いを討つ!!!。」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「死ねえい!!!」 ブンッ!!

ドゴオツ!!

(、・ω・、) (とつさに避けたがこのパワー!!コンクリートの地面をも簡単に貫いた!!!)  
(、・ω・、) (やはりここは、逃げるが勝ちだ!!!)

レッド・ホット・チリ・ペッパー「逃げるつもりのようなだが、逃がしはしないっ!!!」  
バキッ!!!  
ドゴツォ!!!

(、・ω・、) 「くそっ!!!速い!!!」

(、・ω・、) (だがもう少し、もう少しで…。)



レッド・ホット・チリ・ペッパー「食らえっ!!!」

ドゴツ!!

ブシャアアアアアアア  
!!!!

意外!!!レッド・ホット・チリ・ペッパーがコンクリートの地面を粉碎すると、目の前に水が溢れだした!!!

レッド・ホット・チリ・ペッパー「なんじゃこれはー!!!」バアアアアアア!!!

(、・ω・、)「ここらへんには確か上水道が通ってたんだよなあ!!!」

(、・ω・、)「この町に詳しくないお前は分からなかったようだが!!!」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「し、死ぬう!!!」

（、・ω・、）「奴のスタンドの弱点は電気だということ!!!」

（、・ω・、）「確か原作のレッド・ホット・チリ・ペッパ―も海水にやられたはず!!!」

（、・ω・、）「このまま死にやがれ!!!」

レッド・ホット・チリ・ペッパ―「なーんて、そう簡単に死ぬと思ったか？」

（、○ω○、）「!?!」

レッド・ホット・チリ・ペッパ―「確かに伝導性の高い海水は弱点だよ。だがなあ!!!  
しよせん水道ごときの水じゃあ海水ほど伝導性は高くねえんだよアホが!!!」

レッド・ホット・チリ・ペッパ―「しかも逆にチャンスだぜ。てめえも水に濡れたみたいだしなあ。」

レッド・ホット・チリ・ペッパ―「伝導性はあるが、海水ほどは高くない。」

レッド・ホット・チリ・ペッパ―「それを利用して感電死させてやる!!!」

（、○ω○、）「くそおおー!!!」

レッド・ホット・チリ・ペッパ―「死ねえい!!直接電気を流し込んでやる!!!」

（、・ω・、）「いや!!この水鏡から鏡の世界へ放り込んでやる!!!」

レッド・ホット・チリ・ペツパー「ニイ。」

（、ω・・、）「鏡の世界へ許可する!!!」

バシィツ!!!

（、ω・・、）「なっ!!!」

レッド・ホット・チリ・ペツパー「てめえが許可するよりも前にお前の体に触れた。」

レッド・ホット・チリ・ペツパー「俺のスピードを舐めすぎたようだな。」

レッド・ホット・チリ・ペツパー「感電死しやがれっ!!!!」

シーンツ

レッド・ホット・チリ・ペツパー「な、なぜだ。なぜ電気がお前の体に流れていかな  
い?。」

マン・インザ・ミラー「オラオラオラオラオラオラオラオラオラ  
!!!!!!!」

バキツドキツゴキヤアツ!!!

レッド・ホット・チリ・ペッパー「うぎやあああああ!!!!!!」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「お、おとおお俺の鼻ど顎があ!!!!」

(、・ω・、)「確かに水は電気を通す。」

(、・ω・、)「だが純水は絶縁体なんだぜ。」バアアアアアアン!!!!

(、・ω・、)「俺は確かに間に合ったんだよ。」水の中の不純物を鏡の世界に招待する  
ハ)とをな」」

(、・ω・、)「100%の純水が電気を防ぐ俺のプロテクトになった。」

(、・ω・、)「お前の電気を纏わせていたのを思い出して、閃いたってわけだな。」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「ぺちやくちや喋りやがって…。」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「今度は感電死じゃなくて、パワーでごり押せばいいだけの話だつ!!!!!!」

（・ω・）「いや。もう俺の勝ちだ。」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「なについ!?!」

そう言った瞬間。数多の拳がレッド・ホット・チリ・ペッパーにめり込んだ。

だかそれを感じするものはフェリスただ一人。彼女が時を止めてレッド・ホット・チリ・ペッパーを殴り倒したからであつた。

バキイドキツゴキヤアツ!!

レッド・ホット・チリ・ペッパー「うぎやあああああああああ  
!!!!!!!」

／—i、。ワ。ハレ「私たちの勝ちって言うってほしいな。」

TO BE CONTINUED: / / / /

## 炎のj 前半

レッド・ホット・チリ・ペッパー「う、うが…。」

（、・ω・）「これにて一件落着つてことだ。」

／—i、。ワ。ハレ「どうやら間に合ったみたいね。」

ミ（。）（。）」ワイのハーミットパープルが原住民の位置を捉えていたしな。最短距離で来れたやで。」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「く、くそが…。」

ミ（。）（。）」「どうやら周辺に電線もないみたいだし、チェックメイトつてやつやな。」

／—i、。ワ。ハレ「さあ、私のザ・ワールドであるチンピラにやったように腹を貫通させてやる。」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「…。」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「だったら、皆殺しだあつ!!!」バリバリバリバリ!!!

電気を発した瞬間、レッド・ホット・チリ・ペッパーのいくつもの関節があらぬところ  
ろに曲がった。

レッド・ホット・チリ・ペッパー「ぐほあああつ!!!!」バキゴキ!!

レッド・ホット・チリ・ペッパー「ぎ、ザ・ワールドかつ!…。」

／—i、。ワ。ハレ「組織の場所も割れているし、コイツはきちつと始末させてもら  
う。」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「クク、ハハハハ!!!!」

ミ(。(。(。「なにがおかしいんや。」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「これからお前らに起こることを想像すると腹の底  
から笑いが込み上げてくる!!!!」

ミ(。(。(。「なんやと…?」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「我が主に背くスタンド使いはもうお前らだけだ…。」  
 レッド・ホット・チリ・ペッパー「そしてじきにお前らも主に忠誠を誓ったものに殺されるだろう…。」

（、・ω・、）「ふーん。俺も笑つちまいそうだけぞ。」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「なんだと!？」

（、・ω・、）「その刺客を全部ぶつ殺して、その悪の親玉を俺らが始末する様子を想像するとよー!!!」バアアアアン!!

ミ（。）（。）／—i、。ワ。ハレ「おう!!」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「まあいい。」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「俺は黙って始末されるつもりもない。」

レッド・ホット・チリ・ペッパー「お前らの動向を地獄で見届けることにしよう。」

そういうとレッド・ホット・チリ・ペッパーはふらつきながらも右手で首を斬りおと  
 した。



~~~~~原住民の部屋~~~~~

ミ(。(。(。「早速、真弓が監禁されている場所を念写して、出発するで。」

、。ω・。(。「おうよ。」

／—i、。ワ。ハレ。「そういえば一体なにで念写するつもりなんだ？カメラは無いよ
うだが。」

ミ(。(。(。「原住民のテレビ。」

、。ω・。(。「おいおいおいおいおいおいおいおい。」

、。ω・。(。「やきう。お前念写でテレビを壊していたよな？」

、。ω・。(。「もしかして俺のテレビも壊れるんじゃないのか？」

ミ(。(。(。「大丈夫、大丈夫。あれは念写に失敗しただけだから。」

、。ω・。(。「ホントかなあ…。」

／—i、。ワ。ハレ。「ごちゃごちゃ言っただけでさっさと念写しろ。」

多(。(。(。「へいへい。」

多(。(。(。「ハーミットパープル!!!」ズギヤァン

ハーミットパープル「:。」グワン

(、・ω・(。「来た来た。」

多(。(。(。「ノトーリアス・B・I・G使用の真弓のいる場所を念写しろおっ!!!!」

ハーミットパープルがテレビに入り込み、真弓の場所を映し出した。

多(。(。(。「こ、ここは…。ちよつと古ぼけたビルか?」

／|i、。ワ。ハレ「:。」

(、・ω・(。「まじか…。」

多(。(。(。「まいったな。これじゃあどこのビルか分からんで。」

／|i、。ワ。ハレ「見てあそこ。」

(、・ω・(。「?」

フェリスが指さした先にはNTTドコモ代々木ビルの先っぽがあった。

多() () () 「おお。ってことは真弓は新宿にいるのか。」

(、、ω、、) 「先っぽにクレーンがあるから分かりやすいね。」

多() () () 「よし!!! 明日の早朝に早速新宿に行つてこのビルを探そう。」

／—i、。ワ。ハレ(、。ω、、) 「おお!!!」

~~~~~

古ぼけたビルの最上階に二人の男がいる。

このビルの外見からは想像できないような、煌びやかでシャンデリアが似合うような

西洋風な部屋であった。

1人は椅子に深く腰を掛けており、そして片手にワインボトルを持っている。

そして椅子に座つた男に向かってもう一人の男が膝を付いていた。

?? 「∴。レッド・ホット・チリ・ペッパーがやられたか。」

側近 「はい。そのようです。」

?? 「アイツは頭に血がすぐ上る。どうせ油断して死んだのだろう。」

側近 「ではあいつにはあなた様の能力を使わないということですか?」

?? 「ああ。私の能力は一回発動するとブランクを挟まなければならない。」

?? 「あんな奴を復活させたところでまた死ぬだけだ。」

側近 「レッド・ホット・チリ・ペッパーの最後の通信によりますと、私たちの場所の見当がついたらしいです。」

側近 「なにせハーミットパープル使いの野球民がいます。バレルのも時間の問題でした。」

?? 「まあいい。にしても誰かアイツを殺せるスタンド使いはいないのか？」

?? 「今のところ全員あの一行にやられているではないか。」

側近 「申し訳ございません。」

?? 「私が直々に行きたいところだが、この計画もあともう少しで終わる。」

?? 「今私が行くのは得策ではない。」

?? 「だとしたら代わりにアイツに向かわせるか。」

側近 「アイツ…とは？」

?? 「じきに分かる…。」

?? 「ニュース番組が大きく取り上げるだろうしな…。」ニヤツ

~~~~~  
 野球民一行は新宿に向かうため、バスに乗車していた。

ミ。(。)(。「誰かとバスに乗るなんて久しぶりやで。」

(、・ω・)(。「お、俺もだよ。バスなんか出勤でしか使わないもなあ。」

／|i、。ワ。ハレ「へえ。」

ミ。(。)(。「あと15分くらいで駅前到着する。駅に着いたら早速あのビルを探
 すで。」

(、・ω・)(。「了解つと。」

／|i、。ワ。ハレ「…。」

ミ。(。)(。「…。」

(、・ω・)(。「…。」

ミ。(。)(。「(今から敵の本部に乗り込もうとしてるんや。会話が續かないのも無理
 はない。)

シ。(。(。(ワイも精神統一しとかんとな。)

シ。(。(。「:にしても天気は曇りだっていうのに、なんていう暑さや。」

シ。(。(。「まだ5月やぞ?」

シ。(。(。「暑いし、窓開けてええか?」

、。ω。ハ。「いぞ。」

シ。(。(。「ほんなら開けるでー。」ガラガラガラ

野球民が窓を開けた瞬間。野球民の顔に焼き付くような熱風が当たった。

シ(●)(●)「アツツ!!!」

、。ω。ハ。「おい!!どうしたんだ!?!」

シ。(。(。「暑いどころの熱量じゃなかった。今のは完全に「熱い」だ…。」

シ。(。(。「まるで炎のような…。」

／—i、。ワ。ハレ「あ、あれを見て!!!」

バスの目の前に炎が町を覆いつくさんとしていた。
道路はまさに火の海だった。

多(。(。(。(「おいおいおいおい!!!」

(、。ω。。(「なんだあれ!!!消防車はいないのか!？」

バスは気にせず、燃え盛る炎に突っ込もうとしていた。

多(。(。(「運転手!!!バス止める!!」

運転手「!？」

運転手「どうされましたか？」

(、。ω。。(「いや見て分かるだろ!!炎だぞ炎!!!」

(、。ω。。(「炎の熱で人が何人も倒れこんでる!!!」

運転手「はて?確かに人は倒れていますか。」

多(。(。(「コイツ:スタンド使いか!？」

／—i、。ワ。ハレ「原住民もう構うな!!私が気絶させる!!!」

そう言うどザ・ワールドは止まった世界で運転手を気絶させ、ブレーキを踏み込んだ。

キー!!!

乗客1 「おいなにやってんだ!!! 炎なんかどこにも見えねだろうが!!!」

乗客2 「道路の真ん中で急に止まるとか正気!?!」

乗客3 「うわ!! 運転手倒れてる!!!」

ワイワイガヤガヤ

シ(。(。(。「なんやと…。」

シ(。(。(。「まさか炎が見えていない…?」

乗客1 「にしてもあつちいなあ…。」

乗客1 「窓開けるか…。」

シ(。(。(。(この炎を前にして止まっているのはワイらの車だけ。

シ(。(。(。(ほかの車は気にせず炎に突っ込んで…)

シ(。(。(でも、普通に他の車は炎を通り抜けられている。)

シ(●)(●)「まさか!!この炎は…!!!」

シ(●)(●)「「罨!!」」

乗客1が窓を開けると、車体の外から十字架状になった炎が乗客1に放たれた。

乗客1は一瞬で炎によって蒸発し、バス的一部分はドロドロに溶かされた。

その炎に巻き込まれた乗客も多数いた。

乗客2「きゅあああああああああああ
!!!!!!!」

乗客3「熱いいいいいい!!!」

、ω・ω・ω)「す、スタンド攻撃!!!」

／—i。ワ。ハレ「私たちはたまたまバスの後頭部について助かったけど、バスの前部分に乗っていた人たちに炎が!!!」

シ(●)(●)「フェリス!!!今すぐバスのアクセルを踏んでくれ!!!」

シ(●)(●)「もう一撃来るぞ!!!」

ブウウウウウウウウウッ
!!!!

ザ・ワールドによって踏み込まれたアクセルによって、バスは勢いよく前に走り出した。

ドカアアアッ!!!

バスが止まっていた場所に炎が撃ち込まれた。

その炎はいともたやすくアスファルトを破壊した。

／—i、ワ。ハレ「すぐに発車していなかったら今頃今度こそこのバスは爆発してただろうね。」

（、・ω・・）「こ、これは一体どういことなんだ…?」

（、・ω・・）「教えてくれやきう!!」

（、・ω・）「きつと敵はマジシャンズレッド使いや!!!」

（、・ω・）「奴はあえてまだ走行可能なレベルの炎を予め道路に放った。」

多(。(。(。「炎が見えない一般人はそのまま進める。」

多(。(。(。「だがマジシャンズレッドの炎が見えるワイラスタンド使いは車を止めてしまう。」

多(。(。(。「そして止まった車にクロスファイヤーハリケーン撃ち込む。」

多(。(。(。「まるでワイラは釣り餌に食らいついた小魚。」

多(。(。(。「この炎の罫でワイラの乗っている車を判別したんや!!!」

／「i、。ワ。ハレ」で、どうやってアイツを倒すんだ?」

多(。(。(。「とりあえずこの乗客をザ・ワールドで降ろしてくれんか?」

多(。(。(。「アイツの標的はワイラだけなはずや。」

多(。(。(。「無関係な一般人を巻き込むわけにはいかん。」

／「i、。ワ。ハレ」任せろ。」

レハ; |。ノ「ザ・ワールド!!!」

バスの中にいた一般人は時を止めたザ・ワールドの手によって歩道に移動された。

(。・ω・。(。「とりあえず一安心。」

シ。(。(。(。「よし、運転はハーミットパープルに任せろ。」

。(。(。(。「いつ撃ち込まれるか分からないな…。」

シ。(。(。「しっかり見張つといてくれ。」

。(。(。(。「あたぼうよ。」

レハ； |。ノ「おい!!バスの十一時の方角!!またクロスファイアハリケーンだ!!!」

。(。(。(。「?いやあの炎、バスに命中しそうにもない。まったく見当違いな方向へ飛んで行っているぞ?」

。(。(。(。「何のつもりだ?」

シ。(。(。(。「…まさかあの方向には!!!」

ドカアアンツ
!!!!

クロスファイアハリケーンはバスに乗っていた一般人をまるごと焼き殺した。

それは善良な人々を守るためスタンド使いと戦う野球民達には残酷すぎる光景だった。

レハ；。―。ノ「一般人が、消し炭になった…。」

（、〇〇〇、）「な、なんて下衆野郎だ!!!」

シ（●）（●）「…なにが組織のスタンド使いや。結局は今までのクズ共よりもさらに質の悪い奴等やないか!!!」

レハ；。―。ノ「ク、クロスファイアハリケーンが間髪入れずにまた来たぞ!!!」

（、ω・・）「ありやあクロスファイアハリケーンじゃあねえ、クロスファイアハリケーンスペシャルだな。」

シ（。）（。）「ワイの選手技術の前じゃあ無力やで。」

野球民は大きな車体を巧みに動かし、連続で放たれるクロスファイアハリケーンを難なく躲した。

（、。・。・。）「おおっ!!!」

レハ；|。ノ「いた、ずっと探してたんだよマジシャンズレッド!!!」

レハ；|。ノ「バスから20m離れた右上空にいる!!」

多(。(。(。「きつとワイらを見つけた後、車でこのバスを付けてきてるはずや。」

(。(。(。「やきう!!お前のハーミットパープルでマジシャンズレッド使いを念写してくれ!!!」

多(。(。(。「お前ら運転できんのか?」

(。(。(。「まあ、一回現金輸送車戦で運転したし、まあ大丈夫だろう。」

多(。(。(。(「心配やな…。」

レハ；|。ノ「とにかく早くして!!!」

多(。(。(。「了解っと。」

多(。(。(。「ハーミットパープル!!!」

多(。(。(。「窓ガラスに「マジシャンズレッド使いが運転する車」を念写しろっ

!!!」

^
/ | \
- - -
??????T
O
S
S B E
? C O N T I N U E D : :
/
/
/
/
-

炎のj 後半

シ(。(。(。(なんやと…運転している車が7つも浮かび上がったぞ…?)

シ(。(。(これはいったいどういうことなんや?)

シ(。(。(「原住民すまん敵がどこか分からん!!!」

(。(。(。(「なんだって!?!」

シ(。(。(。「車が七台も浮かび上がったもうたわ。」

(。(。(。(「まあしょうがない。俺のマン・イン・ザ・ミラーならスタンドだけでも鏡の世界に送れる。」

シ(。(。(。「いや、マジシャンズレッドを鏡の世界に送るのは難しそうやな。」

(。(。(。(「どうしてだい?」

シ(。(。(。「あいつはもれなく飛び道具しか撃つてこないやろうし、わざわざマン・イン・ザ・ミラーの射程Cの距離まで近づいてくるとは思えん。」

(。(。(。(「確かに、少しきついかな。」

マジシャンズレッド「キシャーオー!!!」

マジシャンズレッドが出現しやきうたちの乗るバスに吠えたかと思うと、バスの近くを走行していた前後左右、4台の車が徐にバスに急接近する。

バスが自動車に囲まれると、4台の車はバスに衝突し始めた。

激しい金属音が道路全体に響き渡り、また車内を大きく揺らし始めた。

レハ;。―。ノ「きやああ!!!」

つ。ω。、。「まずいぞこれ!!バスがどんどん減速し始めている。このままじゃあクロスファイアーハリケーンの餌食になってしまう!!!」

多(―)(―)「クソ、どうして7台も浮かび上がるのか分からへん!!!」

多(。(。(。(「そういえばぶつかってくるあの車、よく見ると無人や!!!」

多(。(。(。(「そうか、あの方法だったらいけるかもしれないわ。」

多(。(。(。「だがとりあえず、この状況を一刻も早く打破しなくては!!!」

（…ω…）「やばいやばいぞー！もうほとんどスピードが出ねえ!!」 ブウウウンツ!!

マジシャンズレッド「クオオオオオツ…」

レハ；。―。ノ「やべ…。」

多（。）（。）「しまっ…、撃たれる。身動きが取れない最凶最悪のこのタイミングで…。」

レハ；。―。ノ 多（。）（。）「クロスファイアーハリケーンを!!!」 バンツ!!

マン・イン・ザ・ミラー「チツチツチツ!!」

（…ω…）「確かに撃たれるが、命中はしないさ。」

（…ω…）「なぜって？俺とこのマン・イン・ザ・ミラーがいるからさ!!!」 バアアア
ン

原住民は突如窓ガラスをクロスファイアーハリケーンに向かって投げた。

（…ω…）「そーいや思い出したんだよ。マジシャンズレッドが撃ち出す炎もまたス

タンドなんだってね!!」

（・・ω・・）「マン・イン・ザ・ミラー!!! クロスファイアーハリケーンを鏡の世界へ転送しろ!!!」ズバァ!!

グオンツ!!!

（・・ω・・）「俺のスタンドは物質以外の生命だったらすべて鏡の世界に送れる。スタンドやスタンドの炎だって例外ではない!!」

（・・ω・・）「そして「鏡の中の世界」内の物質は俺とこのスタンド以外、誰も動かす事ができず破壊する事もできない!!」

（・・ω・・）「ジョジョ屈指の強スタンドも俺の前じゃ無力だな。」

／— i、。ワ。ハレ「あんた、少しだけ見直したわ。」肩ポンポン

（・・ω・・）「なんで少しだけなんだ!!!」

多（。）（。）「でかした原住民!!!」

多（。）（。）「あとあいつがどうやって車を操作してるか分かった!! このまま直進し

続ければ上手く撒かれるで!!!」

／— i、。ワ。ハレ「え、どうして?」

多（。）（。）「それはな…。」

ブオツオオン!!!ドゴオオオンツ!!!!!!

突如左右に付いていた二台の車が爆発する。

フェリスと原住民はバス前方にいたが中央近辺にいたやきうは爆風と熱風に巻き込まれ吹っ飛ばされてしまった。

多()()「ぐわああああ!!!」

(・ ω ・) 「やきうううううううううう!!!」

~~~~~

ブ男「けけ…。」

ブ男「まさか俺のクロスファイアーハリケーンさえもマン・イン・ザ・ミラーに転送されるとは…。少し驚いたぞ。だがほんの少しだ。」

ブ男「作戦に支障はない。」

ブ男「俺のマジシャンズレッドのからくりを見破りかねないやきうは先に始末さしてもらった。」

ブ男「俺が操作している車は残り5台。」

ブ男「このまま俺が乗っている1台の車以外は全て爆発させてもらうぜ。」

~~~~~

レハ； |。ノ「そんな、やきうが…。」

フェリスの腕に抱きかかえられているのは、服が燃え、全身に火傷を負い、気絶してしまつたやきう民であつた。

(ゝ・ω・ゝ)「ゆ、ゆるせねえ。」

(ゝ・ω・ゝ)「やきうの仇は俺がとつてやる!!!」

ガンッ!!!ズガンッ!!!!

(ゝ○ω○、)「な、また車がバスにくっつきやがつた!!!」

(ゝ。ω。ゝ)「俺が消せるのは生命エネルギーを持つスタンドの炎!!!現実の実際の爆発は鏡の世界には送れねえ…。」

レハ； |。ノ「そんな…。」

(ゝ・ω・ゝ)「仕方がない。フェリス、お前はそのままやきうを連れて時を止めて逃げ

ろ。」

／＼「i、。ワ。ハレ「は？あんた何言ってるの？三人でバスから逃げればいいじゃない!!」

（・・ω・・）「できるなら俺だってそうしいさ。」

フェリスは原住民の足元を見ると、夥しい血痕が付いていた。

また、車の一部だろうか。細い鉄の棒のようなものが足に刺さっていた。

（・・ω・・）「さっきのでバスの外側から爆発した自動車の部品が車体を貫通して刺さっちゃった。」

レハ；。―。ノ「…。」

（・・ω・・）「足を引きずる俺が逃げたところでマジシャンズレッドの的になっちゃまう。」

（・・ω・・）「ここで一番最悪なのは全滅することだ。全滅を防げるなら俺の生死は関係ない。一度体制を立て直して回復したやきうの知恵で敵を倒せるのなら本望だ。」

（・・ω・・）「俺は最初から敵の本部に全員で辿り着けるとは思ってなかったさ。一人でも辿りついて真弓を救出してボスを倒せばそれが俺たちの勝利なんだよ!!!」

（・・ω・・）「俺がバスを運転して限界まで奴を引き付ける。だから、さあ早…。」

バゴオツ!!!

フェリスが原住民の顔を殴った。

／— i、。ワ。ハレ「ふっぎけんじやねーよ!!!」

レハ; |。ノ「なにが俺の生死は関係ないだ。みんな助かって、人を殺したマジシャンズレッド使いもぶっ倒して、真弓も助けて、組織をぶっ潰す。」

／— i、。ワ。ハレ「そして初めて勝利だろうが!!!」

／— i、。ワ。ハレ「なにカッコつけてんだよ!!!」

(。ω。)(「……」

／— i、。ワ。ハレ「あんたのこと見直すと言ったが撤回する。あんたはクソ野郎だ。」

(。ω。)(「……」

俺はどうしてこんなにも動揺しているのだろう。

自分の覚悟を否定されたからか？それともフェリスが馬鹿だからか？

違う、俺が初めて黄金の精神を見たからだ。

思えば俺の人生、しようもないものだった。

主体性もなく何かに打ち込む意欲もなく。

思えば親友といえる親友もいなかったし、家族団欒と思えるような日も送ってこなかった。

そんなときあのスレに出会った。

自分は変われると思った、変わるべきなんだと思った。

だが結局マン・イン・ザ・ミラーでしたのは食い逃げ。

どうしようもな男だったのだ俺は。

しかしやきうに出会った。そして邪悪に出会った。

人の業が生み出したクソツタレのスタンド使い。

だが俺はそんな奴らに自分を重ねていた。

俺も一歩間違えればきっと俺はああなっていた。

それはまるで鏡^{ミラー}。

だが俺は鏡に映る奴らとは違う、正しいと信じきれる仲間たちがいる。

だから俺は奴らにとっての鏡^{マン・イン・ザ・ミラー}の中の男になってやる。

(・ω・)「フェリスの言うとおりで。俺はクソツタレのあいつにこの命を渡す気も

ないし、俺の大切な仲間を奪わせもしない。」

／＼i、。ワ。ハレ「原住民……！」

バタリ

やきうの体が車体の揺れによつて地面に倒れ、やきうの腹がチラリと見えた。

／＼i、。ワ。ハレ「!?こ、これは!!!」

(い・わ・い)「やきう……。」

マジシャンズレッド「くく、今のお前らに何ができる!!!」

／＼i、。ワ。ハレ「勝利を確信してスタンドを通じて話しかけてきやがったわ。」

マジシャンズレッド「気絶したやきう、足を負傷した原住民、近距離型のフェリス!!!」

マジシャンズレッド「お前らはもう将棋やチェスでいうところの詰みに入ったんだ

よお!!!」

マジシャンズレッド「残りの4台を一斉に爆発させて、粉微塵にしてやる!!!」

（、・ω・）「まだ手はある。」

（、・ω・）「覚悟するんだな。マジシャンズレッド使い。」

マジシャンズレッド「なにい!？」

（、・ω・）「頼んだフェリス!!!」

／—i、。ワ。ハレ「ザ・ワールド!!!いけええええ!!!」

パリパリパリパリイインツ
!!!!!!

ブ男「な、いきなりバスの窓を全部割りやがった!!!」

ブ男「だ、だが。だから何だというのだ!!!爆発で死ぬことは変わらん!!!死ねえい!!!」

シュツ!

（、・ω・）「やきうの念写によつて車がマジシャンズレッドで操作されているということが分かった、が肝心の操作方法が分からん。」

（、・ω・）「だがやきうは既に答えを導き出していた!!!」

（、・ω・）「やきうは爆発を食らう直前、炎を媒介に自分の体を念写した!!!」

- (、・ω・、) 「やきうの腹には、焦げで赤い荒縄と書かれていた!!!」
 (、・ω・、) 「やきうは俺たちに託したんだ。その想い、俺達で全うする!!」

割られたガラス片は、衝撃によって分散しこのバスと車を包むぐらいに広がった。

ガラス片は小さき鏡として、しつかりと4台の自動車のマフラーから伸びている赤い荒縄を捉えていた。

そして原住民は命令し、マン・イン・ザ・ミラーは実行した。

- (、・ω・、) 「赤い荒縄を鏡の世界へ送れええええ!!!」
 マン・イン・ザ・ミラー「グワアアアアアアアアアアッ!!!!」 グワアンツ!!!

すると途端にバスに群がっていた車は速度を緩め始めた。

- (、・ω・、) 「赤い荒縄によってエンジン部分とハンドルを直接操作し、何台も車を操っていたとはね。」

- (、・ω・、) 「さすがにびっくりだ。」

^
/ \
— —
T
? ? ? ? ? ? ? ?
o
{
B
{ E
? C
CONTINUED
:
/
/
/
—

元凶のj

シ（。）（。）「ん、ここはどこや？」ムクツ

シ（。）（。）「見渡す限り、足元には塩湖の水鏡と快晴がずうつと広がっておる。」

シ（。）（。）「ワイの体も爆風を浴びたはずなのにピンピンしとるわ。」

シ（―）（―）「もしかしなくても、ここ死後の世界ちやうんか？」

ワイは静か、大きく深呼吸をする。肺に澄んだ空気が染み渡るのを感じる。

シ（。）（。）「ワイも最後まで原住民とフェリスと一緒に戦いつたかったな…。」ハア

シ（。）（。）「……。」

シ（。）（。）「あいつら、上手くマジシャンズレッド使いを倒せたやろか。」

シ（。）（。）「とっさの攻撃でワイの体に念写するだけで精一杯だったわ。」

シ（^）（^）「きつと原住民達なら倒せるはずや!!後は二人に任せるしかできないの

が残念やが、ワイはここから祈るとするで、旅の祈願を。」

シ（。）（。）「まあいうても祈るだけじゃつまらん。少し歩くとするか。」

チャピチャピチャピチャピチャピチャピ

シ。(。(。(。「マジで塩湖なんやなここ。歩く度、水音がするで。」

シ。(。(。「そういや、死んでもハーミットパールって出せるんやろか？」

シ。(。(。「よし！いちよやったるで!!」

シ。(。(。「ハーミットパールツ!!」グオンツ

ハーミットパール「:。」バアアアン

シ。(。(。「出ちやったな。」

シ。(。(。「へえ。死んでも能力があるとは不思議やな。」

?? 「そりやそうさ。君はまだ死んでないんだから。」チャピチャピチャピ

シ。(。(。「!?誰やお前!!」

?? 「名乗るものでもないさ。」

?? 「でも強いていうなら、あのスレの1かな。」

シ。(。(。「!?」

シ。(。(。「ハーミットパールツ!!!奴を拘束しろ!!!」グワアンツ!!!

1 「ひどいねえ。いきなり攻撃を仕掛けるなんてさ。」シュツ!ザツツ!!

◇(。(。)(「すんなり躲されてしもうた!!」)

◇(。(。(「ぬかせ!!てめえのせいだ。一体何人もの犠牲者が出たと思ってるんや!!!」)

1「そのことに関してはずごく悪いと思ってる、すごくね。」

1「でも、仕方がないことなんだよな。」

◇(●)(●)「無関係の人間が無意味に死んでいくのが「仕方がない」だと?」

◇(●)(●)「ワイが今からお前を殺すが、仕方がないことだからな。恨むなよッ!!!」

1「怖いねえ…。でも少し付き合っただけよ。暇だし。」

◇(。(。(。(ワイのハーミットパールの猛攻をスタンドを使用せずに避けるなんて!!!)

◇(。(。(。(「でもこれで終わりやああっ!!!」)

1の足元から勢いよくハーミットパールが飛び出し、ぐるぐる巻きにして拘束した。

1「なるほど…。地面からハーミットパールを潜らせたのか。」

◇(。(。(。(「ここがどこなのかも、ワイがなぜここにいても分からんが。捕まえろぞ元凶!!!」)

1「フツ、君を見ると飽きないね。」ニタニタ

シ(。(。(。(。「何を笑っていやがる。」

シ(。(。(。「このまま骨バキバキに折れながら内臓に突き刺さって死にやがれ!!!」

ハーミットパープル「:。」ググググ

バキツゴキツ!!

シ(。(。(。(よし、このままいけるで!!)

1 「甘いね。実に甘い。」

そういうと1からスタープラチナが出現し、ハーミットパープルを素早い手刀で切り裂いた。

シ(。(。(。「スタープラチナとは、1の癖に安直なスタンドやな。」

シ(●)(●) 「骨の折れる音を聞いたで。その折れ方だと、まともに動くことも出来ないんじゃないんか?」

1 「そうでもないさ。」グワァンツ!!

シ(●)(●)「!?!」

ゴールド・エクスペリエンス「:。」バァァン!!

1 「直せ。」

シ(、)(、)「ハッ!? いやそんな馬鹿な!!!」

シ(、)(、)「なんでスタンドが二つ使えるんや!!」

1「まあ、君らとは違って人智を超えた存在だからかな? まあそもそも…。」

シ(。)(。)(。)(奴の言葉。一見戯言のように聞こえるが、他とは違うマジな重みがある!!)

シ(。)(。)(。)(もし本当にワイには敵わない存在だとしたら…。)

やきう民は徐に1に背中を見せた。

1「おいおいどうしたんだよやきう民?」

1「やれるところまでやろう。」

シ(。)(。)(。)(悪いがここは逃げさせてもらうで!!!)

ダツダツダツダツダツ!!

1「おいおいおい。こつちに来いよやきう民!!!」

1「しようがない…。」

シユルツ

シ(。)(。)(。)(いつの間にかハーミットパールが俺の足に絡みついている!!)

バツツ!! ガシツィ!!!

シ(。)(。)(;)「うげえっ!!」バチャンツ!!

1 「あーあ。俺のハーミットパープルが君を捕まえてしまったよ。」

1 「最初から勝ち目はなかったけどな。」

シ (○) 「クソツたれ!! ぜってえぶち殺したるで!!!」

1 「まあまあ、今日は別に君を殺しに来たわけじゃない。」

1 「ゆっくり話をしようじゃないか。」

シ (○) 「なんやと…?。」

1 「君は今、東京を巻き込んだスタンドバトルを繰り広げているだろ?」

シ (○) 「そうやが。」

1 「あれ、俺が仕組んだものなんだ。」

シ (○) 「!?!」

1 「今まで同じ場所に集めて戦わせてたんだけど、せつかくスタンドにあやかって戦わせてるんだ。」

1 「自然に戦わせたほうが、勢力が分かれて楽しそうだからねえ。」

シ (○) 「(なんやこいつ。まるでこの戦いが以前から行われていたような言いぶり…。)」

1 「でも大体はすぐにくたばってしまおう。だからその中でも死闘を生き残り、俺が気

に入つた奴には直々に会いに行つてゐるんだよね。」

1 「そして「権利」を与える。」

多(。(。(。「…。なんの権利や。」

1 「この戦いのたつた一人の勝者になつたとき、一つなんでも願いを叶えてやるのと、この世をまるで積木のように好きにできる力を与えてあげよう。」

1 「ちょうど、こんな風にね。」ヒュツ

スタープラチナ、ハーミットパープル、ゴールド・エクスペリエンス「…。」バアアア
ン!!!

多(。(。(。「なつ…。」

1 「もし勝者となれば全てのスタンドの力を君に与えよう。」

1 「今までは全員に説明してただけど、面倒くさいからね。」

1 「どうだい？ 気に入つたかな？」

多(。(。(。(。「まずいわ。こんなんが悪意を持つ人間の手に渡つたら、それこそ終わりや。」

多(。(。(。(。「なんとしなくてもあの権利を手にしなれば…。」

1 「…。この戦いにおいて権利を持つ人間は君を含めて3人だ。」

1 「そして君は唯一この権利に魅力を感じていない。それが非常に面白く俺が気に入っている理由だ。」

シ（ ）（ ）「そりやどうも。」

シ（ ）（ ）「で、話はそんだけか？」

1 「あと、君は今瀕死だ。この精神空間から出た瞬間地獄のような痛みを味わうだろう。ウツボカズラの酸から這い出ようとすると蠅のようにな。」

1 「このまま地上に戻らずにいれば君の魂は安らかに天に昇るだろう。」

1 「どうする？」

シ（ ）（ ）「ふざけるのも大概にせえや1。」

シ（ ）（ ）「どんなに傷つこうがワイは前進し続けるで。」

1 「さすが俺のお気に入りだ。」ニヤッ

シ（ ）（ ）「だがそのまえに…。」

シ（ ）（ ）「ハーミットパープル!!!」グワァンツ!!!

シ（ ）（ ）「ぶっ飛ばさなきやワイの気が済まんでツ!!!」

1 「ふっ…。馬鹿なのか？」

1 「そんな攻撃、スタープラチナで十分対応可能だ。」

スタープラチナ「オラッアッ!!」 バシッ!!

1 「まるで止まって見えるな…。」

シ(。(。(。):。」

1 「戦いは楽しむもんだ。やきう民の気が済むように戦おう。」

1 「だが気をつけろよやきう民。ここでのダメージは精神に支障をきたすぞ。」

シ(。(。(。「心配感謝するで。でもワイがダメージを受けることはないがなッ!!」ド

ドドドドド

幾多ものハーミットパールが1のもとへ伸びてゆく。

当然スタープラチナが全ての茨を叩き潰した。

1 「妙な感触ッ!!ざらざらしていて柔らかい…。」

1 「まさかこれはッ!？」

シ(。(。(。「塩や。」 1 「塩か!!」 バアアアン!!

1 「どういうことだ?なぜ塩がハーミットパールの形を成して俺を襲うんだ!？」

シ(。(。(。「俺はこの湖の大量の塩を使って念写したのさ。」

シ(。(。(。「お前の後ろにいるハーミットパールの動きをなあ!!!」

シ(。(。(。「後ろに潜り込ませたハーミットパールとそれが1に向かう様子を念

写した塩との二段攻撃やツ!!!

多(、)(、)「食らえ!! ハーミットパール・バックアタックツ!!!」

1 「:ザ・ワールド。」

多()()「なん:やと:。」

その瞬間やきうは大きく吹き飛ばされた。

多(。(。)(;)「うあああああああああああツ!!!」

1 「あの最後の一撃:。本来のスタンドバトルだったら君は間違いなく俺に勝っていた。」

1 「君と一戦交えて楽しかったよ。」

1 「これは慈悲ではない、尊敬だ。」

1 「賞賛の証として君達の傷は癒させてもらおう。」

多(。(。(。()「うっ:。」

やきうの視界が歪み始める。

1 「この戦いを生き残り、また会えることを楽しみにしているよやきう民:。」

~~~~~

多(。(。(。( )「うっ:ここは。」



／＼i、。ワ。ハレ「やきう!!」

（・・ω・・）「よかった、目が覚めたんだな。」

◇（。）（。）「あのマジシャンズレッド使いには勝ったんか？」

（・・ω・・）「もちろん。やきうのヒントが俺達に勝利を与えてくれた。」

（・・ω・・）「ありがとう。」

／＼i、。ワ。ハレ「つてかやきう傷治つてるじゃん!!」

／＼i、。ワ。ハレ「これは一体どういうことなの!？」

（・・ω・・）「俺の傷も治っている…。」

◇（。）（。）「今でもアイツ許してないが、この点だけに關しては礼を言わざるをえないな…。」

／＼i、。ワ。ハレ（…?）

◇（。）（。）「実は…。」

やきう民は体験した全てのことを話した。

（・・ω・・）「ふうん。もしやきうがその勝者とやらになって初めてこの戦いに終止符を打てるって訳か。」

／＼i、。ワ。ハレ「長い道のりになりそうだね。」

／＼i、。ワ。ハレ「にしても、あと2人の権利を持つ人間は一体誰なんだろう。」

「まあ一人は俺らに刺客を送り続ける謎のスタンド組織のボスだろうな。」

「あど一人は……。分からないね。」

「まあ今は真弓の救出と組織の壊滅を優先するべきだね。」

「その通りやな。」

「でもこれ以上ワイらが公共機関を使うのはまずい。」

「無関係の人間を巻き込むわけにはいかんからな。」

「そうだね。しようがないけど、ここからは第三部のジョースター御一行のように徒歩でいこう。」

「i、w。ハレ」そういえばさ、どつかの服屋でこの焼け焦げた服から着替えようよ。」

「顔も知られてるかもしれないし、変装の意味もあるしね。」

「そうしようか。」

「20分後」

「よし変装もバッチリ。」

「なあなんで変装だつていうのにフェリスはレーヨンのブラウス着てるんや?」

「こつちだつて知りたいよ。」

／＼i、。ワ。ハレ「あのねえ、私だって乙女なのよ。」

／＼i、。ワ。ハレ「少しくらいいいじゃない。」

（　ω・ω・ω　）「なんだかなあ…。」

／＼i、。ワ。ハレ「ひとつ言うけどあんたの服装ハッキリ言って、「ダサイ」「わよ。」

（　ω　）。「うあああああああああアツ!!!」

多（　ω　）。「まあ確かに。全身黒はさすがにないで。」

（　ω・ω・ω　）。「いいじゃん黒!!カッコいい!!!」

レハ；―ノ「そりやアイケメンが着れば似合うけど、あんたはねえ…。」

（　ω　）。「…。」

多（　ω　）。「…さすがにかわいそうやで。」

／＼i、。ワ。ハレ「ごめん。」

（　ω　）。「…。」

多（　ω　）。「…」「…」「…」「…」「…」「…」「…」「…」「…」「…」

／＼i、。ワ。ハレ「そうね!!」

（ω、）「…。」

／「i、。ワ。ハレ（さすがに悪いことしちゃったなあ。）

多（、）（、）「ハーミットパープルッ!!真弓の居場所を念写しろ!!」

ハーミットパープル「…。」

ズズズズズズ…

（、・ω・、）「おおっ!!」

／「i、。ワ。ハレ（うわびびっくりした。）

多（（、）（、）「地図が浮かび上がってきたな。」

／「i、。ワ。ハレ「ほらここ×マークがあるよ!!」

多（（、）（、）「どうやら新宿駅近くの住宅街の近くだらしいな。」

多（（、）（、）「こっから約25 kmか。意外とあるな。」

多（（、）（、）「よし!!出発や!!」

（、・ω・、）／「i、。ワ。ハレ「おおっ!!」

／  
—  
BE CONTINUED…  
—

／  
???\n???\n???\n???\n???\n???\n???

## 運命のJ 1

ここは新宿住宅街にあるちっぽけなビル。だがある一室はこの外見からは想像出来ない程煌びやかでシャンデリアが似合ってしまふような西洋風な部屋であった。

一人は椅子に深く腰を掛けており、そして片手にワインボトルを、もう片方で女を抱いている。

そして椅子に座った男に向かってもう一人の男が膝を付き、深く項垂れていた。

椅子に座っている男が口を開いた。

?? 「感じる…、感じるぞ…。」

?? 「あのやきう民が遂に権利を獲得したことが。まるで虫の知らせのように、遠く離れていても私の心がやきう民の心に共鳴しているのが分かる。」

?? 「だが私のスタンドパワーは限界ギリギリにまで蓄えられた。私はスタンドバトルにおいてぶつちぎった存在になったのだ。」

?? 「しかし悩みや不安の種は早期に取り除くのに限る。そしてそれが人間の性なのだ。」

側近「…。」

?? 「顔を上げよネガシマ。」

側近? (●▲●) 「はい。」 バツ

?? 「お前は仲間集め、真弓の捕獲の協力、戦闘においてまで私に尽力してくれた。」

(●▲●) 「そんな、滅相もございません。」

?? 「フツ、そう固くなるなネガシマ。」

(●▲●) 「…。」

?? 「お前にはある一つの命令を与えたい。」

(●▲●) 「なんなりと。」

?? 「やきう民御一行を討ち取ってこい、ネガシマ。」

(●▲●) 「ハッ。」

?? 「私の組織、テイターターン 巨神革命の対幽波紋部隊を率いて奴らを殺すのだ。」

(●▲●) 「私めにそのような大役を与えて下さるとは恐悦至極であります。」

(●▲●) 「必ずやあなた様にやきう民の首をお持ちします。」

?? 「…。」 一つ不思議なことがある、ネガシマ。」

?? 「お前のスタンドなら私のスタンドに十分な勝機があるはず。しかしなぜ熱心に私

の下で働いているのだ？」

少し考えるような素振りを見せたが、すぐにネガシマがはつきりと強い口調で話した。

(●▲●) 「人は生まれながらにして確実な運命があります。」

(●▲●) 「それは誰にも変えられませんが、揺るぎなく存在し続ける不変なものだと私は考えていました。」

(●▲●) 「ですがあなた様は違った、あなた様の運命だけは有為転変としていたのです。」

(●▲●) 「これはあなた様のスタンド能力によるものじゃありません。あなた様自身のお力です。」

?? 「ほう…。」

(●▲●) 「そして私もあなた様のようにこの世界の変革を願っています。」

(●▲●) 「私が仕える理由はこのゴミ溜めのようなこの世に変革を齎せるのは、運命すらも変えるあなたしかいないからです。」

?? 「やはり私はこの世を変える、トリックスター変革者たる存在。」

?? 「最後まで、…いや永遠に私の忠実なる側近として、また私の能力を知るただ一人の友人として。」

?? 「私の理想のため尽力してくれ。」

(●▲●) 「その願い、必ずや果たします。」

椅子に座っている男は葡萄酒をグイと喉に押し込んだ。

~~~~~

(●▲●) 「∴。我が主の指令により、やきう民達の抹殺が決まった。」

対幽波紋部隊の目の前でネガシマが声を発している。

(●▲●) 「リーダーはこの私が務めさせてもらう。」

(●▲●) 「作戦は配布したプリントの通り。」

(●▲●) 「それぞれが主君のために命を懸けて戦え、以上だ。」

10人近くの武装した兵士と漆黒のコートに身を包んだネガシマが2台の軍用車両に別れて乗った。

けたたましいエンジン音が響き渡る。

兵士A 「出発しますネガシマ殿。」

(●▲●) 「ああ。」

(●▲●) 「∴あれは準備出来ているか？」

兵士A 「あれとは∴？」

(●▲●) 「この無能が!!」

ネガシマは兵士Aを車体に思いきり叩きつけた。

兵士A 「グホッ!!」

(●▲●) 「私がわざわざあれと言っているのだから、「あれ」に決まっているだろうが!!!」

(●▲●) 「そんなようではやきう民達三人を抹殺するどころか私以外全滅だ。」

(●▲●) 「貴様等もスタンドがない癖にこの組織に所属しているのだ、しつかり働け。」

「ハッ!!!」

~~~~~

ネガシマが動き出した日の夜。黒い曇天の空が一面に広がっていた。

ネガシマ率いる部隊の車両はあるホテルの前に停まっていた。

兵士B 「読書ですかネガシマさん。」

(●▲●) 「ああ、なんだ兵士B。」

(●▲●) 「…私が読書するのが意外だったか？」

兵士B 「いえなんでも。」

兵士B 「本部周辺でやきう民一行の動向を伺っていた組織の下級構成員の情報によりますとあのホテルで一晩泊り、早朝出発し本部を叩くそうです。」

(●▲●) 「ここで奴らを殺さないと、組織本部に侵入されるという訳か…。」

(●▲●) 「やきう民達がいる部屋番号も分かっているのだろうな？」

兵士B 「はい、24号室に原住民、やきう民。25号室にフェリスがいるそうです。」

(●▲●) 「よし、スタンド使いが相手だろうが寝込みを襲えば、貴様等スタンドを使えない兵士にも殺せるだろう。」

(●▲●) 「突入してこい。」

兵士B 「ネガシマさんは来ないのですか？」

(●▲●) 「…降りても無駄だからな。」

兵士B 「なるほど。この人数差だったらスタンド使いのネガシマさんでも出る必要はないですね。」

兵士B 「10分ほどでやきう民達を殺害し帰ってきます。」

(●▲●) 「…ああ。」

10人余りの兵士達が車両を降り、ホテルに入っていった。

兵士C 「つたく俺らは法を気にせず暴れられるからこの組織に入ったのによお、なんでスタンド使いなんかと戦わなきゃいけないんだ。」

兵士D 「まあいいじゃねえか。今まで銃ぶつ放してきて色々楽しかったんだからよお。」

兵士D 「どうせスタンド使いも寝込みを襲えば俺ら下っ端にも勝てるぜ。さっさと殺してまた好き勝手暴れ散らかしてやろうぜ。」

兵士C 「それもそうだな!!」

兵士B 「おい、あんま喋るな。いくら深夜といつても人の目はあるんだ。」

兵士C 「けつ。ここにいる奴等全員ただのチンピラだったっていうのに、この組織に入った瞬間いい子ちゃんきどりか?」

兵士B 「チツ…。俺は別に殺すのが好きでこの仕事やってるわけじゃあねえんだ。」

兵士B 「ただつるんでた先輩に誘われてここにきた金稼ぎさ。」

兵士D 「あつそ…。」

兵士C 「ネガシマとかいうスタンド使いも俺らが本気出せば勝てるんじゃないやあねえの?」

兵士D 「そうかもなつ!!」

アツハハハハハハ!!!

銃器を携えた兵士達が笑いながらホテルフロントに向かって歩いていく。

「あの…、お客様?…どのような(づ)用件で…、」

ホテルフロントがそう尋ねた瞬間、サプレッサー付き自動小銃から発射された数多の銃声がホテルフロントの体を貫いた。

血飛沫が舞い、ホテルフロントは床に倒れた。

兵士B 「さつきと24号室、25号室のやきう民達を殺すぞ。」

兵士C 「おう。」

兵士B 「よしここが24号室だ。ドアぶっ壊して中に入るぞ。」

兵士C 「了解つと。」

ババババババババババババババババ  
バコオンツ!!!

兵士B 「奴らに銃弾をお見舞いして引き上げるぞ。」

数人の兵士が24号室に入ったが、誰一人として足元付近にピンと張られたピアノ線に氣づいてはいなかった。

兵士B 「んっ……。グッ

兵士B 「なんだこれ? 糸?」

ガラガラガラツ!!!

兵士Bがピアノ線に引っかかると、玄関に置かれていた装飾物などが大きな音を立てながら床に落下した。

兵士B 「まずい!!! 起きる前に急いで奴等を殺して逃げるぞ!!!」

兵士B達が徐にベッドに走り、手に持ったサブレッサー付き自動小銃をベッドの膨らみ目掛けて撃ちまくった。

兵士B「よしこれで確実に……」

多(。(。(。「残念やったな、兵士さん達。」

多(。(。(。「ベッドの膨らみは枕を詰めたものやしワイと原住民はさっきの音でお目目パツチリやで。」

多(●(●(。「つてことで全員ぶつ潰す。」

兵士B「う、撃て撃て撃てええええ!!!」

兵士達が撃つよりも前にハーミットパープルは兵士達を薙ぎ倒した。

兵士B「グワアアツ!!!」

多(。(。(。「ふう……」

多(。(。(。「こつち終わつたで原住民。」

(。(。(。「ああ。廊下にいた奴らも全員倒したよ!!!」

多(。(。(。「敵はこれで全部かな。」

(。(。(。(。「にしてもよく敵が夜襲をかけてくるつて分かったね。」

「別に分かってたわけではない。ただ敵の本陣に近づいたのだから、こういうこともありえるから対策しただけや。」

「にしてもベッドで寝ずにバスルームで寝てたから体が痛いよ。」

「じゃあ原住民はベッドで寝てたほうがよかったな。」

原住民はベッドを見る。

ベッドは銃弾によってどこもかしこも穴を開けられ、蜂の巣のようになっていた。

「……」

「バスルームで寝たおかげで体力が回復したよ!!!」

「そうやる?」

「ああ!!」

「ワ。ハレ。見事に並んで敵が気絶してるなあ。」

「起きたんかフェリス。」

「ワ。ハレ。ああ。」

「いやあ。俺ら今まで殺気を浴び続けてたせいで音や視線に敏感になったね。」

「そうやなあ…。スタンドを手にする前までは信じられない生活や。」

／＼i、。ワ。ハレ「私はそうでもないけどね。」

（。・ω・、）「へええ。意外。」

／＼i、。ワ。ハレ「なんだよ意外って!!こう見えても私、生きごたえのある生活送ってきたのよ。」

シ（。）（。）（なんや生きごたえって。）

（。・ω・、）「またまた。」

ゴツ!!

フェリスの肘が原住民のみぞおちに入った。

（。・ω・、）「うげっ!!!」

／＼i、。ワ。ハレ「なんだって?」

（。・ω・、）「なんでもありません。」

ふらふらと一人の兵士が地面から立ち上がる。

兵士C「ク、クソが…。」

兵士C「調子に乗りやがって…。」ジャキッ

S

兵士Cが銃をやきう民達に構える。

兵士C 「死ねえ!!」

ザ・ワールド 「無駄アツ!!」

兵士C 「ぐおわっ!!」 ドカツ

／—i、。ワ。ハレ。「よしもう一発…。」

多(。(。(。(。(。(。(。「さてフェリス。また気絶させる前に、ちようにいいしこいつらに組織の内情を喋ってもらおうや。」

／—i、。ワ。ハレ。「あつそう。私は今すぐにぶっ飛ばしたいけどね。」

多(。(。(。(。(。(。(。「ハーミットパープル。奴を縛りあげろ。」

兵士C 「ぐっ…。」

多(。(。(。(。(。(。(。「さて、お前らの組織の名前は？」

兵士C 「…。」

多(。(。(。(。(。(。(。「おい黙ってるつもりか？」

兵士C 「フツ、誰がてめえらなんかに。」

ドコオンツ!!

多(。(。(。(。(。(。(。「次はもつと強く殴るで。」

兵士C 「クソが…いてえ…。分かったよ分かった。」

兵士C 「…巨神<sup>ティーターン</sup>革命だ。」



「…ω・、」中二病的なセンスだね。」

「…( ) ( )」で。お前ら組織の人数は？」

兵士C「…スタンド使い以外も含めたら100人ぐらいだ。」

「…( ) ( )」でその組織はなんのために存在するんだ？」

兵士C「ある目標があるはずなんだが、俺は殺して殺して暴れまわるためだけにこの組織にいる。この組織の信念なんて興味ねえ。」

「…ω・、」「クズ野郎めが。」

「—i、。ワ。ハレ」この尋問が終わったらボコボコにしてやる。」

「…( ) ( )」「…じゃあスタンド使いの人数は？」

兵士C「…知らん。」

「…( ) ( )」「知らんやと？」

やきう民が兵士Cの胸ぐらを掴む。

「…( ) ( )」この日本で自動小銃を持っていながら知らんやと？」

「…( ) ( )」そんな訳ないやろ!？」

兵士C「…。俺らは所詮下っ端だ。ボスの顔はおろか、ネガシマ以外のスタンド使いの存在を知らねえ…。」

「…ω・、」「ネガシマ？」

兵士C 「ぐ……。」

兵士C 「だ、誰も知らねえ!!」

／—i、。ワ。ハレ「おい。」

シ(。(。(。「ネガシマとかいう奴は誰なんだ？」

兵士C 「そ、それだけは口が裂けても言えねえ。」

シ(。(。(。「ハーミットパール。締め上げる!!!」

兵士C 「うぐつ!!!ぐぐぐぐ……」

兵士C 「ぐわあああああッア!!!!」

兵士C 「分かった喋る喋るから誑してくれ!!!」

／—i、。ワ。ハレ「意外とあっさり喋るな。」

シ(。(。(。「ネガシマってのは誰のことや？」

兵士C 「…今日の作戦で唯一のスタンド使いだ。」

兵士C 「今、ホテル前の車内で待機している。」

兵士C 「使えねえスタンド使いさ。」

(。・ω・。(。「ちよつと待て。え、いるのか？」

兵士C 「あ、ああ。だが俺らの作戦が成功すると踏んでいるから今日は来ないだろう。」

多(。(。(。(いや間違ひなく来るはずや。組織のスタンド使いなら猶更や。)

多(。(。(。「そんな御託はええからネガシマのスタンドを教えろや。」

兵士C「し、知らねえ。」

ハーミットパールが兵士Cをきつく締め始める。

兵士C「知らねえ!! 知らねえ!!! 本当に知らねえんだ!!!」

多(。(。(。「まあこいつ等にスタンドを教えても無益そうやしな。」

／＼i。ワ。ハレ「確かに。」

兵士C「…俺らも所詮雇われだ。」

兵士C「大それた目標を掲げている組織に俺は最初から興味ねえ。ボスもただスタン

ド能力があるだけで、俺らと同じゴ…

パアンツ!!!

(。O。O。。「なにツ!!」

レハ;。|。ノ「!!」

多(。(。(。「:。」

ゴミと言いかけた兵士Cの脳天を一発の銃弾が貫いた。

廊下からある一人の長身の男がやきう民達に向かつてゆっくりと歩いてくる。

黒いコートに身を包みながらも、その男の筋肉が大きく隆起していることが分かる。

(●▲●)「…この世で大成するのは覚悟と信念がある者だけだ。」

(●▲●)「覚悟があっても信念がなければ、行先を見失った小舟のように運命という流れに流されるだけだ。」

(●▲●)「また信念があっても覚悟がなければ、帆のない小舟のように運命という流れに流されるだけだ。」

(●▲●)「貴様等は覚悟も信念もない、ただの生きる屍。屍が覚悟と信念を兼ね備える偉大な我が主君を愚弄することは私が許さんツ!!!」バアアアン!!

(●▲●)「…しかもまあよくべちやくちや喋ってくれたな。」

(、・w・、)「こりやまたやばい奴が出てきたね。」

／i、。ワ。ハレ。「そうやな。」

／i、。ワ。ハレ。「ただどすごい覇気を感じる。」

／i、。ワ。ハレ。「ネガシマ…やっけ?」

／i、。ワ。ハレ。「こちらに向かつてくるならワイらは容赦しないで。」ドンツ!!!

(●▲●)「我が主君のためにも、巨神革命ティーターンの主の側近ネガシマがお前らを討つ。」

(●▲●) 「私のスタンド、トト神でなッ!!」バンッ!!  
 ^  
 /  
 \  
 T  
 O  
 ????  
 \  
 /  
 BE  
 C  
 O  
 N  
 T  
 I  
 N  
 U  
 E  
 D  
 :  
 /  
 /  
 /  
 —



名前： やきう民（正式名称 やきうのお兄ちゃん）

顔文字： シ（）（）（）

スタンド： 隠者の紫 （ハーミットパープル）

スタンド情報： 【破壊力 — D / スピード — C / 射程距離 — D

／ 持続力 — A / 精密動作性 — D / 成長性 — E】

スタンド説明： タロットカード9番の隠者の紫を暗示したスタンド。タロットカードの意味は「助言」「慎重」「精神」。

紫色の茨のようなスタンドであり非人型。ハーミットパープルが破壊されても本体にダメージは入らない。

念写というスタンド能力を持っており、原作ではポラロイドカメラ等電化製品に触れ対象を念写したり、砂で目的の地まで町の地図を念写など多岐にわたったことができる。

だが原作の描写では両手で数えるほどしか念写をしておらず、あまりハーミットパープル自体が活躍したことは少なかった。

この小説では血痕、窓ガラス、地面等に対象物の位置を念写したり、目に見えている物の形状や動作を立体的に映像で念写したりと作者による念写の過度な解釈が行われている。

やきう民自身の能力やセンスによってハーミットパールの潜在能力が覚醒しているという風に捉えてほしい。

いくら工夫したところで破壊力はD。ハーミットパールで本体を絞殺することは出来るが、スタンドに対してはほとんど無力。

だからやきう民は銃、塩、酒などの環境物を用いて戦うことが多い。(てかさうしないとやきう民が勝てない。)

人物説明： 本作の主人公。年齢24歳。職歴はコンビニアルバイトのみ。高卒。大学には通う気もなかったが、通えるだけの精神力も能力もなかった。

第一話でやきう民は「お前らが一番欲しいスタンドなに？」というスレでハーミットパールと書いたことでスタンド能力に覚醒し、以後ハーミットパールを操る。レス番号は10と比較的早めに書き込んでいる。

もし他の書き込みを見て、更に強力なスタンドであるヘブンズドアークリムゾンなどを参考にしてチートスタンドを書いていけば様々なスタンド使いに楽に勝利を取っていたかもしれない。やきう民が戦う動機は一話で死んだコンビニバイトの同僚であるJKちゃんへの弔いと尊敬の面が大きい。

能力に覚醒した責任とそれを簡単に人へ振りかざす他のスタンド使いへの怒りが彼を精神的・能力的に強化している。



やきう民・原住民・フェリスのチームではリーダーでありブレインでもある。ちなみにやきう民はたまにフェリスと死んだJKちゃんを重ねている。

タロットカード通りの性格をしている。

けっこうムキムキ。髪がふさふさ。

名前： 原住民

顔文字： (・・ω・・)

スタンド： マン・イン・ザ・ミラー 鏡の中の男

スタンド情報： 【破壊力】 C / 【スピード】 C / 【射程距離】 C

(鏡の中では数百m) / 【持続力】 D / 【精密動作性】 C / 【成長性】

— E —

スタンド説明： 5部のイルーゾオのスタンド。鏡を出入口として対象を「鏡の中の世界」に引きずり込む能力を持つ。

原作では圧倒的な初見殺し性能を活かして、ジョルノ達を追い詰めた。

だがこの本編では能力が敵に知られていることも多く、必中必殺の一撃を敵に与える機会は少ない。(じゃないとすぐ話が終わる。)

このスタンドの弱点である、対象を目視しないと鏡の中の世界に連れ込めないのをや

きう民のハーミットパープルによる本体の念写で上手くカバーすることが多い。

やきう民と原住民は能力・人格共にベストマッチである。

この小説では鏡を投擲し、鏡の中の世界を通して投擲先に出たり、鏡を用いてスタンドエネルギーだけを鏡の中の世界に引きずり込んだり、不純物を取り除いたりと多岐にわたって活躍している。

人物説明： 2話から登場。年齢24歳とやきう民と同年齢。職歴は小さめの企業に就職していた。意外と学歴もよい。

そんな経歴のため社交辞令や道徳心、マナーなどはしっかりとしている。

スレに書き込んだことによりマン・イン・ザ・ミラーを発現。レス番号は26であった。

いくら道徳心があるといってもスタンドを得た喜びと興奮でマン・イン・ザ・ミラーを発現した後に600円相当の食い逃げをした。

比較的小さめな犯罪なのとそれをやきう民と会った後も後悔しているのは彼の人柄ゆえである。

先述の通りやきう民とは相性が良く、互いに相棒のように感じている。

戦う動機は第三話の同僚と部下を傷つけられた怒りと、今後このような傲慢な悪を生み出さないためである。

スタンド使いと会うたびに12話のように俺もこうなっていたかもしれないと考えている。

他のssでは「俺」ではなく「僕」、性格も弱々しいことが多くやきう民より地位が下であることが多い。

この作品では戦闘のときは「俺」普段の時は「僕」である時が多いがあまり定まっていない。定まっていない理由は作者がその場のノリで書いてあるからである。

やきう民とは対等な関係性である。

出会いが出会いな為にフェリスにからかわれることも多く、よく漫才のような喧嘩をしている。

黒い服を着ていることが多い。禿げている。フェリス曰く顔が不細工。

チームの中ではスタンドの便利性ゆえ、戦闘回数が多い。

名前： フェリス

顔文字： /<rb>i、。ワ。ハ

スタンド： 一世界</rb><rp>( </rp><rt>ザ・ワールド</rt  
><rp>( </rp><rt>ザ・ワールド</rt

スタンド情報： 【破壊力 | A / スピード | A / 持続力 | A

／ 射程 — C ／ 精密動作性 — B ／ 成長性 — B

スタンド説明： ご存じ時を止めることができる能力を持つ。最強にして最恐であるD I Oのスタンドである。

最後の番号である21番目のタロットカードの世界を暗示したスタンド。

タロットカードの意味は「完成」「統合」「成就」。

世界のタロットカードには月桂樹と四つの動物に囲まれた乙女が描かれている。

原作ではD I Oは戦いの中で成長し、時を止める秒数が段々伸びている。

D I O自身の発言によらずれ一時間程度時を止められるようになる可能性が高い。

これはまずいのでこの小説では停止時間は5秒固定とさせていたたくのをご了承願いたい。

人物説明： 7話から登場。年齢17歳。登場した話で大体のフェリスの身辺情報を敵から言われた。

端折りながら説明すると小学校、中学校までは順風満帆な生活を送っており、優しい父親と母親に囲まれた恵まれた家庭環境であった。

フェリスは勉強ができ、そこそこよい高校に入学し普通の女子高生生活を友人達と満喫していた。

だが父親が事故を起こし、そんな幸せな生活は音を立てて崩れ去ってしまった。

母親が精神病院に入院してからフェリスは犯罪行為に手を染めるようになり、高校中退。世界そのものを憎んでいた。

万引きやスリ、窃盗、置き引きなどを繰り返し、母親にそのお金を仕送りしているうちにあのスレにザ・ワールドを書き込む。

ザ・ワールドを発現してからも殺しはしなかったが、犯罪をする日々は変わらなかった。

だが真弓に遭遇。真弓の正義の心と黄金の精神に触れ、フェリスの胸に覚悟と正義が宿った。

戦う動機は組織を倒すことが真弓のような人間を目指すための一つのステップだと考えているからであるのと、正しい白の中にいるため。

そして最大の理由は恩人である真弓を救出するため。  
今でこそ性格、口調はキツイが昔はふんわりしていた。

やきう民のことを真弓と同じ覚悟を持った人間。原住民のことはアホで馬鹿だが、やるときはやる男だと認識している。

小説ではそのチート能力ゆえ途中から戦いだすことが多い。

だからチームではフィニッシャーとして活躍することがほとんど。

名前： 真弓

顔文字： (・・・ω・・)

スタンド： ノトーリアス・B・I・G

スタンド情報： 【破壊力 | A / スピード | ∞ / 射程距離 | ∞

/ 持続力 | ∞ / 精密動作性 | E / 成長性 | A】

スタンド説明： 5部で登場した死んでから能力が発動する珍しいタイプのスタンド。

一応生きていてもスタンドとして操作できるが、一切能力はなく、おそらく攻撃力も弱い。

まだこの小説で真弓が出てきたのがほんの少しなので、活躍の機会が8話しかない。

原作では分からないが、この小説では真弓自身が死から復帰した場合ノトーリアス・

B・I・Gが元の状態になる。

人物説明： 7話から登場。年齢25歳。元チンピラ。先輩から誘われて借金取りをしていた。犯罪歴多数。

4人の中で最も筋肉質で、最も対人能力が高い。暴行事件で捕まっていたが、最近出所した。

出所して半年余りが経ったとき、スレにおふぎけでノトーリアス・B・I・Gと書いて

た。

暴行罪で捕まった原因はある人物の借金取りをしようとした際に、その人の娘に同僚が手を上げたことであつた。

真弓は無関係の娘に手を上げたことに激怒し、同僚を殴つた。それを見ていた他の同僚に殴られたが全員失神させた。

その後真弓は組から追い出され、逮捕された。

その家庭からは一切の感謝はなかつたが、真弓はしようがないものだど認識。

出所後は全ての犯罪行為から手を洗い、フェリスと出会う。

現在の真弓の行方はまた後のストーリーで。

◇（ ）（ ）「こんな話数稼ぎに付き合ってくれてサンガツや!!」

◇（ ）（ ）「あともうネタ付きそうやから、ワイが戦う敵のスタンドを募集するで!!」

◇（ ）（ ）「まあ教えてくれたスタンド全部を出演させるわけやないが、参考にさせてもらつて出来る限り出させてもらおうで!!」

◇（ ）（ ）「ただ、アニメで放送してない6部以降のスタンドはアニメ勢のためにも出せないんや。すまんやで。」

ミ( ^ ) ( ^ ) 「本編でそのスタンドのスタンドバトルがもつと見たかったやつとか言っ  
てくれると嬉しいで!!」

ミ( ^ ) ( ^ ) 「ほなまたな!!」



## 運命のJ 2

(●▲●)「さあ…。早速始めようか。」サツ

コートから素早く慣れた手つきでコンバットナイフを取り出し、逆手にして右手で持った。

／—i、。ワ。ハレ「トト神のスタンドって確か予知能力だっけ。」

シ。(。(。(。「ああ。トト神のスタンドは漫画になっていて、時間と共に浮かび上がる漫画が未来を写し出す。やがキングクリムゾンのように攻撃能力もなければ、描かれる未来も抽象的や。」

(・・ω・・)「俺らのスタンドの相手にまったくならないね。」

(●▲●)「…幸運たる運命とはいったい誰のもとへ訪れると思う？」

(●▲●)「それは能動的に行動し、自ら運命を掴みに行く者だ。」

(●▲●)「私はポインゴのような受動的な男ではない。真正面から対峙し、貴様等の弱さを死を持って教えてやるツ!!!」

シ。(。(。「はえ、いい心がげやないか。だが一点、テイター鬼神革命ターに属してること

除けばやがなッ!!!」

◇(、)(、)「ハーミットパープルッ!!!奴を縛り上げる!!!」

ハーミットパープル「∴。」グワアンッ!!

(●▲●)「とろいな。実にとろい。」シュッ!ザッッ!!

スタンドを使いもせず、ネガシマはその身一つでハーミットパープルの攻撃を避けた。

◇(、)(、)「なんやこいつホンマに人間か!？」

／—i、。ワ。ハレ「じれつたいなやきう。私のザ・ワールドで片を付けるッ!!!」ビュンッ!!

ザ・ワールド「∴。」バアアアン!!!

(●▲●)「ならば私もスタンドを使わせてもらおう。」バッ!!

黒いコートから一冊の漫画、もといトト神のスタンドを出した。

ネガシマはトト神のスタンドを見て、未来を確認しようとした矢先に、

／—i、。ワ。ハレ「無駄無駄無駄無駄ッア!!!」

(●▲●)「なにッ!!!」

フェリスがネガシマにトト神のスタンドを読ませないように妨害した。

(●▲●)「…なるほど。」ザツツ!!

／—i、。ワ。ハレ(こいつ、反射神経が人間離れしてやがる!!!)

(●▲●)「意外と賢いじゃあないか。」タツタツタツ!!

／—i、。ワ。ハレ「どこ行くんだてめえ!!!」

ネガシマは一転、やきう達の反対方向へと走り出した。

そのスピードは速く、10m、20mと距離をどんどん離された。

ホテルの長い渡り廊下の端のほうまでネガシマは走り切った。

(●▲●)「…。」ドカツ!!

シ(。(。(。「なんやあいつ。走り出したと思つたら、ずっと先にある部屋に飛び込んだぞ?。」

(、。ω。。(。「なにか策でもあるのか?よしフェリス。一旦様子を見…

／—i、。ワ。ハレ「待て待て待てエツ!!」ドタドタドタ!!!

シ(。(。「ちよちよちよちよ待てやフェリス!!!罫かもしれんのやぞ!!!」

(、。ω。。(。「あのバカ…。俺達も追いかけよう!!!」

シ(。(。(。「ああ。」

シ(。(。(。「…いやでも意外と得策かもしれんな。」

（　・　ω　・　）「…？」

多（　）（　）「まあしつかし結構足早いなフェリス。」

（　・　ω　・　）「足腰がスリで鍛えられたらしいよ。」

多（　）（　）「最悪やな。」

／　—　i、　。　ワ。ハレ「アホの原住民は私のこと馬鹿だっと思ってるだろうけど。」

／　—　i、　。　ワ。ハレ「勝利の確信がある突撃は愚策ではないんだぜツ!!!」

／　—　i、　。　ワ。ハレ「むしろ何も行動せずにあいつに予知されればこちらがやられる

!!!」

／　—　i、　。　ワ。ハレ「…ここがネガシマが逃げ込んだ部屋か。」

／　—　i、　。　ワ。ハレ「鍵が掛かってないことから、客のいない空き部屋に逃げ込んだ

らしいな。」

／　—　i、　。　ワ。ハレ（ネガシマが中でどんなことをしてくるか分からない。ここは時

を止めて、何もさせずに奴を倒す。）

／＼i、。ワ。ハレ「ザ・ワールドッ!!!」  
 ザ・ワールド「…。」ブオンッ!!

／＼i、。ワ。ハレ「これより静止時間5秒以内にッ!カタをつけるッ!!!」バアンッ  
 !!!

／＼i、。ワ。ハレ「ザ・ワールド!!!」ザンッ!!  
 バコオンッ!!!

／＼i、。ワ。ハレ(まずは扉を破壊するッ!)  
 フェリスは扉を破壊すると、室内に侵入した。

辺りを見回すも中には誰もいなかった。

静止した時間の中で動くものは何もない。静寂であるのはあたりまえである。

それでも異様な静けさであった。キチツと整えられた家具とベッド、何一つ汚れていない室内。

静寂の中に微かな緊張感が走っている。

フェリスは全ての部屋を目視するが、ネガシマの影は見えなかった。

その時、フェリスは自分の右足が何かを引っかけた感触を感じた。

レハ; |。ノ「これは糸ッ!」

レハ; |。ノ「これはまさかやきうが侵入者を撃退したように…、糸の先には…。」



ドゴオオオンツ  
!!!!!!

手榴弾は息を揃えたように一斉に爆発し、ネガシマが逃げ込んだ部屋は瓦礫に埋もれた。

爆発した手榴弾は内部に含まれている金属破片を無作為に放出する。

だがスタンドエネルギーを持たない破片はザ・ワールドが盾となり、フェリスの肉体に到達することはなかった。

破片を防げたものの、爆発の衝撃でフェリスは廊下の壁に叩きつけられた。

レハ；。―。ノ「…く、クソつたれ…。」ハアハア

カツ、カツ、カツ、カツ、カツ

(●▲●)「まだここに来てから一度も予知していないが、私は車内で既に兵士達が敗北しフェリスが私に突っ込んでくるところまで予知していた。」

(●▲●)「だから予めこの部屋に罠を仕掛けさせてもらった。」

レハ；。―。ノ「…だから兵士達と一緒に来なかったのか。」

レハ；。―。ノ「そしててめえ!!! なんてあの部屋に行ったはずなのに…。」

レハ；。―。ノ「無傷でいるんだツ!!」

(●▲●)「それは君が知る必要のないことだ。」

(●▲●)「安心しろ、フェリス。痛みは一瞬、気がつく頃にはあの世だ。」

レハ；。―。ノ(今、私の体内では壁に激突した衝撃で骨と関節に相当のダメージが入っている!)

レハ；。―。ノ(しかもさつき時を止めたせいでかなりのスタンドパワーを消費した。)

レハ；。―。ノ(正直、ここから奴に勝てる未来が見えねえ。)

(●▲●)「自分が死ぬ時くらい、秘めたる思いを口にしたらどうだ？」

レハ；。―。ノ「そんなことするわけねえだろ」

(●▲●)「なに？」

／―i、。ワ。ハレ「私はまだ死なないからだツ!!」

／―i、。ワ。ハレ「ザ・ワールド!! 奴に拳を叩きこんでやれ!!!」

フェリスの闘気に反応したザ・ワールドはネガシマの正面で素早く大きく拳を振りかぶり、力を振り絞り殴った。

だがネガシマはその行動を瞬時に理解し拳を左に避けると、手にしたコンバットナイ





レハ；。―。ノ。「…一つ聞きたいことがあるネガシマ。」

レハ；。―。ノ。「何故ただのナイフがザ・ワールドを斬れたんだ…？」

(●▲●)「いいだろう。それはこのナイフを製造する際に物質と同化しているトト神のスタンドを少し混ぜ込んでいるからだ。」

(●▲●)「同様にしてデザートイーグルの銃弾もスタンドに触れることができる。」

(●▲●)「我が組織お手製の私専用の秘密兵器だ。」

(●▲●)「今日が初の実戦で効くかどうか分からなかったが、どうやらちゃんと効いたようだな。」

(●▲●)「質問は終わりか？フェリス。」

(●▲●)「では、始末させもらおう。」

コンバットナイフの刃先が倒れているフェリスに向かう。

刃が照明の光を反射し、妖しく煌めく。

／―i、。ワ。ハレ。「…これでよお、私のちよつとした時間稼ぎは終了した訳だ。」

(●▲●)「なにイツ!!」

ネガシマは慌ててフェリスから離れ、辺りを見回し身構える。

遠く離れた先にやきう民がいるだけであつた。

(●▲●) 「驚かせやがって、遠い場所にやきう民がいるだけじゃあないか。」

(●▲●) 「…待てよ、やきう民だけ…?」

(●▲●) 「…まさかッ!」

／—i、。ワ。ハレ「今更気づいたのかあ!？」

ネガシマが自分の持つコンバットナイフに視線を移す。

そしてコンバットナイフが光を反射する鏡になっていることに気づく。

／—i、。ワ。ハレ「コンバットナイフの刃の部分に写る原住民の姿によおッ!!」

／—i、。ワ。ハレ「原住民は。」

(●▲●) ／—i、。ワ。ハレ「鏡の中の世界にいるッ!」バアアアン!!

ズギヤアアアン!!!

気づいた時にはネガシマの背後に先程の兵士の自動小銃を構えた原住民が出現していた。

(、。ω。、) 「…お前のコンバットナイフを出口にして鏡の中の世界からこっちに戻ることができた。」

(、。ω。、) 「感謝するぜ。そして吹っ飛びなッ!!!」ガチ

(、。ω。、) 「地獄に向かってッ!!!」ガチャッ!!

ババババババババババババババババババババババババ

ゼロ距離から何十発もの弾丸が放たれる。

葉莖が次々地面に落ちてカラカラ音を立て続ける。

煙が廊下全体に充満していく。

それでも原住民の手は一切ぶれず、銃口はネガシマを捉え続けた。

弾はネガシマに向かって全て撃ち尽くされた。

(・・ω・・)(「ふう…。」)

(・・ω・・)(「大丈夫か、フェリス?」)

／—i、。ワ。ハレ。「地面に倒れてる私を見て、どこが大丈夫に見えるのよ。」

／—i、。ワ。ハレ。「…助かったわ。ありがとう。」

(・・ω・・)(「ならよかった。」)

レハ;。|。「でも少し、本体にダメージが入りすぎたかも…。」

(・・ω・・)(「ネガシマは倒したから、そこで安静にしてるんだ。」)

(・・ω・・)(「骨折、もしくは関節が少しズレかかっているな。」)

(・・ω・・)(「やきうが来たらフェリスをハーミットパープルでベッドまで運ぶよ。」)

(・・ω・・)(「すぐに来ると思う。」)

／—i、。ワ。ハレ「助かるわ。」

充滿していた煙が少しづつ広がって、ネガシマの姿が見え始める。

と原住民は思っていた。

(、○ω○)「ネ、ネガシマがいないッ!!」

(、・ω・、)「俺には確実に銃弾がネガシマの肉体を切り裂いた実感がある!!」

(、・ω・、)「それなのに何故!!」

／—i、。ワ。ハレ「原住民、上だわ!!!」

(、・ω・、)「なにイツ!!」

(●▲●)「ふうんっ!!!」

ザクツツ!!

(、。ω、)「うああああっ!!!」

天井に張り付いていたネガシマが飛び降りると同時に原住民の急所目掛けてコンバットナイフを刺した。

だがフェリスの言葉もあって、幸運にも急所には当たらず肩に刺さった。

(●▲●)「ちっ!!」

(、。ω、)「マン・イン・ザ・ミラー!!!」

(●▲●)「グホッ!!」

マン・イン・ザ・ミラーの蹴りがネガシマを吹っ飛ばした。

／「i、。ワ。ハレ」そんな、ありえないわ。」

レハ；。―。ノ「あの銃弾の雨あられを受けて生きているなんて!!」

銃弾によって上半身に無数の穴が空いているネガシマの体が、少しづつ癒えていき傷が塞がっていく。

(。ω。、)「もしやお前は、吸血鬼か!？」

(●▲●)「ご名答。」

(●▲●)「私は吸血鬼だ。といつてもあくまで形式的なものだな。」

(。ω。、)「マジかよ…。」

(●▲●)「来い原住民。フェリスの次はお前だ!!」

(。ω。、)「やってみろツ!!」

(。ω。、)「マン・イン・ザ・ミラー!! 奴にラツシユをお見舞いしてやれ!!」

レハ；。―。ノ「奴に生半可なラツシユは効かねえぞ原住民!!」

(。ω。、)「え?」

マン・イン・ザ・ミラーのラツシユを悉く回避した。

(。ω。、)「う、うそだろ!!」

(●▲●)「死ねエツ!!!」

血が溢れる肩を抑えながら、ネガシマの猛攻を防ぐために、フェリスとやきうを助けるために、組織を潰すために原住民が叫ぶ。

(・ω・) 「マン・イン・ザ・ミラーツ!!」

^  
 / \  
 ————  
 T O B E C O N T I N U E D : : / / / /  
 \ /  
 ? ? ? ? ? ? ? ?  
 \ /  
 ?